

千葉県八千代市

睦 小 学 校 遺 跡

1981. 3

八千代市遺跡調査会

序 文

八千代市内の遺跡は、現在約100ヶ所近くが確認され、内容は、貝塚・散布地・古墳・城址・塚などで、そのうち、中・近世の塚が20ヶ所150基程度も確認され、県内市町村のうち1番多く分布しています。これら多くの埋蔵文化財を抱える本市において、近年急激な開発の波が押し寄せ、その変貌は著しいものがあります。山林は切り開かれ、台地は削平され赤土を露出し、谷は埋められ、自然景観は日増しにその様相を変え、忽然と住宅群が立ち並ぶ現状です。これらにより人口も増加の一途をたどり、児童生徒も増加し、それらに伴い、小中学校の校舎不足は深刻化しています。

昭和52年には校舎増築に伴い「桑納前畑遺跡」を発掘調査をして多くの成果を上げることが出来ました。

今回は、その第2次調査とも言いべきもので、木造老朽校舎を取り壊し、そこに鉄筋コンクリート製の校舎を建てる計画の為、その場所について、発掘調査を実施しました。この調査には、村田一男先生をはじめ、藤原均氏に調査を依頼し、多くの成果を上げることが出来ました。

おわりに、この調査に携わられた調査員各位に対し、厚く感謝申し上げますとともに、その他関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

昭和56年3月

八千代市遺跡調査会
会長 村田和彦

1. 本報告書は、千葉県八千代市桑納176、八千代市立睦小学校の新校舎建設に先行する発掘調査の報告書であり、以前より睦小学校北方遺跡として全国遺跡地図、千葉県遺跡No-256として報告されており、本来は、同一遺跡であるが、今回は睦小学校遺跡として調査した。
1. 発掘調査は、溝口勝美氏が昭和52年8月5日より昭和52年9月9日まで第1次調査を行い、今回は第2次調査で村田一男が行った。
1. 報告書は、第1次が「桑納前畑遺跡」であり、今回は「睦小学校遺跡」としたが、本来は同一の遺跡である。
1. 第2次調査は、昭和53年9月22日より昭和53年11月6日で発掘調査を行い、昭和53年11月6日より昭和53年12月28日まで整理を行った。
1. 第2次調査は、村田の指導で藤原が発掘を行い、同じく江尻が整理を行った。
1. 本報告書は、分担執筆であるため、各分担は、文末にその氏名を記し、編集は村田と藤原が行った。
1. 本報告書での遺構実測図は（1/100、1/80、1/60）を原則とし、遺物は1/2、1/4に統一した。
1. 発掘にあたり、第1次と同様調査会を組織して行なったので、その組織は別項に記載した。
1. 協力者及び協力団体を記す。
千葉県教育委員会、八千代市教育委員会、財団法人八千代市開発協会、八千代市立睦小学校、八千代市八千代中学校、日本考古学研究所、有限会社荒井組、千葉県教育庁文化課鈴木道之助氏の諸氏に対し誌上であるが深謝する次第である。
1. 表題は、中村暁岳氏による。

目 次

序 文 例 言 目 次

I	調査の概要	1
1	調査に至るまでの経過	1
2	調査の経過と方法	2
II	遺跡の概観	9
1	地理的環境	9
2	歴史的環境	11
3	遺跡の現状	16
III	遺構と遺物	17
1	はじめに	17
2	第1号竪穴住居址	20
	カマド	20
	遺物	23
	小 結	23
3	第1号掘立建物址	32
4	第2号掘立建物址	33
5	第3号掘立建物址	38
6	第4号掘立建物址	42
7	第5号掘立建物址	46
8	第6号掘立建物址	50
9	第7号掘立建物址	53
10	第8号掘立建物址	57
11	第9号掘立建物址	60
	小 結—掘立建物址について—	61
12	第1号溝状遺構	63
13	第2号溝状遺構	68
14	第3号溝状遺構	70
	小 結	70
15	第1号土壇	72

16	第2号土城	72
17	第3号土城	73
18	第4号土城	74
19	第5号土城	75
20	第6号土城	75
21	第7号土城	76
22	第8号土城	77
	小 結	78
23	第1・2号柱穴	78
24	第3号柱穴	78
25	第4・5号柱穴	78
26	第6・7号柱穴	78
	小 結	79
27	不明遺構	80
28	その他の遺物	81
IV	先土器時代の確認調査	85
	おわりに	87
付	陸小学校生徒発掘調査見学記	

挿 図 目 次

第1図	八千代市の位置及び周辺地形図	7
第2図	第1次調査と第2次調査との関係図	8
第3図	遺跡位置図と周辺の発掘調査がなされた遺跡	10
第4図	遺構全測図	18
第5図	第1号竪穴住居址実測図	21
第6図	第1号竪穴住居址カマド実測図	22
第7図	第1号竪穴住居址出土遺物実測図(1)	24
第8図	第1号竪穴住居址出土遺物実測図(2)	25
第9図	第1号竪穴住居址出土遺物実測図(3)	29
第10図	第1号竪穴住居址出土遺物実測図(4)	30
第11図	第1号竪穴住居址出土遺物実測図(5)	31

第12图	第1号掘立建物址实测图	32
第13图	第2号掘立建物址实测图	35
第14图	第2号掘立建物址出土遗物实测图	37
第15图	第3号掘立建物址实测图	40
第16图	第3号掘立建物址出土遗物实测图	41
第17图	第4号掘立建物址实测图	43
第18图	第4号掘立建物址出土遗物实测图	45
第19图	第5号掘立建物址实测图	47
第20图	第5号掘立建物址出土遗物实测图	49
第21图	第6号掘立建物址实测图	52
第22图	第6号掘立建物址出土遗物实测图	53
第23图	第7号掘立建物址实测图	54
第24图	第7号掘立建物址出土遗物实测图	57
第25图	第8号掘立建物址实测图	58
第26图	第9号掘立建物址·第1·2号柱穴实测图	60
第27图	第1号溝出土遗物实测图	64
第28图	第1号溝实测图	65
第29图	第2号溝出土遗物实测图	68
第30图	第2号溝实测图	69
第31图	第3号溝出土遗物实测图	70
第32图	第3号溝实测图	71
第33图	第1号土城·第2号土城实测图	72
第34图	第3号土城实测图	73
第35图	第4号土城实测图	74
第36图	第5号土城·第6号土城实测图	75
第37图	第7号土城实测图	76
第38图	第8号土城实测图	77
第39图	第3号·第4号·第5号·第6号·第7号柱穴实测图	79
第40图	不明遺構实测图	80
第41图	縄文式土器拓影图	82
第42图	G内出土遗物实测图	84
第43图	睦小学校遺跡口—A層实测图	86

插 表 目 次

第1表	八千代市埋藏文化財発掘調査一覧表	14
第2表	遺構一覧表(1)	17
第3表	遺構一覧表(2)	19
第4表	第1号堅穴住居址出土遺物一覧表	26~28
第5表	第1号掘立建物址柱穴一覧表	33
第6表	第2号掘立建物址柱穴一覧表	34
第7表	第2号掘立建物址出土遺物一覧表	36
第8表	第3号掘立建物址柱穴一覧表	38
第9表	第3号掘立建物址出土遺物一覧表	40
第10表	第4号掘立建物址柱穴一覧表	42
第11表	第4号掘立建物址出土遺物一覧表	44
第12表	第5号掘立建物址柱穴一覧表	48
第13表	第5号掘立建物址出土遺物一覧表	49
第14表	第6号掘立建物址柱穴一覧表	51
第15表	第6号掘立建物址出土遺物一覧表	53
第16表	第7号掘立建物址柱穴一覧表	55
第17表	第7号掘立建物址出土遺物一覧表	56
第18表	第8号掘立建物址柱穴一覧表	59
第19表	第9号掘立建物址柱穴一覧表	61
第20表	第1号溝状遺構出土遺物一覧表	67
第21表	第2号溝状遺構出土遺物一覧表	68
第22表	第3号溝状遺構出土遺物一覧表	70

図 版 目 次

PL 1	遺跡付近航空写真	
PL 2	遺跡近景	
PL 3	遺構全景	
PL 4	第1号堅穴住居址(1)	
	遺構全景(上)	

	遺構内土層（下）
PL 5	第1号竪穴住居址（2） カマド（上） 遺物出土状況（下）
PL 6	第1号竪穴住居址（3）出土遺物 環型土器出土状況（上） 甕型土器出土状況（中） カマド内土器出土状況（F）
PL 7	第1号竪穴住居址（4）出土遺物
PL 8	第2号掘立建物址 遺構全景（上） 26Pの状況（下左） 27Pの状況（下右）
PL 9	第2号掘立建物址出土遺物
PL 10	第3号掘立建物址出土遺物
PL 11	第4号掘立建物址 遺構全景（上） 出土遺物（下）
PL 12	第5号掘立建物址 遺構全景（上） 黒書土器出土状況（下）
PL 13	第5号掘立建物址出土遺物
PL 14	第6号掘立建物址 遺構全景（上） 出土遺物（下）
PL 15	第7号掘立建物址 遺構全景（上） 柱穴土層断面（78P）
PL 16	第8号掘立建物址遺構全景
PL 17	第9号掘立建物址遺構全景
PL 18	第1号溝 遺構全景（上） 土層（下）

PL19	第1号溝出土遺物
PL20	第2号溝 遺構(左) 出土遺物(右)
PL21	第1号土壇遺構全景
PL22	第2号土壇遺構全景
PL23	第3号土壇遺構全景
PL24	第4号土壇遺構全景
PL25	第5号土壇遺構全景
PL26	第6号土壇遺構全景
PL27	第7号土壇遺構全景
PL28	第8号土壇(1)(出土斐南方上方より)
PL29	第8号土壇(2)(出土斐南方正面より)
PL30	第8号土壇出土遺物
PL31	その他の出土遺物

I 調査の概要

1 調査に至るまでの経過

今回の発掘調査は、八千代市桑納176番地に所在する八千代市立睦小学校の校舎改築に伴うものである。

昨年度、今回の調査地北側の畑地に校舎増築に伴う調査を行い、住居址2軒、掘立柱建物址2棟と土壇1基が確認された。

この結果から、当然今回の調査地と同一遺跡が続いていると考えられる。これらを県文化課に連絡し、指示を仰いだ。

その後、遺跡の取扱いについて、県文化課・市教育委員会社会教育課・同財務課の三者による事前協議を行い、現在木造校舎が建っている場所に建替ることなので、記録保存もやむを得ないとの結論に達した。

県文化課の指導により、市教育委員会教育長を会長とする「八千代市遺跡調査会」を下記のとおり組織し、事務局を社会教育課内に置き、9月20日より調査を開始して、11月2日に終了した。

(木原 善和)

八千代市遺跡調査会

- 会 長 市川浩一 (教育長) 昭和54年3月まで
村田和彦 (教育次長) 昭和54年4月より
- 事務局 清水盛人 (社会教育課長) ・ 木原善和 (社会教育課主事)

発掘調査団

- 団 長 村田一男 (日本考古学協会会員・同市文化財審議委員)
- 調査主任 藤原 均
- 調査員 江尻和正・森 地生・道沢 明
- 調査補助員 伊藤重幸・城前喜英
- 作業員 吉川志代・白井とき・鈴木登代子・立石とみ・高橋道子・白井和子・鈴木時子・立石きく・黒沢とよ・中台わか・志尾忠夫・石田勝男・金杉恒男・滑川博・高木金一・荒井和子・林しげ子・高根正子・林くに・佐藤いく・平野隆子・平野初江・泉川千代・岩井ちか・岩井たけ・岩井節子・訪源たま・高橋ふみ江・高橋たけ・高木美代・高木里子・志尾つね子・岩崎きせ・石田久・荒井久子・佐藤とみ・石田隆・荒井俊治・椿静江・飯田さと・大川ふみ・平野きみ

2 調査の経過と方法

9月20日(水) 晴れ

発掘に先立って、団長村田一男氏と、調査手順及び器材等の打合せを行う。

9月21日(木) 曇り

現地に器材を搬入し、物品・借用品目録を作成する。作業員と打合せを行う。

9月22日(金) 晴れ

現地の整備を行い、調査域に外周杭を打つ。

9月23日(土) 雨のち曇り

作業中止を決定後、発掘調査計画を再考し、確認を行う。

○ 調査方法Ⅰ

表土除去・確認調査はグリットにより行うこととし、調査域を覆う北西外の任意の点に原点を置く、N-46°-Eを行方向・N-136°-Eを列方向とする5m方眼のグリットを設定し、これを一つ置きに除去し、遺構状態の確認を行うこととした。なお、確認した遺構状態には発見順に仮遺構番号を付けることとした。

9月25日(月) 晴れ

グリットを設定し、4・6列グリットより表土除去作業に入る。

9月26日(火) 晴れ

昨日に続いて、グリット設定を行い、発掘に取りかかる。

9月27日(水) 曇り

グリット設定を終了し、発掘を行う。

9月28日(木) 曇りのち晴れ

ほぼ半数のグリットの表土除去を終る。西側のグリットは、旧校舎の構築・廃棄時の攪乱が下層まで達しており、遺構確認を断念する。

9月29日(金) 曇りのち雨

各グリット内から、土師器等の土器片を検出する。遺構状態に仮番号を付ける。

9月30日(土) 雨のち曇り

遺物整理を行う。

10月1日(日) 晴れ

6・7-Kグリットにおいて、住居址と思われる方形の遺構状態を確認する。

○ 調査方法Ⅱ

遺構検出は、住居址で十字、溝状遺構で数本の土層帯を残し、柱穴・土域ではハーフカットし

た半面を発掘後土層記録を行い、のち完掘し底面・床面出しを行うこととした。遺物は、原位置に残し下層へ確認を進めた後、記録し取上げることとした。底着・床着のものも同様とした。なお、検出進行中に遺構用途が明らかにできた順に遺構番号を付けることとした。

10月2日(月) 晴れ

昨日確認された方形の遺構状域の検出にかかる。

10月3日(火) 晴れ

全グリットの表土除去作業を終える。仮1・4・5号掘立柱建物址(以後、Hと記す)、仮1・2・3号土壇(以後、Dと記す)の検出にかかる。仮1号住居址(以後、Zと記す)、1・4・5H、1・2・3Dで土層断面図(以後、断面と記す)を記録する。

○ 調査方法Ⅱ

今回の調査域は、ローム上面が著しく擾乱を受けており、仮遺構時に掘立柱建物址とできるものがなかったため、列群をなし形態が明らかにできるものを掘立柱建物址とすることにし、土層を個別に実測したものもあるので、遺構平面・同断面実測(以後、平面・断面と記す)について統一記録した。なお、周辺細部の確認を経ても建物列群とできないものについては柱穴とした。

10月4日(水) 晴れ

仮2H、仮1・2号溝状遺構(以後、Mと記す)、仮3・4・5・6・7号柱穴(以後、Pと記す)の検出にかかる。仮2H、4・5・6・7Pで断面図を記録し、1・2Dの写真撮影を行う。なお本日、仮1Zを1号竪穴住居址、仮1Hを1号掘立柱建物址と決定した。

10月5日(木) 雨

遺物及び図面整理を行う。

10月6日(金) 雨

遺物及び器材整理を行う。

10月7日(土) 晴れ

1Zで遺物出土位置平面図、1Hで平面を記録する。

10月8日(日) 晴れ

仮3Hの検出にかかる。仮2H、仮1・3M、仮4・5・6・7Pで断面、仮3Dで平面図を記録する。1Z、仮3Dで写真撮影を行う。なお本日、仮2・3Hを2・3号掘立柱建物址と決定した。

10月9日(月) 曇り

1Zで断面図、3・仮4Hで土層図、仮4・5・6Pで平面図を記録する。なお本日、仮4・5Hを4・5号掘立柱建物址と決定した。

10月11日(水) 曇り

5 Hで土層図を記録する。なお本日、仮1 Mを1号溝状遺構と決定した。

10月12日(木) 晴れ

仮8 Dを検出し、出土した甕の平・断面図を記録する。2 Hで写真撮影を行う。

10月13日(金) 晴れ

1 Mで平面図を記録し、写真撮影を行う。1 Zでカマド断面図、仮8 Hで断面図を記録する。

なお本日、仮2 Mを2号溝状遺構と決定した。

○ 調査方法Ⅳ

住居址のプラン出しは、床出しを先行した後、壁・壁溝・柱穴を検出して、平面・エレベションを記録した。その後、カマドは十字切りして覆土・構造を記録し、床・壁・柱穴とともに切断して基底を確認することとした。

10月14日(土) 晴れ

1 Zでカマド内遺物出土状況平面図、5 Hで平面図、1 Mで遺物出土状況平面図を記録する。

仮3 Dを検出し、平・断面図を記録する。なお本日、仮3 Mを3号溝状遺構と決定した。

10月15日(日) 曇り

1 Zで平面、2・3・5 Hで断面、2 Mで土層・断面、仮1・2 Pで平・断面、仮4・5・6・7 Dで土層を各々記録する。4 H、1・2・3 M、仮4 Dで写真撮影を行う。なお本日、仮1・2・3・4・5・6・7 Pを1～7号柱穴と決定した。

10月16日(月) 晴れ

3 Hで平面、5 Hで断面を記録する。

10月17日(火) 曇り

4 Hで平・断面、1 Mで断面、3 Mで平・断面を記録し、3・4 Hで写真撮影を行う。なお、並行して遺物整理を行う。

10月18日(水) 晴れ

1 Mで土層・平面、2 Mで平面、仮6 Hで土層を記録し、3・4 Hで写真撮影を行う。なお、本日、仮6 Hを6号掘立柱建物址と決定した。

10月19日(木) 晴れ

6 Hで平面を記録し、3 Hで写真撮影を行う。なお本日、仮3・4・5・6・7 Dを3～7号土甕と決定した。

10月20日(金) 晴れ

6 Hで平・断面を記録し、全測図にかかる。

10月21日(土) 晴れ

7号掘立柱建物址と決定された列群で土層図を記録し、遺物整理を行う。なお本日、作業員

引上げを期して打上げ会を催した。

10月23日(月)曇り

7Hで断面、1・2・4Dで平面、5・6・7Dで断面を記録し、1・2・4・5・6・7Dで写真撮影を行う。

10月24日(火)晴れ

5・6・7Dで平面を記録する。

10月25日(水)曇り

7Hで平面を記録し、プレ確認のためトレンチを入れる。

10月26日(木)晴れ

8号孤立柱建物址と決定された列群で、土層・平・断面を記録し、1号用途不明遺構(以後、Fと記す)と8号土壌を決定する。

10月27日(金)晴れ

1・8H、8D、1Fで平・断面を記録する。

10月28日(土)曇り時々雨

図面整理を行う。

10月30日(月)晴れ

プレ確認調査及び遺物整理を行う。

10月31日(火)晴れ

9号孤立柱建物址と決定された列群の検出を行う。

11月1日(水)晴れ

9Hで平・断面を記録し、全測図を終了する。

11月2日(木)晴れ

全面的な写真撮影し、器材整備を行う。関係機関に終了報告をし、現地での調査を終える。

11月6日(月)晴れ

器材を返却し、遺物を八千代中学校に移送した後、整理作業に入る。

11月 遺構実測図の整理を行う。

12月 注記・接着を行い、復元可能な個体は土器実測図として完成させる。

1月 出土遺物の写真・拓本をとる。

2月 報告書の執筆・編集を行う。

補 注

- 尚、今回の報告では、便宜上、図画内の各遺構・トレンチの表現に、竪穴住居址○Z・掘立
柱建物址○H・溝状遺構○M・土塼○D・柱穴○P・用途不明遺構○F・トレンチ○Tの記号
を使用した。また、遺構としての柱穴と遺構内の柱穴との混同をされるため、遺構とした柱穴
は○P（掘立柱建物址のものは、建物址番号を10桁に付けて○○Pとし、全体が不明のものは
○○Pを欠いた番号から始めた）・遺構内の柱穴はP○と示すこととした。
- 尚、今回報告の土層記号は、下記のとおり統一した（22a>12B）

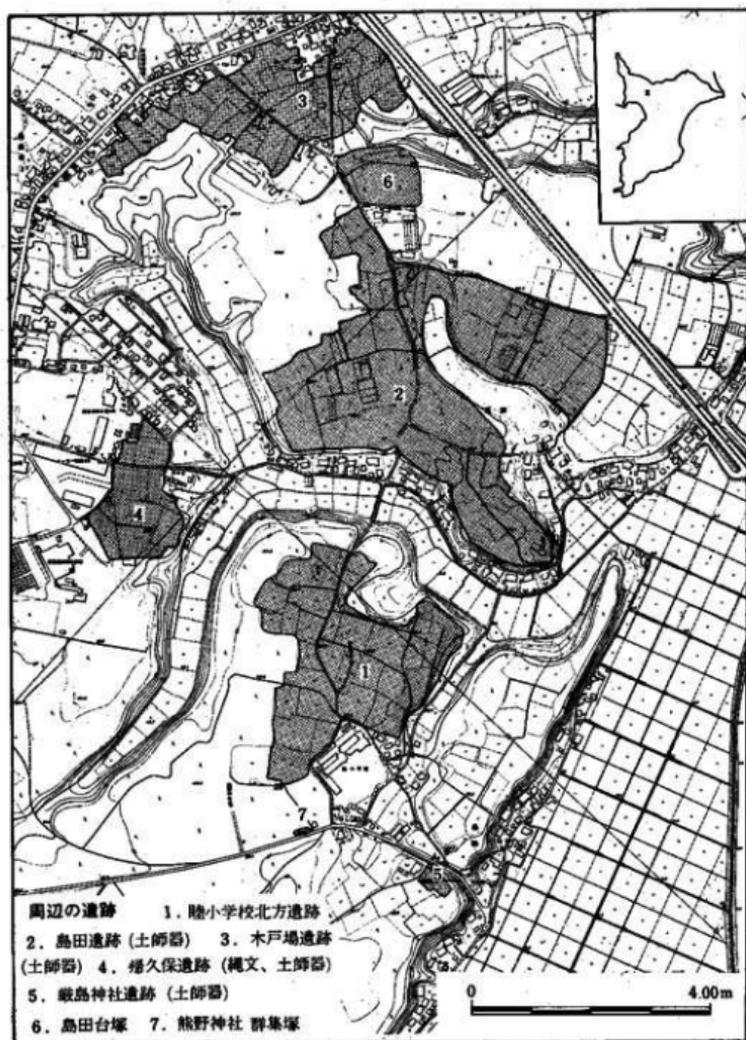
主な土層（記号）含まれる土層

記号	＜多く含む ＞少量含む +両性をもつ	一桁（土層の性格）	アルファベット（土質）
		0 地 山	A a 暗褐色土
		1 耕作・攪乱層	B b 明褐色土
		2 流入覆土層	C c ローム
		3 貼付・打付層	D d 粘土ないしはその砂
		4 分解土層	E e 木炭ないしは灰
		5 破壊設備層	F f 焼 土
		6 崩壊設備層	
		7 設備遺存層	大文字 硬質ないしは塊状
		8 焼土・環元層	小文字 軟質ないしは砂状
		9 腐食土層	

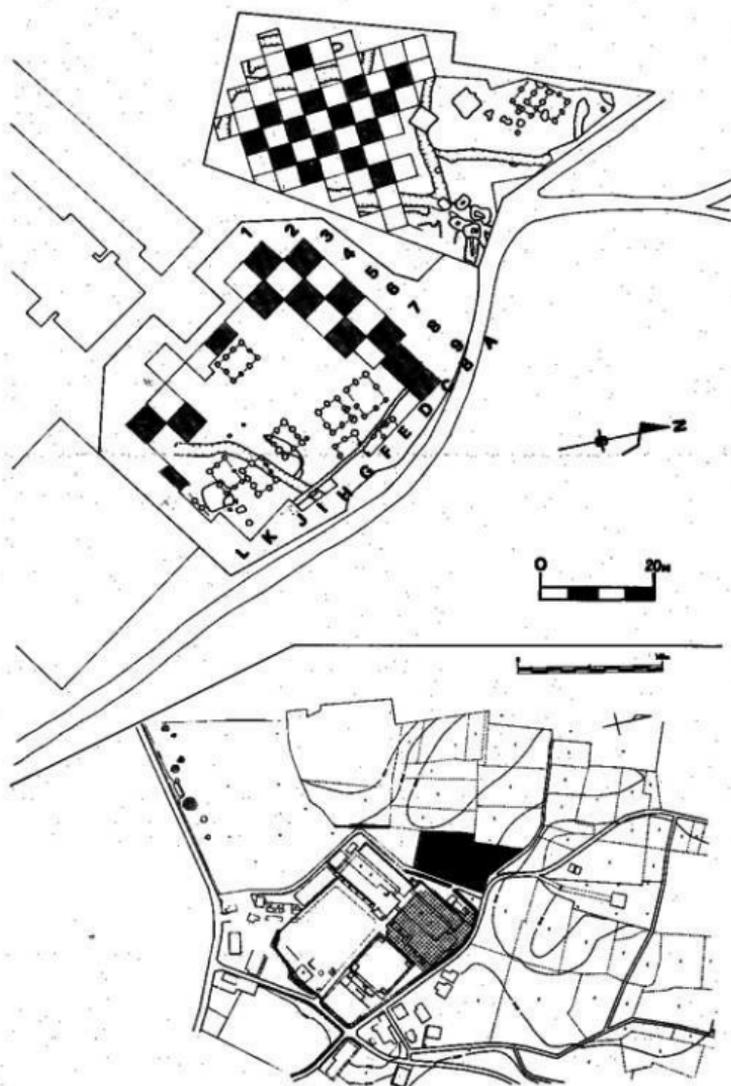
十桁（土層の色調）

- 1○ 黄褐色土層
2○ 茶褐色土層
3○ 黒褐色土層
4○ 赤褐色土層
5○ 灰褐色土層

(江尻 和正)
(伊藤 重幸)



第1図 八千代市の位置及び周辺地形図



第2図 第1次調査と第2次調査との関係図

Ⅱ 遺跡の概観

1 地理的環境

本遺跡は、八千代市桑納176番地に所在し、京成大和田駅より北に約5kmの所に位置する。この遺跡は、下総台地と呼ばれる標高約22mの台地に立地し東側に南北方向に流れる新川と北側に東西方向に流れる神崎川を望む、また新川は、印旛沼と合流する。それぞれの川は、多くの支流を持ち、その支流の水系 (river system) は、樹枝状を呈し、台地を浸食して樹枝状の開析谷を形成している。本遺跡が立地している台地も、そうした開析谷によって形成された台地の一つであり、遺跡は、台地の末端に位置するものである。下総台地は、主に更新世に形成された海成の成田層群 (砂層、シルト層によって構成される) と、その上位の関東ローム層からできている。この台地は、一般に下総上位面、下総下位面よりなり本遺跡を乗せる台地は、下総上位面に当るものである。また本遺跡の北東方向に所在し新川と合流する印旛沼は、手賀沼と同様、完新世には、海に通じていた深い入江のようなものであった (奥鬼怒湾) が、その後いまの下総台地が、気候変動による海退、あるいは、地殻変動によって隆起した、川の運ぶ土砂が堆積してとり残されて沼となったものである。沼の周辺には、ガマ、マコモ、ガガブタ、ヒシ、トチカガミ、ササバモ、クロモなど約50種の水草が生育し水性植物群落の生育地として有名である。沼周辺の台地や、遺跡が立地する台地では、マツ林、ヒノキ林、スギ林と言った雑林とユナラ、クヌギ林と言った雑木林があり低地ではオオマツヨイグサと、言った燻化植物が群落をなしている。土地利用としては、台地は、畑作地、住宅地として利用され、新川、神崎川沿いの低地は水田耕作地として利用されている。また印旛沼の水は、飲料水、かんがい用水、京葉工業地帯の工業用水として利用されている。以上本遺跡周辺の自然環境を述べたが、過去において昔の人々は、この下総台地に住み、新川、神崎川、あるいは奥鬼怒湾の資源を利用して生活していたことが推測される。

(森 地生)

参考文献

- 千葉県の自然 (1977) 千葉県自然研究会
- 桑納前畑遺跡 (1978) 陸小学校北方遺跡調査会
- 地学のガイド (1976) 前田四郎



第3図 遺跡の位置と周辺の発掘調査がなされた遺跡

2 歴史的環境

本遺跡は「陸小学校北方遺跡」として「全国遺跡地図—12、千葉県」(文化庁文化財保護部編集)では6-257と記載され、「八千代市の歴史」の巻末の文化財分布図には、市の遺跡番号40が与えられている。

遺跡の範囲は、文字通りに陸小学校の北方台地の一帯に広がっている。この遺跡がはじめて発掘調査がなされたのは、1977年夏のことで、遺跡の範囲が広いので小字名をとって「桑納前畑」と名づけている。この調査区域の東隣が今回の調査対象であり、遺構がどのように関連してくるかが最大の関心事である。

今回の調査区域の周辺遺跡の状態は前述の報告書にもあるのでここでは省き、当市域を考古学的にながめてみたい。ところで当市域のほとんどが遺跡だらけで、前述の分布図では86カ所があげられ、その後追加されて約90に達している。時期は先土器時代から江戸時代までに及び内容は多種多様であるからそれをまとめあげることは遺跡の全容を把握し得ていないので不可能である。そこで1978年度までに発掘調査がなされた遺跡を図示(第3図)し、内容は詳細を記載し得ないのでごく概略を記して目安とした。それが次の表である。

先土器時代では、村上遺跡(P)から、ナイフ形石器・有舌尖頭器・スクレーパーなどが、おおびた遺跡(M)からは有舌尖頭器が、新川の西側では萱田権現後遺跡(F)からナイフ形石器などが出土している。

縄文時代の遺跡は多いが、本遺跡から北々東2kmの佐山貝塚(A)は本市における唯一の学術調査がなされたところで、主淡系の環状貝塚で保存状態はきわめて良好であった。

弥生時代の土器を出土した遺跡は、桑橋新田(E)・萱田権現後(F)・萱田北海道(G)・神野芝山古墳群(J)・おおびた(M)・名主山(O)・村上(P)・萱田町(V)の8カ所にわたり、このうちおおびたは北関東系土器の存在を市域で最初に確認した遺跡である。これらのほとんどは北関東系と南関東系の土器が混合していて、いわゆる「印旛・手賀沼系式土器文化圏」にすべ^(注1)て入る。

桑橋新田(E)は市域で最初に方形周溝墓が発見されたところで、その土坑内から出土した鉄剣は希少できわめて注目に値する。

古墳時代の住居址では、五領期の代表はおおびた(M)であり、住居の大きさと祭祀や統治形態の様相は価値が高い。工房址では萱田権現後(F)が代表でいづれ好報がもたらされるはずである。

埴輪を伴った古墳は桑納古墳(D)で、本遺跡から南へわずか500mの台地南端であった。人物と円筒埴輪や器材埴輪をもっていた。これより古い古墳は神野芝山4号墳(J)で、大きな方墳で石枕をもっていた。終末期の古墳は村上1号古墳(P)や神野芝山2号墳(J)である。

尚、桑橋新田(E)のすぐ西側には径約15m、高さ2mの円墳が存在するので、桑納古墳と合わせ考えると、今回の本遺跡の南側には、弥生時代から古墳時代へと首長勢力が継承されていったかのような感がする。

古墳時代末期・奈良・平安時代の遺物散布地は多く、大規模に出土しているのは村上遺跡(P)である。155軒の竪穴住居址と24軒の獨立柱建物址は村上1号古墳に隣接し、各時期の構成は判明してはいない。が大集落の存在を物語っている。特に後述の「村神郷」の所在を比定できる遺跡である。当遺跡は多数の墨書土器が出土した。その他では萱田権現後(F)と今回の調査区域からも墨書土器が出土している。

本遺跡の獨立建物址と類似の遺構は、村上遺跡(P)・名主山(O)である。しかしいずれも高床式の倉庫であるか、住居であるかは不明である。「山田水呑遺跡」では、検出された竪穴住居址143軒と獨立柱建物52棟が5群にわかれること、各群が占有の園宅地をもつことが明らかにされ、郷戸・房戸の問題解明を前進させている。このことは当市域にとっても奈良・平安時代を究明する重要な課題であり、本遺跡の遺跡としての使命と重要性は古代社会解明にあるといえる。

八千代市域の地名で最初に見られるのは、「倭名抄」にある「村神郷」である。これは本遺跡より東側の新川の東南にある「村上」(O・P・R)に比定され、村神は群神と同義語で、村上にある七百余所神社は群神であると村名考証がなされている。(註3)

鎌倉時代になると「香取文書」に萱田郷と吉橋郷が見える。香取神宮の運宮を分担したもので13世紀半ばから14世紀半ばの南北朝時代にわたっている。吉橋は本遺跡の南側の桑納川をはさんだ西南側である。桑納地区が吉橋郷に含まれていたかどうかは不明であるが当時は水系ごとの支配領域と考えると、何らかの形で運宮に関係していたと思われる。

「千葉郡誌」に「宮山の屋敷跡」と題して次のようにある。本遺跡に直接関係しているので全文を引用する。

「桑納丸畑は鴻巣前畑等と連続して桑橋宮山と隣す。天正年間以前に於ては両区民ここに居住せしなるべし現に宮山間には屋敷跡頗る多く丸畑附近に長者屋敷又は屋敷跡山と称する屋敷跡を遺せる山林あり加之両区の氏神は宮山(桑橋)丸畑(桑納)に現存せり。即ち初め両区は一所にありてより天正年間に至り双方の低地に下りて今に及べりとす。陸小学校現職員室地下に貝塚ありといふ。是れ学校新築の折地均のため地下数尺を掘り下げしと発見せしものなりと云ふ」

本遺跡の小字は前畑で、北からほぼ南へかけて鴻ノ巣・丸畑・前畑・宮山と続いている。前述の丸畑の氏神とは妙見社であり、この付近に長者屋敷があって、六つもの蔵を持ち、東からここに至る道を「六蔵街道」とよばれたという長者伝説がある。本遺跡の獨立建物址が出土したことと遠い関連があるように思われる。

また職員室地下に貝塚ありという部分は、増改築をくり返した校舎なので、今となってはどの

位置が不明であり、今回の調査区域には見当たらない。

この伝説は直接に本遺跡を規定するものではないが、中世における谷津田の開田を基盤とした在地領主の発達と遺跡存在の可能性を示唆しているといえよう。

また前述の吉橋郷には尾崎に吉橋城（T）があり新川の東側、本遺跡から東南2kmの地点には米本城（S）が存在する。

中世信仰資料としての板碑が22カ所に所在し、本遺跡の東南300mの地点の墓地には題目板碑（年号不詳）1基があり、守護の千葉胤貞が1331（元徳3）年に、北方の島田・真木野・平戸などの村を中山法華経寺に寄進したので、この地域は日蓮宗の教線下にあった事のなごりである。

（村田 一男）

- 注1 千葉県文化財センター 『研究紀要3』 弥生時代 1978年 齊木 勝・深沢克友
注2 日本道路公団 『山田水呑遺跡』 1977年 山田遺跡調査会
注3 柳岡良弼著 『日本地理志料』

第1表 八千代市埋蔵文化財発掘調査一覧表

所在	遺跡名(遺跡区)	調査年	調査内容	報告書・()は調査原因
A	佐山貝塚 (26)	1974 1 1975	縄文時代(後期) 主浜系、環状貝塚 住居址・野外焼土 甕・壺・鉢(加曾利B 1-Ⅰ式・安 行Ⅰ式) ヤマトシジミを中心とした自然遺物 骨角器・石製品・土偶片	1977年 「佐山貝塚と文化財」 八千代市文化財調査報告会資料 (学術調査)
B	平戸台古墳 (24)	1971	方墳(1辺32m) 箱式石棺 人骨2体、骨片15点	1971年 「史学報」第2号 千葉県立八千代高校史学会 (土取工事)
C	睦小学校北方 (桑納前畑) (40)	1977	奈良平安時代(国分-真間期) 住居址 2軒・掘立柱建物址2軒 溝状遺構5址、土壇19基 縄文土器片、土師器甕・坏・石器片 銅銭	1978年 「千葉県八千代市桑納前畑遺跡」 睦小学校北方遺跡調査会 (小学校)
D	桑納古墳 (38)	1972 1 1973	1号古墳、円墳、径35m・高2.5m 直刀片2振、剣片1振、鉄鏃約50点 鍔飾金具片4点 2号古墳、前方後円墳、全長34m 後円部径31m・高2m 前方部に人物を、馬の尾輪を立て、 後円部にはぐるりと円筒形輪があっ た。	1979年 「八千代市の歴史」 第2章古代 八千代市 (土取工事)
E	桑橋新田 (43)	1976	弥生時代後期、住居址3軒・方形周溝 墓3基 弥生式土器、壺・甕・ヒスイ勾玉・ ガラス玉・鉄剣片2振・祭祀用土器	桑橋遺跡発掘調査団で整理中 (土取工事)
F	菅地台 (菅田権現後) (62)	1977 1 1978	先土器時代遺物、ナイフ形石器 弥生時代、住居址18軒・土壇1基・方 形周溝墓2基 古墳時代、住居址11軒、工房址(和泉 期)4軒 奈良平安時代、住居址58軒、高床式建 物址9軒・土壇1基 各期を通じて遺物多数、壺・甕・装飾 品・墨書土器	1978年 「菅田の文化財見学のしおり」 第5回八千代市文化財調査報告会 (区画整理事業)
G	笠田 (笠田北海道) (83)	1978	住居址(鬼高-国分期)約80軒 弥生式土器(後期、北関東系と南関東 系)	調査中 (区画整理事業)
H	高津Ⅱ (梅屋敷) (67)	1978	縄文土器片 不整形円形ピット	1979年 「八千代市梅屋敷遺跡」 日本住宅公団(宅造)
I	高津Ⅲ (68) 高津Ⅴ (70)	1970	平安時代(国分期) 住居址2軒 環・支脚	1970年 「千葉県八千代市高津遺跡確認調査概 報」 立正大学博物館学講座研究小報4 (高津団地)

所在	遺跡名(遺跡名)	調査年	調査内容	報告書・()は調査原因
J	神野芝山古墳群 (60)	1972	2号墳円墳1基、箱式石棺 人骨10体の追葬・墓玉13個・勾玉12 個・管玉・丸玉各1個・鉄鏃・刀子 墳丘下より弥生時代後期(長岡期) 住居址出土すに消滅した4号墳よ り石枕出土	1972年 「史学報」第3号 千葉県立八千代高校史学会 (畑地耕作)
K	保品栗谷古墳 (20)	1951	円墳1基 箱式石棺・直刀3振・刀子3振・鉄 鏃・ガラス玉4個・墓玉7個・勾 玉1個・寛永通宝2枚・人骨片	1968年 古代11号 「千葉県印旛郡阿蘇村栗谷古墳」 早稲田大学古学会 (開墾)
L	保品大江間	1951	縄文時代刺舟・材質はカヤ 縄文土器(安行式等伴出)	1951年 古代3号 「印旛沼出土の刺舟」 早稲田大学考古学会 (水路開さく工事)
M	おおびた (18)	1973	先土器時代遺物、有舌尖頭器 弥生時代後期(長岡期)住居址1軒 古墳時代前期(五領期)住居址5軒 古墳時代中期(和泉期)住居址1軒 古墳時代前期(五領期?)高床式建築 址1軒 野外焼土1基 埴・壺・甕・高環・器台・祭祀用土 器・剣形石製品	1975年 「おおびた遺跡」 八千代市教育委員会 (少年自然の家)
N	宮内北部 (村上新山) (12)	1978	用途不明整穴遺構2基 土器片・石器片	1978年 「千葉県八千代市村上新山遺跡発掘報 告書」 村上新山遺跡発掘調査団 (高等学校)
O	上高野西部 (名主山) (9)	1971	弥生時代後期(久ヶ原期)住居址1軒 平安時代(園分期)倉庫址4軒 平安時代(園分期)掘立小屋址2軒 壺・甕・環・刀子・墨書土器	1972年 「名主山遺跡」 八千代市教育委員会 (村上閉地)
P	込の内北部・ 南部 (村上遺跡群) (5~6)	1973	先土器時代遺物、ポイント5点・刺片 4点 弥生時代後期(久ヶ原~弥生町期) 住居址14軒 古墳時代末期~平安時代整穴住居址 (真間~園分期)155軒 掘立建物址24軒 性格不明の整穴遺構10基その他13基 村上第1号古墳 各期を通じて遺物多数壺・甕・環・鉄鏃・墨書土器	1974年 「八千代市村上遺跡群」 日本住宅公団 (村上閉地)
Q	上高野原古墳 (村上供養塚)	1974	供養塚(方形)1基 常滑壺2個・小皿10個・銅銭293枚	1974年 「千葉県八千代市村上供養塚発掘調査 報告書」 八千代市教育委員会 (都市計画道路)
	(村上第2塚 群)	1973	8基の塚群 銅銭223枚・小皿10枚・珠子玉6	報告書はPに同じ (宅地造成)

所在	遺跡名(遺跡系)	調査年	調査内容	報告書・()は調査原因
R	(村上第1塚群)	1973	15基の塚群中調査対象は9基 縄文土器片・土師器片	報告書はPに同じ (宅地造成)
	(村上所在塚)	1972	塚(方形、1辺18m)第1塚群の中心 銅銭(中国)6枚	1972年 「八千代市村上所在古墳調査概報」 千葉県教育委員会
	(村上古墳)	1975	前方後円墳1基 円墳1基 勾玉・ガラス玉	1979年 「八千代市村上古墳群」 八千代市都市部 (都市計画道路)
S T U	米本城址 吉橋城址 高津館城	1974~ 1975	戦国時代 遺構測量調査	1976年 「八千代市中世館城址調査報告」 八千代市教育委員会 (学術調査)
V	莚田町	1979	弥生時代住居址	調査中 (都市計画道路)

(村田 作成)

3 遺跡の現状

陸小学校北方遺跡(今回は陸小学校遺跡)の現状について述べるが、現在は陸小学校校地内・畑地・林などとなっている。現在地に陸小学校が建設される以前はどうであったか、といえば正確な所は不明であるとしかいかえず、推定するならば今回の調査で検出された近世の肥料貯蔵用の大甕が検出されたため、畑地となっていたことと考えられる。また、周囲の台地上平坦部は現在その多くが林と畑地となっている。畑地になる以前は、小学校東方の畑地に地点貝塚、土師器などの散布が認められるため、集落・建物群などがあったことが推定される。

(藤原 均)

Ⅲ 遺構と遺物

1 はじめに

陸小学校遺跡を調査した結果、第4図、第2・3表に示したような結果が得られた。以下にその概要を述べるが、仔細は別項で述べる。陸小学校遺跡を調査した結果、合計29遺構が確認された。その内容は、9棟の掘立建物址、1基の住居址、3本の溝、8基の土坑、7本のpit状遺構、1基の不明遺構、の計29遺構である。これらの配置は、以下に述べるが総体的に見るならば北西方向から東南方向にかけて集中しており、西方では第7号建物址が1棟確認されたのみである。

住居址は、調査区の南端部において確認された。この住居址から、2本の柱穴が住居址北東壁の部分から確認された。これは、住居址の北西方向にある第8号掘立建物址の柱穴であり住居址と重複している。また、住居址はその北東コーナー部にある第8号土坑とも重複している。この第8号土坑の東方向には2本のpit状遺構がある。さらに、住居址の南西方向にも2本の柱穴が確認されたが、残りは確認出来なかった。この柱穴は、掘立建物址の柱穴と考えられ、残りの柱穴は調査区域外（体育館側）に存在することと考えられる。

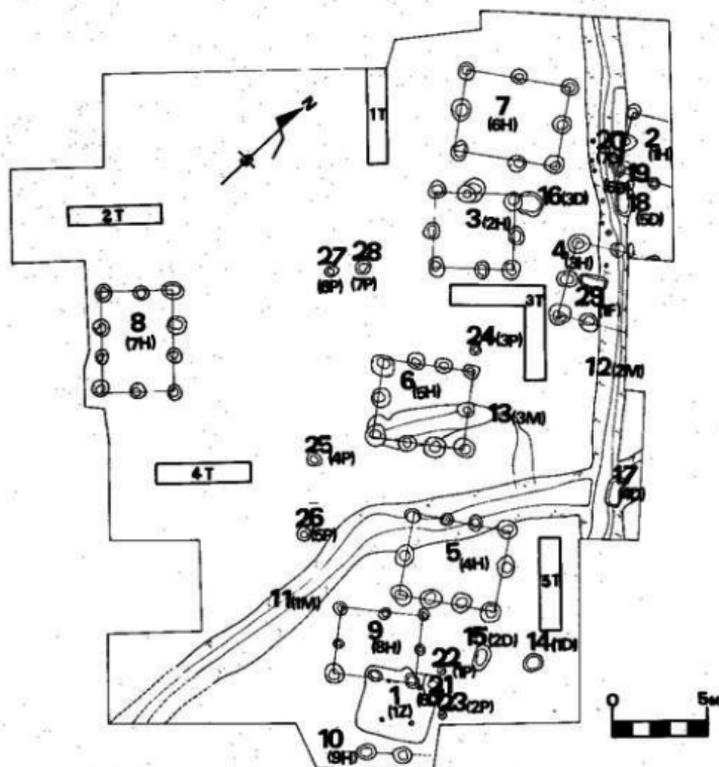
第8号建物址の北方向には、第4号掘立建物址があり、第1号溝とその一部が重複している。また、第8号掘立建物址の東南方向には第1号土坑と第2号土坑が確認された。第1号溝は、調査区の南西方向より第4号掘立建物址と重複しながら北東方向に伸びている。また、この第1号溝は北西方向から南西方向に伸びる第2号溝とも重複しており、第1号溝と第2号溝との重複部

第2表 遺構一覧表(1)

遺構番号	遺構名	パターン	主軸	形状	柱間		桁間(m)				柱数
					桁行	梁行	東面	西面	北面	南面	
2	第1号掘立建物址	A B	N-27°-W	方形	2	(2)		4.00			(8)
3	第2号掘立建物址	A B	N-41°-W	方形	2	2	4.02	4.04	4.15	4.17	(8)
4	第3号掘立建物址		N-30°-W	方形	2	2	3.96	3.93	3.92	3.90	(8)
5	第4号掘立建物址		N-31°-W	長方形	2	3	4.11	4.11	5.04	5.00	10
6	第5号掘立建物址		N-37°-W	長方形	2	4	4.03	4.03	4.50	4.52	10
7	第6号掘立建物址		N-35°-W	方形	2	2	4.46	4.47	5.23	5.24	8
8	第7号掘立建物址		N-42°-W	長方形	4	2	5.27	5.27	3.84	3.86	10
9	第8号掘立建物址		N-35°-W	方形	2	2	3.90	3.90	4.50	4.50	8
10	第9号掘立建物址		N-32°-W	(方形)				3.65			(8)

には第4号土坑が存在している。

第2号溝は、3基の土坑(第5号土坑、第6号土坑、第7号土坑)と、2棟の掘立建物址(第1号掘立建物址、第3号掘立建物址)と各々重複している。第1号掘立建物址は、第6号土坑及第7号土坑と重複しながら北東方向に柱列が伸びている。第5号土坑、第6号土坑、第7号土坑、の三土坑は各々接しており、第3号掘立建物址はその内に用途不明遺構を含みながら、第1号掘立建物址と同様柱列は北東に伸びている。第1号掘立建物址の西方向には、第6号掘立建物址がありこの南方向で第3号掘立建物址の東南方向には第5号掘立建物址が位置している。また、第2号掘立建物址の東南方向には、第5号掘立建物址が第3号溝と重複して確認された。この第5



第4図 遺構全測図

号掘立建物址の西方向には、3本のpit状遺溝と第7号掘立建物址が確認された。

遺物は、遺跡覆土（表土）より全面に出土したが、これら多量の遺物は全て擾乱中のものであり、本調査域に伴なうものとはできない。また、遺構覆土中の遺物においても、遺構に確実に伴なうものは、1号竪穴住居址出土の42点にすぎず、報告するもの多くは、遺跡・遺構に近時すると思われるものである。

遺物は、縄文時代のものと歴史時代の所産の2種に分け得るようで、遺構で明らかにできた歴史時代のものは、晩期末の一種類に限られるようで、朱彩するものが一例も見られないのに対し、内黒土師器は多出する状況が顕著であり、歴史期の本跡を反映しているようである。（藤原）

第3表 遺構一覧表（2）

遺構 番号	遺 構 名	主 軸	形 状	大 き さ (m)			カマド	柱 数
				東 西	北 南	深 さ		
1	1号住居址	N-31°-W	方 形	3.91	3.85	0.45	北壁中央	4
11	第1号溝	南西-北東		巾0.95		0.60		11
12	第2号溝	南東-北西		(巾0.65)		0.60		9
13	第3号溝	北東-南西		(巾2.45)	長7.00	0.36		
14	第1号土壇	N-15°W	隅丸方形	1.87	2.00	0.45		
15	第2号土壇	N-23°-W	隅丸長方形	2.75	2.00	1.04		
16	第3号土壇	N-50°-W	楕円形	2.60	3.12	0.40		
17	第4号土壇	N-30°-W	隅丸長方形	2.34	3.55	0.68		
18	第5号土壇	N-42°-W	隅丸長方形	3.45	1.77	1.05		
19	第6号土壇	N-42°-W	隅丸長方形	3.55	2.82	1.15		
20	第7号土壇	N-38°-W	隅丸長方形	0.52	3.25	1.15		
21	第8号土壇	N-31°-W	楕円形	1.32	1.66	1.65		
22	A 1号柱穴状遺構	N-34°-W	円 形	0.12	0.11	0.72		
	B 2号柱穴状遺構	N-40°-W	方 形	0.14	0.14	0.33		
23	3号柱穴状遺構	N-43°-W	不整円形	0.12	0.11	0.33		
24	A 4号柱穴状遺構	N-48°-W	方 形	0.11	0.12	0.39		
	B 5号柱穴状遺構	N-49°-E	方 形	0.12	0.12	0.25		
25	A 6号柱穴状遺構	N-37°-E						
	B 7号柱穴状遺構	N-4°-W						
26	不 明	N-59°-E	長 方 形	3.05	1.47	0.40		

2 第1号竪穴住居址

本址は、遺跡内南東の7Kグリットを中心として検出された、4主柱穴とカマドを伴う竪穴住居址であり、竪穴底部で、N-26°-W方向を長軸とする、378cm×373cmの隅丸方形を呈し、約20cmで巡る壁溝内面の床で18.4㎡を計かる。尚、北西コーナー・カマド東で第8号掘立柱建物址の85・84柱穴(85P・84P)に・北東コーナーを第8号土壌(8D)に、それぞれ床下に及ぶカットを受けており、周辺1m内で第1・2号柱穴が近接する関係にある。

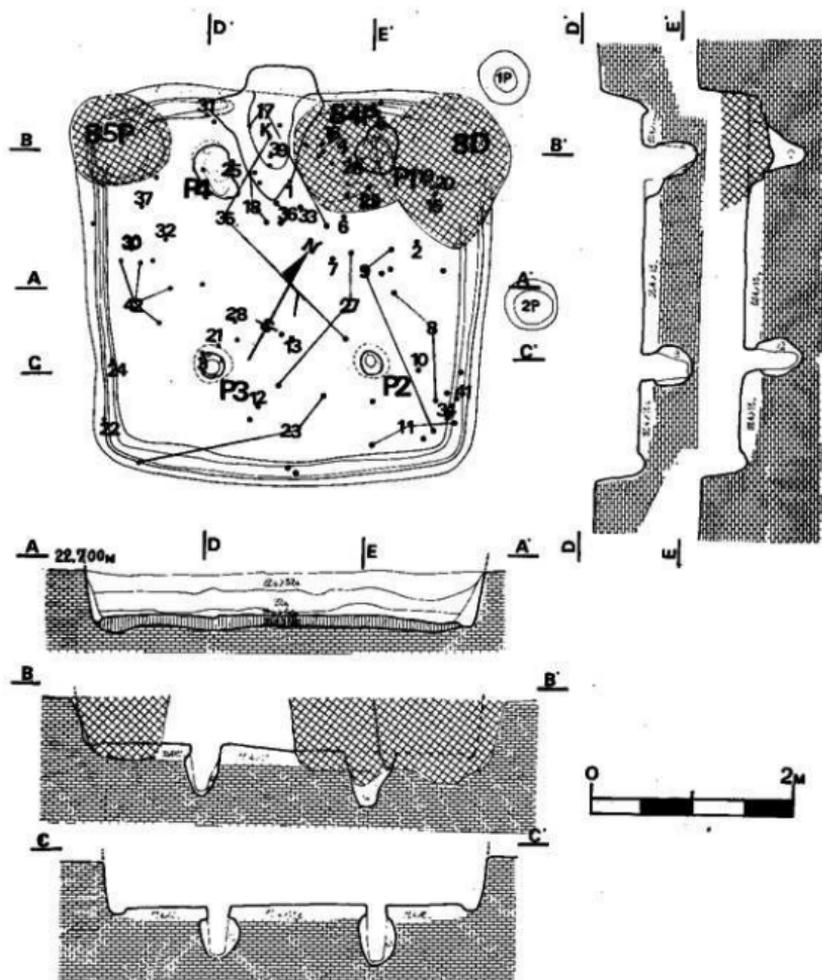
竪穴は、南・西側を旧校舎廃棄時の炭化物混入域・北で同校舎基礎部のローム・漆喰による攪乱域中のほぼ方形の暗褐色土部分として認められたが、北辺で前記した黒褐色土域の第8号掘立柱建物地域2・ローム塊混入域の第8号土壌域1は当初より認められ、上層がローム多入の層である暗褐色土2層の下に、焼土・粘土砂粒を含む黄褐色土最下層の均一的堆積で見られる覆土とは別層をなす域として見られた。尚、遺物出土は、同域よりも見られたが、この点は、遺物の項で記す。

遺構は、攪乱面より垂直に近い状態で落ち込む壁で、深度50cm程を計かる堅固な壁状を呈し、下位5cmからはハードロームが露呈している。壁下には、幅10~20cm、深度10cm弱のU字断面の壁溝が、約20cm強のローム塊少入の黒褐色土で見られる貼床層中位の深さでカマド下面を除いて全周している。炭化物・粘土粒子の密着が見られる床は、ほぼ扁平な面で見られ、焼土密着はなく、炭化物などもカマド粘土と同様に移動したと思われることから、火災などの可能性は少ない。ピットは、遺構域を除いても6ヶ所を得たが、このうち、P₁は84Pと第8号土壌にカットされ、P₂も上部で変形した状態で検出されたが、本来はP₂・P₃と同様に、径35cm強・深度50cm強の柱穴とできるようであり、規模・位置ともに主柱穴とできるものである。尚、P₂・P₃は、貼り床面が迫り出すフラスコ状を呈しており、掘り方一柱一貼り床という構築が類推できる。尚、住居址外周には、第1・2号柱穴(1P・2P)が検出できたが、他に柱穴を伴っていないため本址との関係は不明である。

カマド

カマドは北壁中央に設けられており、上部・右袖を流入土・84Pにより破壊されて欠如した不良な状態で検出されたが、N-23°-W方向を主軸とする、壁幅97cm・壁掘込み38cm・床張出し101cmの規模と、左右袖から白色粘土が使用されたことが知られる。

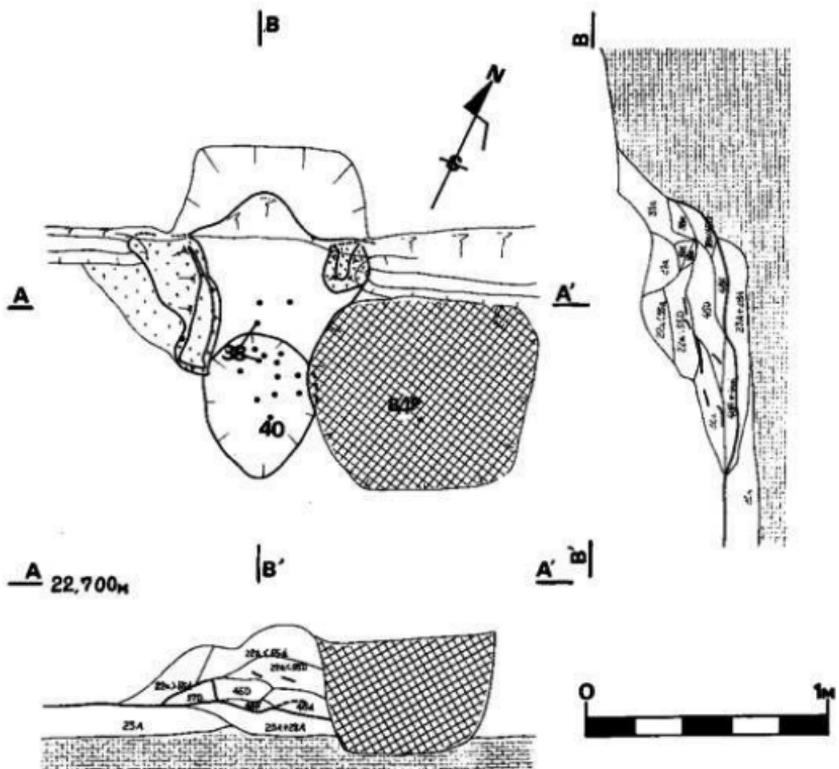
カマドは廃棄後、北よりの流入土により17・35で見られる1次の破壊を受けたようで、現出土の38・40が層序的に続くことからこの面まで欠失したようである。その後、84Pの構築により右袖とその下位を失っているが、その後も、4・16・26・29が84P内に移動する北西よりの流入土



第5图 第1号双穴住居址平面图

も受けたようである。

現状からは、焚口は不明であるが、60cm×46cmの楕円部分で約5cm掘り込込火床部が知られ、その端より段を経て続く後室部も含めた上層が燃焼部であったようで、わずかに、移動した土器片分布から天井部と思われるその痕跡が(22a<55D)残在している。右袖は一部を除いて欠失しているが、幅20cm・高さ5cm・長さ20cmの部分を検出し、左袖は、幅30cm・高さ10cm・長さ56cmが遺在していたが、いずれにも、貼り床面・芯部ともに加工した部分は認められず、直かに構築されたようである。煙道部は、現状では、緩く壁内を掘り込んだ部分で上昇しているが、攪乱土に覆われておりその継続は不明である。



第6図 第1号竪穴住居址カマド実測図

遺物

第1号竪穴住居址の遺物としたものは覆土上面の縄文片と相出した土師片より、後築遺構である。第8号掘立柱建物址84P・第8号土壇覆土内出土の土師片までを含んでいるが、これらは、いずれも古墳時代晩期末に属する遺物で、住居址廃絶後の諸条件により多様な遺存状況を示めすが本址に伴ったものといえよう。

後築遺構内出土の遺物は、他よりの流入も考えられるものであるが、84Pのものは、柱穴構築以前と思われるカマド崩壊に関する1・6・17・33と同位の流入遺物5・29とは別に、カマド北東より、4・16・26などが流入する中位の関係をも有している。4・16・26が本址の遺物で再流入したことは付近に遺物分布が見られないことから明らかである。また、第8号土壇の、15・19・20は、土壇最下覆土である、カマド核の砂および焼土にロームを混じえた土層中より出土したもので、本址に伴うものと考えられる。

遺物の取上げは、一部で同一種類を一括番号で取上げたため件数で示めすこととなるが、覆土中50件・床着20件・カマド内17件・84P内8件・第8号土壇内3件の、●印96件で記録したが、このうち、報告したものは、環15・付高台環1・長頸壺4・甕12の土師器・環2・長頸壺1・甕3・不明の蓋2の須恵器・緑釉および鉄片各1件の42件であるが、完形品とできるのは、1環以外には出土しておらず、復元完形のものも、環に3・4点を数える程度であった。

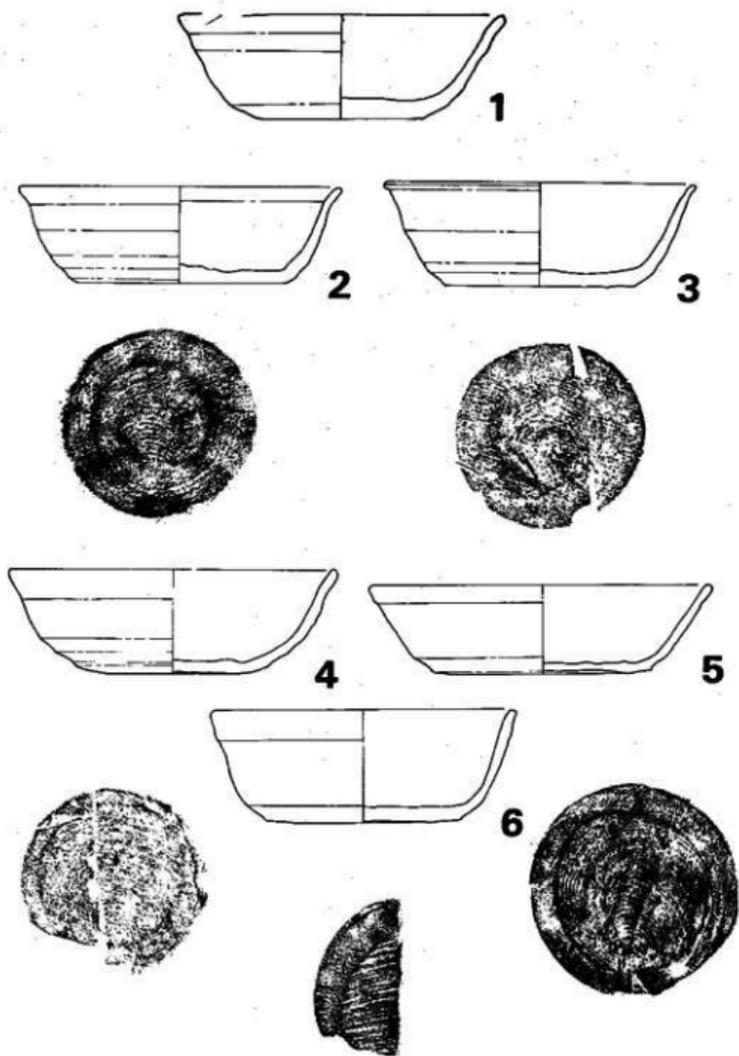
小 結

今回の調査では、竪穴住居址としては1基を検出したのみであるが、前回の「桑納前畑遺跡」では、2基が検出されているので、ここに、若干まとめておく。

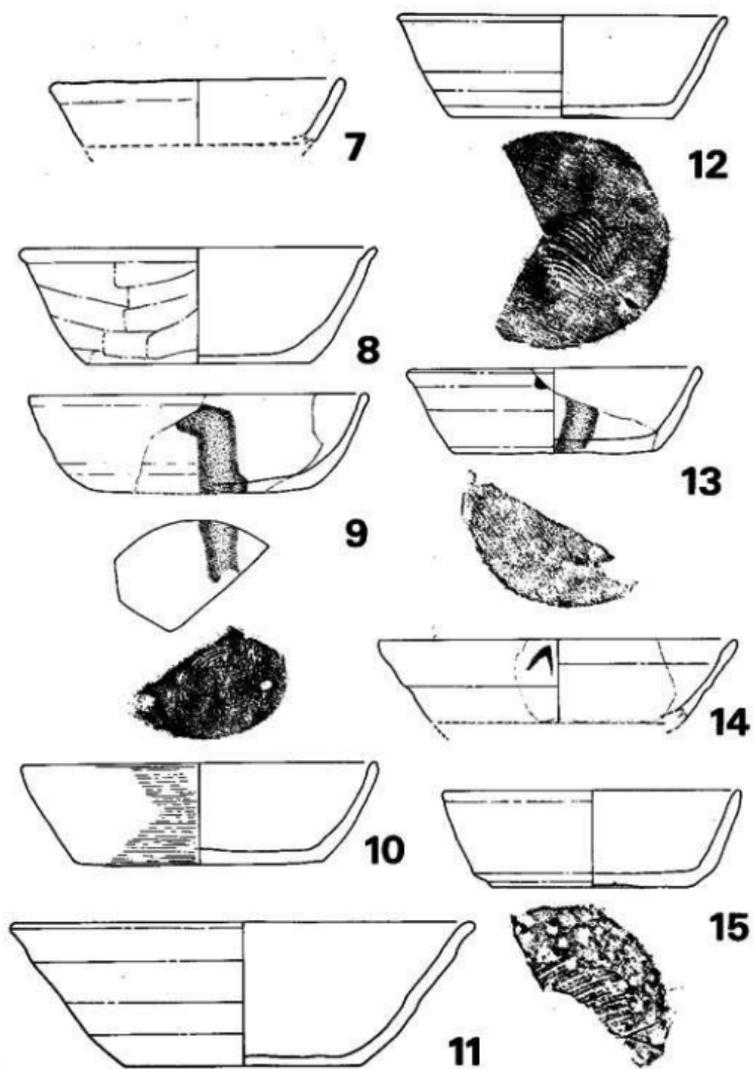
3址は、主軸方向では各々別としており、その細部では異なる点も多いが、ともに、約3.5m程度の小型のプランを呈し、北壁中央に小型のカマドを設け、主柱穴と壁溝を有する構築法をとり、貯蔵穴をもたないなどの共通項が見られる竪穴住居址である。また、いずれも、長胴の土師器甕を伴うことと、前回第2号住居址と本址には、ロクロ整形を残す晩期末の環が出土しており、時代的にも共通した時期の産とできるようである。

尚、3址は、掘立柱建物址の時代ともかなり近似したもののようで、「村上遺跡群」で示めされた様相に近い状態が、本址周辺にも存在する可能性を示めすものとも思われるが、この点は、来年にも実施されるという本址西続域調査に委ねたい。

(江尻 和正)



第7図 第1号整穴住居出土遺物実測図(1)



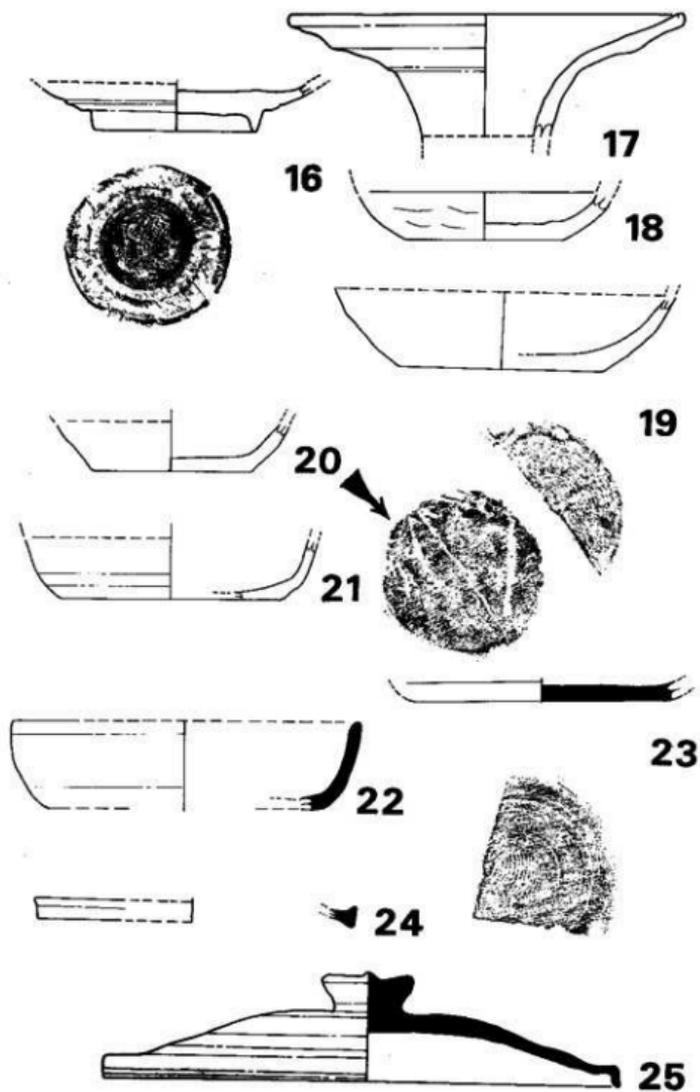
第8图 第1号竖穴住居址出土遗物实测图(2)

第4表 第1号壑穴住居址出土遺物一覽表

	器形	残状	器測(ミリ)	形態上の特徴	手法上の特徴	器状 (色調 胎土 焼成)
1Z	1	坏 土師	完形 口径 118 器高 38	平底部より数条のロクロ口襷を残し、外反ぎみに直上する。	底部でヘラナデ、その他でロクロ整形を施す。	暗褐色で二次加熱 緻密 堅固
2	2	坏 土師	4分の3 2片から 成る 口径 116 器高 35	平底部より数条のロクロ口襷を残しながら直上し、口唇で外反する。	底部で回転ヘラ切り、周縁でヘラナデ、その他でロクロ整形を施す。	褐色 緻密 堅固
3	3	坏 土師	4分の3 片 口径 112 器高 38	平底の底部より、数条のロクロ口襷を残し、口唇でやや外反する。	底部で回転ヘラ切り、周縁でヘラナデ、底部内面渦巻、ロクロ整形	褐色でスス着く 緻密 堅固
4	4	坏 土師	底部2分の1片 口径 119 器高 38	平底部より数条のロクロ口襷を残し、外反的口唇でやや外反する。	底部で回転ヘラ切り後周縁でヘラナデ、その他でロクロ整形を施す。	褐色で二次加熱 緻密 堅固
5	5	坏 土師	2分の1片 口径 123 器高 32	平底部より直線上に外反し、口唇でややふくらみをもつ。	底部で回転ヘラ切り後周縁で終始筋をもつヘラナデ、他ロクロ整形	淡褐色 緻密 堅固
6	6	坏 土師	4分の1片 口径 110 器高 41	平底部よりわずかに外反し、直上し口唇でふくらみをもつ。	底部で回転ヘラ切り後周縁でヘラナデ、その他でロクロ整形を施す。	褐色でスス着 緻密 堅固
7	7	坏 土師	口縁3分の1片 口径 106 残高 23	直線的に外反する口縁部片。	ロクロ整形を施す。	二次加熱 緻密 堅固
8	8	坏 土師	底部3分の1片 口径 128 器高 42	平底部より直線上に外反し、口唇よりさらに外反する。	底部で静止ヘラ切り後周縁と表面でヘラナデ他でロクロ整形を施す。	淡褐色で二次加熱 密 堅固
9	9	坏 土師	口縁4分の1片 口径 122 器高 36	平底部よりやや外反ぎみに直上し、口唇でややふくらみをもつ。	底部回転ヘラ切り、周縁ヘラナデ、他ロクロ整形し墨書を施す。	褐色 緻密 堅固
10	10	坏 土師	2分の1片 口径 120 器高 37	平底部よりやや外反ぎみに外反、二次加熱による分解穴を多数有す。	糸切り後、周縁でヘラナデ、その他でロクロ整形を施す。	二次加熱 緻密 堅固
11	11	坏 土師	口縁10分の1片 口径 166 器高 52	平底部より二条のロクロによる凸凹部を見せ外反する。	底部でヘラナデ、その他でロクロ整形を施す。	二次加熱 緻密 堅固
12	12	坏 土師	2分の1片 口径 118 器高 38	平底部より直線的に外反し、口唇でさらに外反する。	底部で回転ヘラ切り後周縁でヘラナデ、その他でロクロ整形を施す。	淡褐色 緻密 堅固
13	13	坏 土師	3分の1片 口径 106 器高 31	平底部より直線的に外反し、口唇でふくらみをもつ。	底部回転ヘラ切り後周縁でヘラナデ、他ロクロ整形し墨書を施す。	淡褐色 緻密 堅固
14	14	坏 土師	口縁3分の1片 口径 130 残高 30	平線的な外反する口縁を有する。	ロクロ整形後、墨書を施す。	暗褐色 緻密 堅固

	器形	残状	器測(ミリ)	形態上の特徴	手法上の特徴	器状(色剥胎土焼成)
1 Z	15	環土師 2分の1片	口径 108 器高 35	平底部よりやや外反する、全面に二次加熱による分解穴を有する。	底部で回転ヘラ切り後周縁でヘラナデ、その他でロクロ整形を施す。	赤褐色で二次加熱 緻密 堅固
16	環(付高台)土師	底部	高台幅径 62 残高 18	直線的な高台部よりなめらかに移行するラインを有すると思われる。	底部回転ヘラ切り、周縁ヘラナデ、張付による高台部を設ける。	暗褐色で二次加熱 緻密 堅固
17	17	長頸壺土師 口縁3分の1片	口径 142 残高 46	頸部より直上し、口縁で大きく外反する。	ロクロ整形を施す。	淡褐色 緻密 堅固
18	18	長頸壺土師 底部2分の1片	底径 60 残高 18	平底部より急上のラインを示すものと思われる。	底部でヘラ切り後、ヘラナデ、表面でヘラナデ、内面はロクロ整形	淡褐色 緻密 堅固
19	19	長頸壺土師 下半部3分の1片	底径 26 残高 29	平底部より急上に移行するラインを示すものと思われる。	底部で回転ヘラ切り、その他でロクロ整形を施す。	淡褐色で二次加熱 緻密 堅固
20	20	長頸壺土師 底部	底径 60 残高 19	平底部より急上に移行するラインを示すものと思われる。	二次加熱のため不明	赤褐色で二次加熱 緻密 不明
21	21	環須恵 下半部4分の1片	底径 82 残高 23	平底部より僅かに外反し、直上するラインを示すものと思われる。	底部周縁でヘラナデ、その他でロクロ整形を施す。	灰褐色 緻密 堅固
22	22	環須恵 4分の1片	口径 130 残高 33	平底部よりやや外反ぎみに直上し、遮断される口唇部をもつ。	底部周縁でヘラナデ、その他でロクロ整形を施す。	灰褐色 密 堅固
23	23	須恵 蓋	幅径 188 器高 41	上面で凸凹をもつ蓋部より水平に移行した裾部で垂直に曲るライン	全面でロクロ整形を施した後、蓋部、裾部で横ナデ、上面でヘラナデ	灰褐色 緻密 堅固
24	24	須恵 蓋片	幅径 120 残高 8	上下に飛び出す裾部より緩やかに移行するラインを示すと思われる。	横ナデされた裾部片。	灰白色 緻密 堅固
25	25	環須恵 底部4分の1片	底径 92 残高 7	平底部より球状の胴部に移行するラインを示すものと思われる。	底部で回転ヘラ切り後ヘラナデ、内面でロクロ整形を施す。	灰白色 緻密 堅固
26	26	甕須恵 口縁10分の1片	口径 320 残高 51	突極に外反する口縁より、垂直に近い状態で下降し胴部に至る。	内面で指押し、表面で横目、口縁で横ナデを施す。	灰黒色 密 堅固
27	27	鉢須恵 底部10分の1片	底径 148 残高 32	平底部よりやや外反して、胴部にいたるラインを示すと思われる。	底部で粗い承切り、表面でヘラナデ整形を施す。	灰白色 緻密 堅固
28	28	甕須恵 群片	口径 104 底径 88 残高 250	平底部よりやや外反して、胴部に至るラインを示すものと思われる。	内面でロクロ整形後、底部表面でヘラナデ整形を施す。	灰白色 緻密 堅固
29	29	甕土師 底部4分の1片	底径 120 残高 14	平底部より胴中央を欠くが長胴の胴部を経て、大きく開く口縁部に至る。	口唇で横ナデ、その他でヘラナデ整形を施す。	暗褐色 密 硬質

	每形	残状	器測(ミリ)	形態上の特徴	手法上の特徴	器状 (色調胎土煉成)
30	雙 土師	口縁3分の1片	口径 128 残高 45	外反する口縁より、眼みをもたない胴部に至るラインと思われる。	口唇で横ナデ、表裏面ともヘラナデズリ。	赤褐色でスス着く緻密硬質
31	雙 土師	上半部3分の1片	口径 124 残高 67	眼みをもたない胴部より、頸部を経て外反し口唇で直上すると思われる。	口唇で横ナデ、表裏面ともヘラナデ整形を施す。	褐色でスス着く密硬質
32	雙 土師	口縁4分の1片	口径 176 最大径 177 残高 58	最大径を胴上位にもちなめらかな頸部を経ていちじるしく外反する。	口唇で横ナデ、表裏面ともクロ口整形を施す。	淡褐色緻密堅固
33	雙 土師	上半部2分の1片	口径 201 最大径 230 残高 118	上位に最大径をもつ長胴の胴部よりなめらかな頸部を経て外反し口唇に至る。	口縁頸部で横ナデ、表裏面ともヘラナデを施す。	赤褐色で二次加熱細粗硬質
34	雙 土師	口縁10分の1片	口径 202 残高 40	緩やかな胴部より内屈する。頸部を経て、外反しながら直上し口唇に至る。	口縁部で横ナデ、その他でヘラナデを施す。	褐色細粗硬質
35	雙 土師	口縁3分の1片	口径 242 残高 58	胴部より角度をもち口縁に至り、内屈し口縁中位より外反して口唇に至る。	頸部口縁で横ナデ、表裏面ともヘラナデを施す。	褐色細粗硬質
36	雙 土師	2分の1片	口径 204 残高 68	角度をもつ胴部より内屈ぎみの頸部を経て外反し、口唇で直上する。	頸部口縁で横ナデ、表裏面ともヘラナデを施す。	褐色細粗硬質
37	雙 土師	口縁5分の1片	口径 244 残高 38	長めの頸部より、いちじるしく外反し、ゆるやかに外反する口唇をよつ。	頸部口縁とも横ナデを施す。	赤褐色で二次加熱細粗硬質
38	雙 土師	上半部3分の1片	口径 208 最大径 224 残高 15	胴上位に最大径をもつ、長胴部より内屈する頸部を経て外反する口唇をもつ。	口縁頸部とも横ナデを施す。	赤褐色で二次加熱密硬質
39	雙 土師	底部2分の1片	底径 78 残高 82	平底部より緩やかに外反して胴部に至るラインを示すと思われる。	底部表裏ともヘラナデを施す。	黒褐色密硬質
40	雙 土師	底部	底径 78 残高 26	平底部より、緩やかに胴部に至るラインを示すものと思われる。	底部表裏ともヘラナデを施す。	赤褐色緻密堅固
41	雙 須恵	胴部小片	残高 67	不明	不明	緑彩緻密堅固
42	鉄製品	群片		約90片に及ぶ大小片から成るが不明。	二枚の鋼板を止め金にて付着する部分有り。	



第9图 第1号竖穴住居址出土遗物实测图(3)



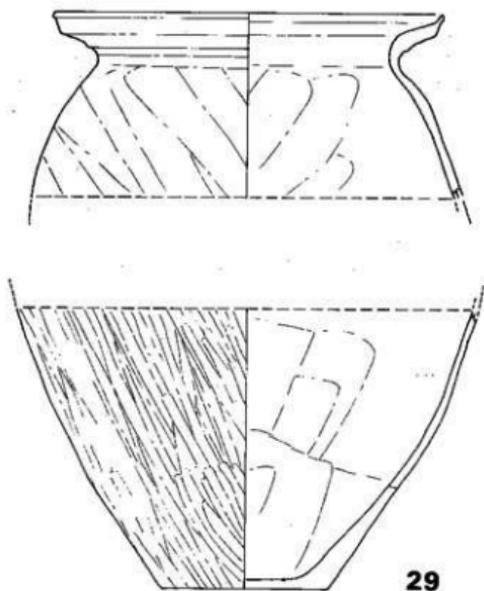
26



27

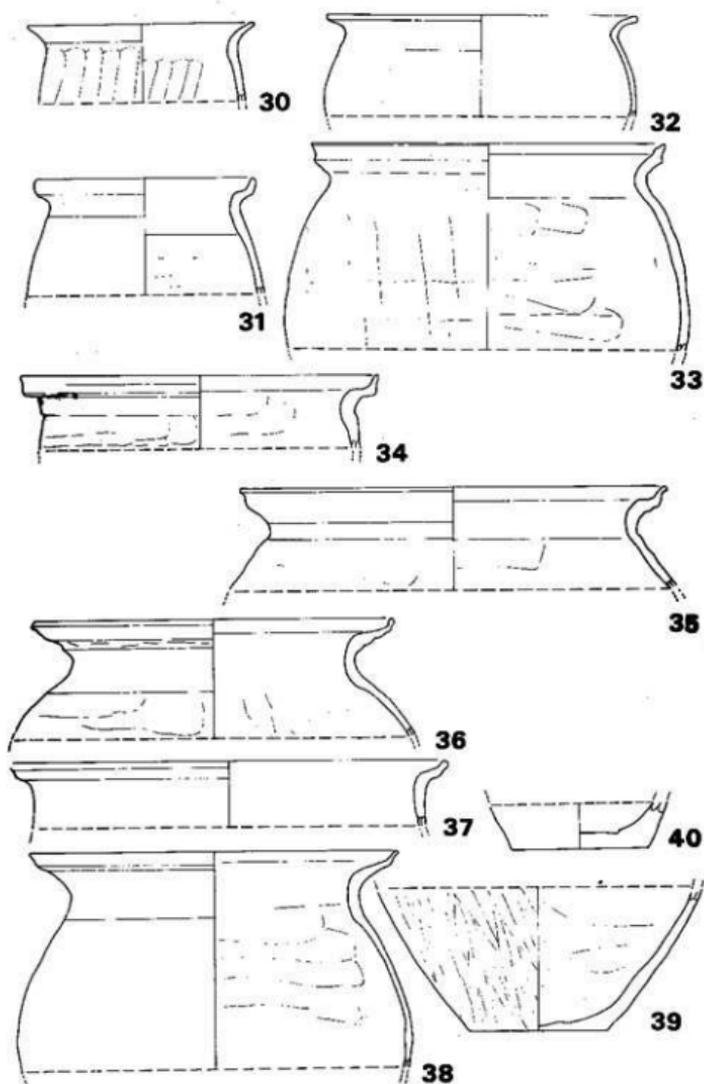


28



29

第10图 第1号竖穴住居址出土遺物実測図(4)



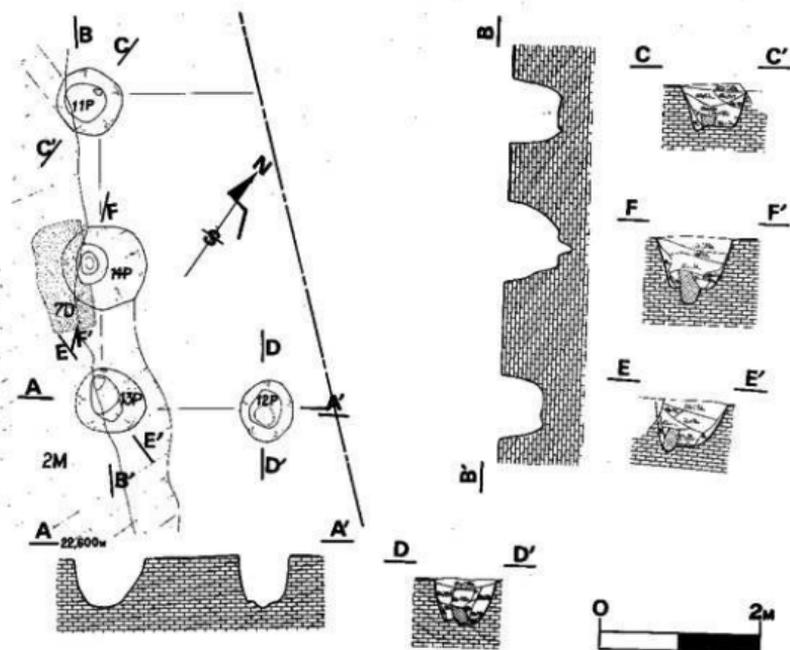
第11图 第1号竖穴住居址出土遗物实测图(5)

3 第1号掘立建物址

この遺構は、調査区の北東部で、第2号溝、第6号土壇、第7号土壇と重複し、4本（西面と南面）の柱穴が確認された。他の柱穴は、攪乱と調査区域外のため不明であるが、 $3 \times 2 + 2 = 8$ 本からなる掘立建物址と考えられる。確認された部分では、 $N-27^{\circ}-W$ に主軸を有し、西面径4.00mである。南面は、中央部の柱穴(12P)が確認されたのみであり、この部分での柱間は、2.10mである。各柱穴を次に述べる。

11Pは、東西径約0.84m、北南径0.84m、深さは、0.51mあり、隅丸方形をなしている。柱穴底は、皿状をなしており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱根は、柱穴の北東部から、柱穴の東部にかけて確認された。

12Pは、東西径0.67m、北西径0.77m、深さ0.57mあり、楕円形をなしている。柱穴底は、平



第12図 第1号掘立建物址実測図

担であり、壁は緩やかに立ち上がっている。柱穴底の南側には、柱根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.25m、北南径0.23m、深さは柱穴底より0.06mで柱穴掘り口部からは、0.65mある。小 pit の底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。柱根は、土層からこの小 pit の部分で確認されたが、小 pit から柱穴底にかけてであり、本来は小 pit の部分にあったものと考えられる。また、柱の上方はやや北西方向に向いて立てられたようである。

13Pは、東西径約0.90m、北南径0.82m、深さ0.60mあり、楕円形をなしている。柱穴底は、皿状をなしており、壁は緩やかに立ち上がっている。柱穴底の北西部には、柱根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.18m、北南径0.15m、深さは、柱穴底より0.05mで柱穴掘り口部からは0.65mである。小 pit の底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。この部分から、北西方向にかけて柱が、立てられていたようである。

14Pは、東西径1.05m、北南径1.05m、深さ0.65mあり、円形状をなしている。柱穴底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。柱穴底の中央部には、柱根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.23m、北南径0.28m、深さは柱穴底より0.19mで柱穴掘り口部からは0.87mである。小 pit の底は、平坦で、壁は斜めに立ち上がっている。この小 pit に柱が立っていたようである。

第5表 第1号掘立建物址柱穴一覧表

No.	柱 穴 部 (m)				p i t 部 (m)				
	東西径	北南径	深 さ	形 状	東西径	北南径	深さ1	深さ2	形 状
11 P	0.84	0.84	0.51	隅丸方形					
12 P	0.67	0.77	0.57	楕円形	0.25	0.23	0.06	0.63	隅丸方形
13 P	0.90	0.82	0.60	楕円形	0.15	0.18	0.05	0.65	円形
14 P	1.05	1.05	0.65	円形	0.23	0.28	0.19	0.87	楕円形

4 第2号掘立建物址

この遺構は、調査区の北東部で第3号掘立建物址と第6号掘立建物址とに隣接して確認され、N-48°-Wに主軸を有し3×2+2=8本からなる第2号掘立建物址である。北面径4.15m (20Pと21PB間が1.55m、20Pと21PAと22P間が2.17m、各々有している)、東面径4.02m (22Pと23P間が2.10m、23Pと24P間が1.92m、各々有している)、南面径4.17m (24Pと25P間が1.57m、25Pと26P間が2.55m各々有している)、西面径4.04m (26Pと27P間が2.10m、27Pと20P間が1.94m各々有している)である。こうして見ると、東面の4.02mに対して西面は4.04

mと西面が0.04mだけ広くなっている。これを各柱間で見ると、22Pと23Pの2.10mに対し20Pと27P間は1.94m、でありその差は0.16mだけ東面の柱間が広くなっている。また、23Pと24P間の2.10mに対して27Pと26P間は2.10mであり、同じ柱間を有している。このように、東面、西面とも多少の差はあるが、ほぼ対比しており一定の規格性を有していると考えられる。

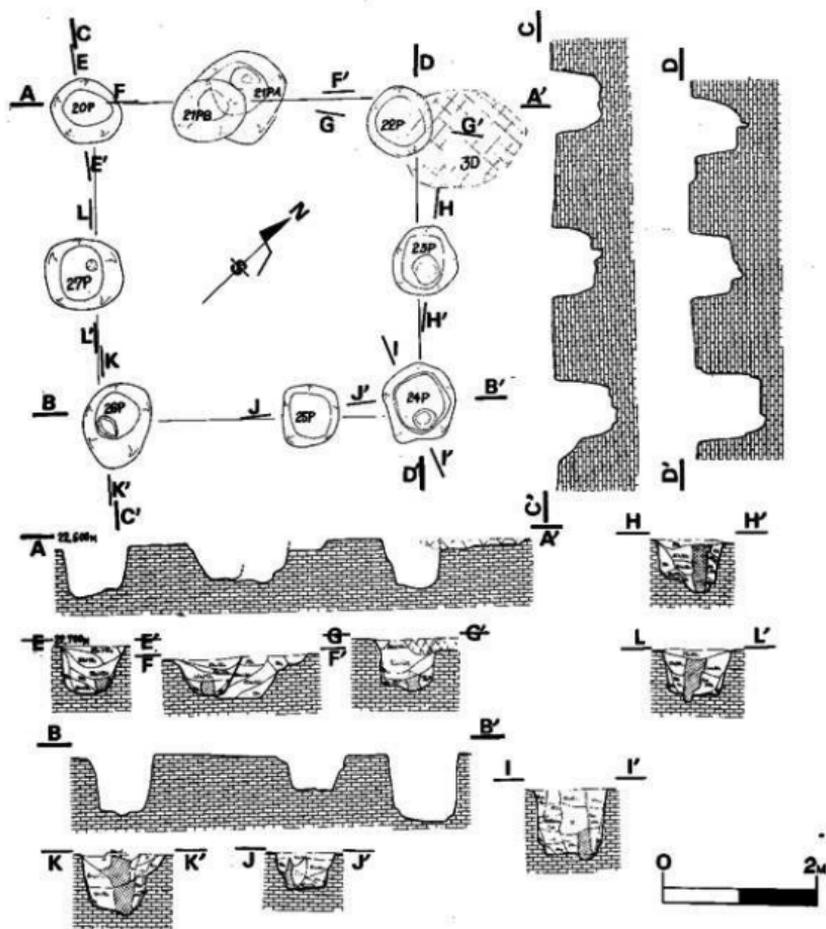
これに対して、北面と南面はどうであろうか。北面が4.15mで南面は4.17mであり、その差は0.02mである。この数値から、北面と南面は対比し規格性を持っているようであるが、各柱間から見ると問題がある。20Pと21PB間の1.55mに対し26Pと25Pは2.55mで差は1.00mであり、南面の柱間が広くなっており、20Pと21PA間の2.00mに対して、26Pと25P間の2.55mとでは、0.55mだけ南面の柱間が広くなっている。21PBと22P間の2.60mに対し25Pと24P間は1.59mで、差は1.01mであり前者とは逆に北面の柱間が広くなっている。また、21PAとした場合、北面東側は2.17mとなり南面東側との差が0.58mとなり、北面東側が広くなっている。このように北面と南面とでは、各々逆の数値を示している。次に、各柱穴の状況を述べる。

20Pは、東西径0.88m、南北径0.85m、深さ0.67m、あり円形をなしている。柱穴底は、皿状をなしており、壁は斜めに立ち上がっている。柱根は、土層から柱穴の南側において確認された。21Pは、AとBからなっているが、土層から判断するとBがAを切っているため、21PBから述べる。21PBは、東西径0.87m、南北径0.95m、深さ0.50mあり、楕円形をなしている。底は皿状をなしており、壁は緩かな弧をなし立ち上がっている。柱根は、柱穴の中央やや北西側で確認された。

第6表 第2号掘立建物址柱穴一覽表

No	柱 穴 部 (m)				p i t 部 (m)				
	東西径	南北径	深 さ	形 状	東西径	南北径	深さ1	深さ2	形 状
20 P	0.88	0.85	0.67	円 形					
21 PA	1.10	1.77	0.55	隅丸長方形	0.30	0.30	0.05	0.06	不整円形
21 PB	0.87	0.95	0.50	楕 円 形					
22 P	0.90	0.90	0.60	円 形	0.35	0.32	0.14	0.74	円 形
23 P	0.85	0.90	0.55	隅丸方形	0.36	0.33	0.15	0.70	方 形
24 P	0.88	1.00	0.88	不整長方形	0.25	0.28	0.05	0.93	円 形
25 P	0.75	0.80	0.45	方 形	0.25	0.28	0.06	0.51	不整方形
26 P	0.85	1.16	0.70	楕 円 形	0.34	0.24	0.05	0.75	楕 円 形
27 P	0.94	1.00	0.60	隅丸方形	0.13	0.13	0.08	0.68	円 形

21P Aは東西径1.10m、北南径1.77m、深さ0.55mあり、隅丸長方形をなしている。底は平坦であり、壁は弧を描き緩やかに立ち上がっている。柱穴底の北西部には、柱根部と考えられる小pitがある。この小pitは、東西径0.30m、北南径0.30m、深さは柱穴底より0.05mで柱穴掘り口部からは0.60mあり、不整形円形状をなしている。小pitの底はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。



第13図 第2号据立建物址実測図

22Pは、その北東部にある第3号土坑によりその一部を切られている。柱穴は、東西径0.90m、北南径0.90m、深さ0.60mあり、円形をなしている。柱穴底は平坦であり、北西壁から南西壁にかけてやや内側に入り込み、東壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、東壁から南壁にかけては緩かに立ち上がっている。また、柱穴底の東壁部には柱根部と考えられる小pitがある。この小pitは、東西径0.35m、北南径0.32m、深さは柱穴底より0.14mで柱穴掘り口部より0.74mあり、円形をなしている。小pitの底は皿状をなし、壁は全体的に緩かに立ち上がっている。

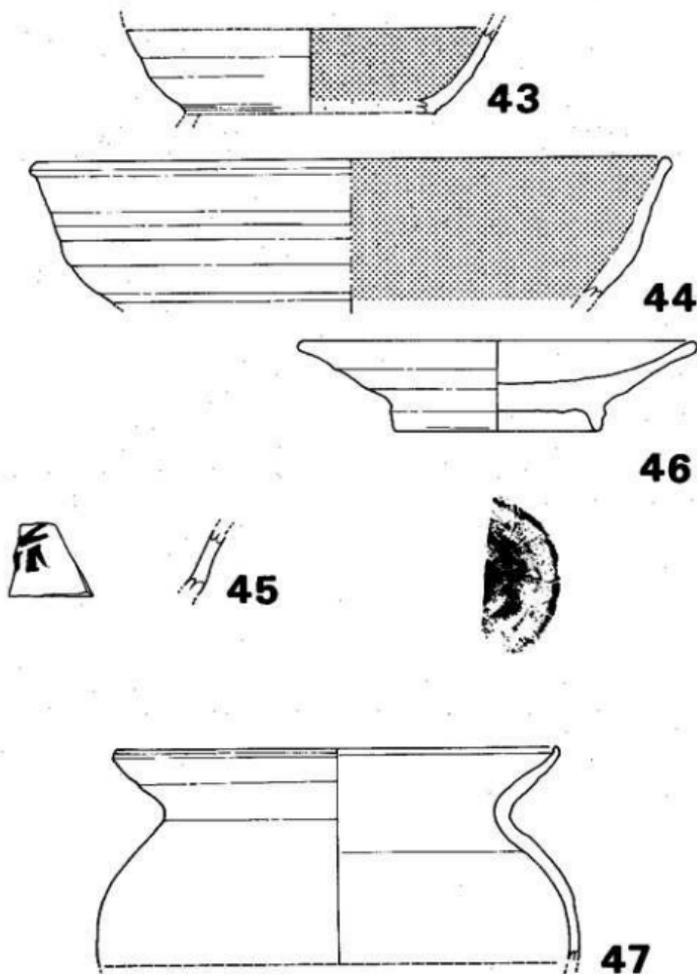
23Pは、東西径0.85m、北南径0.90m、深さ0.55mあり、隅丸形状をなしている。柱穴底は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱穴底の中央東側に柱根部と考えられる小pitがある。この小pitは、東西径0.36m、北南径0.33m、深さは柱穴底より0.15mで柱穴掘り口部よりは0.70mあり、方形をなしている。小pitの底は平坦で、壁は斜めに立ち上がっている。

24Pは、東西径0.88m、北南径1.00m、深さ0.88mあり、不整形長方形（五角形）をなしている。柱穴底は皿状をなしており、柱穴底より0.10m上方の所に、幅0.05mあるテラスがある。柱穴底よりこのテラスまでは、斜めに立ち上がっているが、テラスから柱穴掘り口部まではほぼ垂直に立ち上がっている。柱穴底の東壁に接し、柱根部と考えられる小pitがある。この小pitは、東西径0.25m、北南径0.28m、柱穴底より0.05m、柱穴掘り口部から0.93mだけ深さを有している。小pitの底は平坦で、壁は斜めに立ち上がっている。

25Pは、東西径0.75m、北南径0.80m、深さ0.45mあり、方形をなしている。柱穴底は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱穴底より0.33m上方で、北壁から南壁にかけてと、柱穴底より0.28m～0.45m上方で北壁・東壁・南壁にかけて、各々テラスがある。前者は、幅0.10

第7表 第2号掘立建物址出土遺物一覧表

器形	残状	器測(ミリ)	形態上の特徴	手法上の特徴	器状 (色調胎土焼成)
2H 43 環 (付高台) 土師	10分の1片	残高 30	高台部よりゆるやかに外反するラインを示すものと思われる。	底部周縁に高台を設けその他でロクロ整形、内面のみ黒彩を施す。	暗褐色で内黒 緻密 堅固
44 環 土師	口縁部10分の1片	口径 220 残高 50	器身中段まで外反するラインは、直上ぎみに口縁に至る。	ロクロ整形後、内面のみ黒彩を施す。	赤褐色で内黒 緻密 堅固
45 環 土師	小片	不明	不明	ロクロ整形後、黒彩を施す。	褐色で黒書 緻密 堅固
46 環 (付高台) 土師	2分の1片	口径 140 口径 72 器高 32	平底周縁で垂直な高台をもち、みじかく外反し口縁に至る。	底部でホのけり後、周縁に高台を付ける。表面ロクロ整形、内へミギキ。	褐色 緻密 堅固
47 甕 土師	上半部4分の1片	口径 156 最大径 168 残高 76	球状の胴部より、くの字に曲る頸部を経て外反する口縁に至る。	口縁で横ナデ、下半表裏面でヘラナデを施す。	暗褐色でスス着く 密 硬



第14图 第2号掘立建物址出土遺物実測図

mでテラス部は斜めであるが平坦になっており、柱穴掘り口まで斜めに壁が構成されている。後者は、テラス部とテラスから柱穴掘り口部にかけて前者とほぼ同様の状況を示している。柱穴底の中央東側で、東壁に接し、柱根部と考えられる小pitがある。この小pitは、東西径0.25m、北南径0.28m、深さは柱穴底より、0.06mで柱穴掘り口部から0.51mあり、不整形形状をなしている。

26Pは、東西径0.85m、北南径1.16m、深さ0.70mあり、楕円形をなしている。柱穴底はほぼ平坦であり、北壁と南壁は緩やかな弧を画きながら立ち上がっているが、東壁と西壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱穴底の南壁に接し、柱根部と考えられる小pitがある。この小pitは、東西径0.34m、北南径0.24m、深さは柱穴底より0.05mで柱穴掘り口部より0.75mあり、楕円形をなしている。小pitの底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。

27Pは、東西径0.94m、北南径1.00m、深さ0.60mあり、隅丸方形をなしている。柱穴底は平坦であり、壁は緩かに立ち上がっている。柱穴底の東南部には、柱根部と考えられる小pitがある。この小pitは、東西径0.13m、北南径0.13m、深さは柱穴底より0.08mで柱穴掘り口部からは0.68mあり、円形をなしている。小pitの底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。

出土遺物は、主として土師器が最も多く検出されたが、完型品は環型土器(№84)が一点だけである。また、同じ環型土器を利用したと考えられる墨書土器(№83)が検出されている。他に、環型土器片、甕型土器片、などが検出された。時期は、国分期と比定される。

5 第3号掘立建物址

この遺構は、第1号掘立建物址の南東方面で、第2号溝と重複して確認された第3号掘立建物址である。建物址の東側は、調査区域外のため、正確なプランは不明である。柱穴数は、 $3 \times 2 + 2 = 8$ 本より構成されていると考えられる。主軸は、 $N-30^{\circ}-W$ である。北面径3.92m (31P

第8表 第3号掘立建物址柱穴一覧表

No.	柱 穴 部 (a)	p i t 部 (a)								
		東西径	北南径	深 さ	形 状	形 状				
31	P	1.10	1.09	0.70	不整形	0.30	0.38	0.15	0.85	隅丸長方形
32	P	0.68	0.86	0.75	楕円形					
33	P	0.79	0.35	0.55	楕円形か 円形					
34	P	1.00	0.84	0.42	楕円形					
35	P	1.07	1.23	0.90	楕円形	0.40	0.51	0.18	1.08	楕円形
36	P	1.07	0.77	0.48	楕円形	0.37	0.32	0.12	0.60	楕円形

と32P間が2.32m、32Pと33P間が1.60m)であり、東面径は推定で3.95mである。南面径は、3.94m(35Pと36P間は1.97mで、36Pと31P間が1.98m)だけ、各々有している。

こうして見ると、各面径とも多少の誤差はあるがほぼ対比していると判断される。また北面の各柱間と南面の各柱は逆の柱配置となっている。つまり、31Pと32P間が2.32mであるのに対し、35Pと34P間は、1.78mと北面の柱間が0.54mだけ広くなっている。また、32Pと33P間が1.60mであり34Pと東面、南面の交点とは2.14mと、0.54mだけ北面が広くなっているが、同一誤差であるため、一定の規格性を認めることが出来る。次に各柱穴について述べる。

31Pは、東西径1.10m、北南径1.09m、深さ0.70mあり、不整形形状をなしている。柱穴底は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっている。柱穴底の南西部には、柱根部と考えられる小pitがある。この小pitは、東西径0.30m、北南径0.38m、深さは柱穴底より0.15mで柱穴掘り口部よりは0.85mである。小pitの底は皿状で壁は緩やかに立ち上がっている。柱根は、その土層から、この小pitから柱穴底の中央部にかけて確認された。

32Pは、柱穴の東半分を第2号溝に切られているため、東西径は約0.68mであり、北南径0.86m、深さ0.75mあり、楕円形状をなしている。柱穴底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。柱根は、その土層から中央やや南東部において確認された。

33Pは、北西部のみ確認され、他は調査区域外のため不明である。確認された部分での大きさは、東西径0.79m、北南径0.35m、深さ0.55mあり楕円形か円形をなしているようである。柱穴底は皿状をなしており、北東壁から北壁にかけてほぼ垂直に立ち上がっているが、北西壁では0.05m程度壁内に入り湾曲しながら立ち上がっている。柱根は土層から柱穴の南側にあったようである。

34Pは、東西径1.00m、北南径0.84m、深さ0.42mあり、楕円形をなしている。柱穴底は皿状をなし、壁は緩やかに立ち上がっている。柱根は土層から柱穴の北東部で確認された。

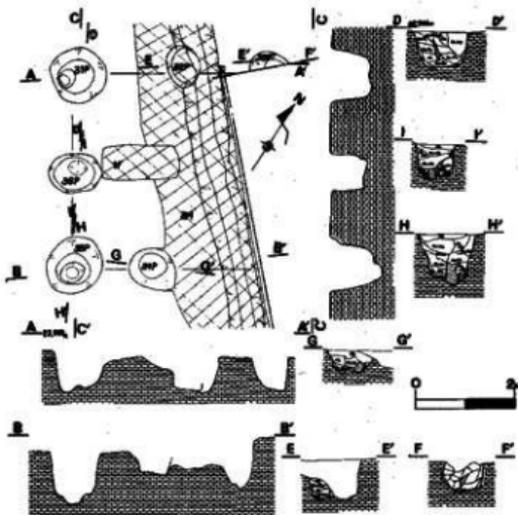
35Pは、東西径1.07m、北南径1.23m、深さ0.90mあり、楕円形をなしている。柱穴底は、皿状をなしており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱穴底の中央部から南側にかけて、柱根部と考えられる小pitがある。この小pitは、東西径0.40m、北南径0.51m、深さは柱穴底より0.18mで柱穴掘り口部からは1.08mあり、楕円形をなしている。小pitの底は、中央部がやや低く、なっているがほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。柱根は、土層からこの小pitで確認された。

36Pは、東西径1.07m、北南径0.77m、深さ0.48mあり、楕円形をなしている。柱穴底は皿状をなし、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱穴底の北東部には柱根部と考えられる小pitがある。この小pitは、東西径0.37m、北南径0.32m、深さは柱穴底より0.12mで、柱穴掘り口部からは0.60mある。底は皿状をなしており、壁は斜めに立ち上がっている。

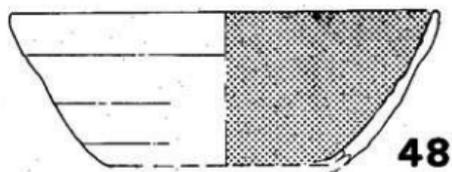
出土遺物としては、第16図に示したような環型土器や甕型土器が検出されている。

第9表 第3号掘立建物址出土遺物一覧表

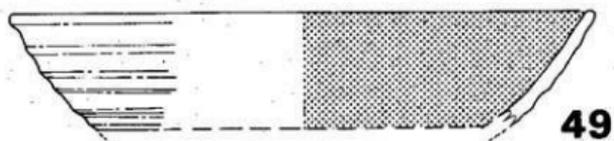
	器形	残状	器測(ミリ)	形態上の特徴	手法上の特徴	器状 (色調胎土焼成)
3H 48	環 土師	口縁部5分の1片	口径 150 残高 57	やや外反ぎみに立ち上がるラインを有する環。	ロクロ整形後、内面に黒彩処理を施す。	褐色で内黒緻密堅固
49	環 土師	口縁部5分の1片	口径 204 残高 41	表面の凹凸の激しい。外反ぎみに立ち上がるラインを有する。	表面の凸部で数条のヘラミガキを設け、内面で黒彩処理を施す。	褐色緻密堅固
50	環 土師	底部3分の1片	底径 52 残高 18	やや上底ぎみの底部より、急上に移行するラインを示すと思われる。	底部未切り、その他でロクロ整形を施す。	褐色緻密堅固
51	環 (付高台) 須恵	底部4分の1片	口径 104 残高 15	低い高台部より周縁を経て、直上するラインを示すと思われる。	底部で未切り後、周縁内側で高台を設け、その他でロクロ整形を施す。	灰褐色緻密堅固
52	甕 須恵	下半部10分の1片	口径 192 残高 52	平底部より直線的に外半するラインを示すものと思われる。	底部で押し付け、その他でヘラナデ、表面上部でロクロ整形を施す。	灰褐色細粗硬質
53	甕 土師	口縁部10分の1片	口径 224 残高 44	内傾ぎみの頸部を経て、いちじるしく外反し、口縁端部で直上する。	ロクロ整形を施す。	暗褐色緻密堅固



第15図 第3号掘立建物址実測図



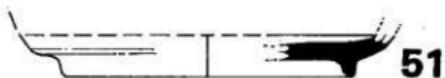
48



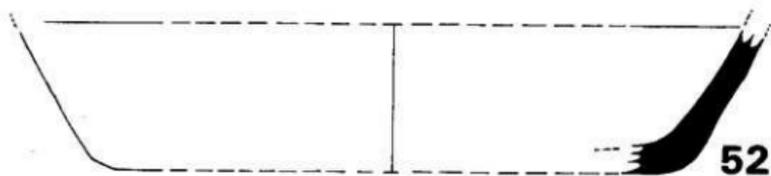
49



50



51



52



53

第16图 第3号掘立建物址出土遺物実測図

6 第4号掘立建物址

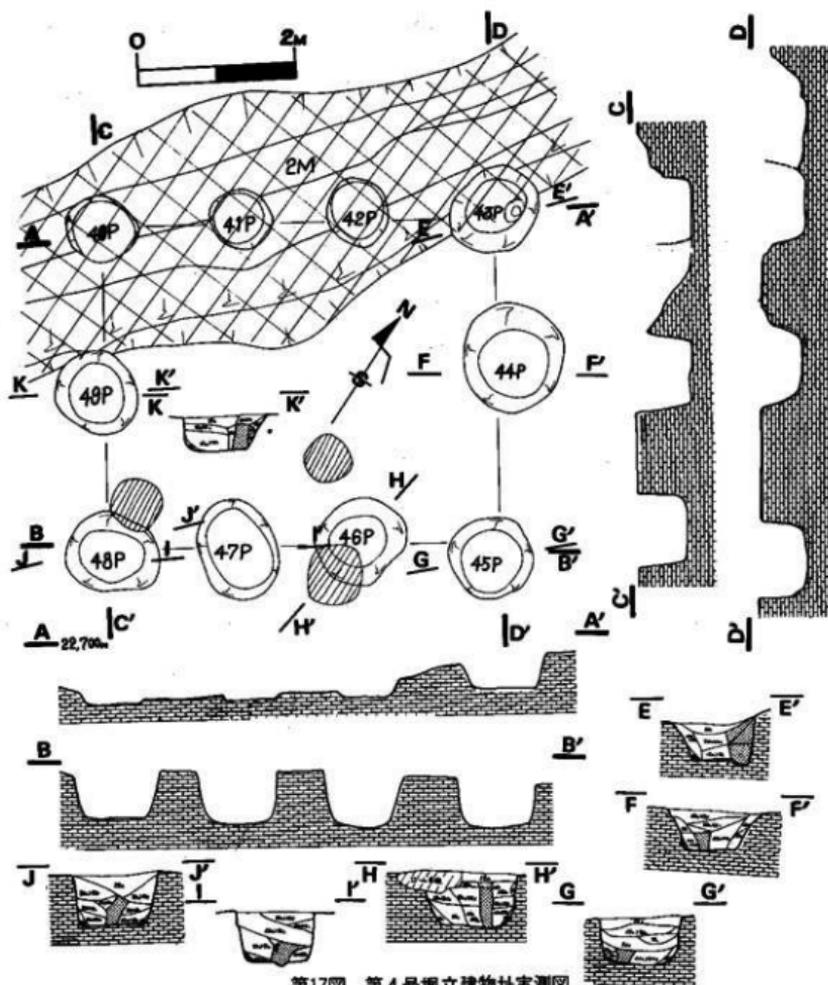
この遺構は、第1号住居址の北西方向で、第1号溝と重複して確認され、N-31°-Wに主軸を有し、4×2=10本よりなる第4号掘立建物址である。北面径5.04m (40Pと41P間が1.70m、41Pと42P間が1.50m、42Pと43P間が1.85m) である。東面径は、4.11m (43Pと44P間が2.00m、44Pと45P間が2.11m) である。南面径は、5.00m (45Pと46P間が1.45m、46Pと47P間が1.70m、47Pと48P間が1.85m) で、西面径が4.11m (48Pと49P間が2.00m、49Pと40P間が2.11m) である。

こうして見ると、東面と西面が同一面径であるが、北面と南面は0.04mだけ北面径が広がっているものの、各面とも一定の規格性を有しているようである。これを各柱間で見ると、40Pと41P間が1.70mであるのに対し48Pと47P間が1.85mと南面が0.15m広がっている。41Pと42P間が1.50mであるのに対し47Pと46P間は1.70mであり、南面が0.20m広がっている。また、42Pと43P間が1.85mであるのに対し46Pと45P間は1.45mであり、0.40m北面が広がっている。また、43Pと44P間が2.00mであるのに対し40Pと49P間は2.11mであり、西面が0.11m広がっている。44Pと45P間が2.11mあるのに対し49Pと48P間が2.00mであり、0.11mだけ東面が広がっている。このように、各柱間で見ると、以上の様に規格性を認めることは出来ないが、10個の柱穴で一建物址をなしているため、認められる誤差と考えられる。よって、この建物址は一定の規格性を有していると考えられる。次に各柱穴を述べるが、40P・41P・42Pは第

第10表 第4号掘立建物址柱穴一覧表

系	柱 穴 部 (m)				p i t 部 (m)				
	東西径	北南径	深 さ	形 状	東西径	北南径	深さ1	深さ2	形 状
40P	0.86	0.86		隅丸方形					
41P	0.77	0.74		円 形					
42P	0.77	0.91		楕 円 形					
43P	1.00	1.17	0.50	楕 円 形	0.21	0.33	0.07	0.57	楕 円 形
44P	1.30	1.41	0.53	楕 円 形					
45P	1.04	1.02	0.55	不整方形					
46P	0.98	1.15	0.70	隅丸長方形					
47P	1.42	0.98	0.69	楕 円 形					
48P	1.18	1.02	0.60	不整隅丸長方形					
49P	1.10	0.98	0.45						

一号溝により、その大半を切られており、43Pは、その半分を切られている。40Pは、東西径0.86m、北南径0.86mあり、隅丸方形形状を呈している。柱穴底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。41Pは、東西径0.77m、北南径0.74mあり、円形をなしている。柱穴底はほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。42Pは、東西径0.77m、北南径0.91mあり、楕円形をなして



第17図 第4号獨立建物址実測図

いる。柱穴底はほぼ平担であり、壁は斜めに立ち上がっている。以上の3柱穴は前述のように第1号溝に切られ、その溝底で確認されたため、その深さは不明である。

43Pは第1号溝でその半分を切られているが、東西径1.00m、北南径1.17m、深さ0.50mあり、楕円形状を呈している。柱穴底は平担であり、壁は斜めに立ち上がっている。柱穴底の北東部には、柱根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.21m、北南径0.33m、深さは柱穴底より0.07mで、柱穴掘り口部からは0.65mある。小 pit の底は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっている。土層から、この部分に柱が立っていたことが確認された。

45Pは、東西径1.04m、北南径1.02m、深さ0.55mあり、不整形形状を呈している。柱穴底は皿状をなしており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱根は、土層から柱穴の西側から北西側にかけて確認された。

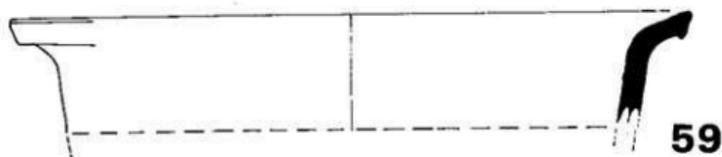
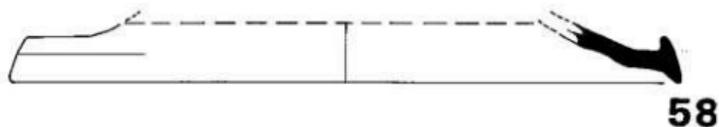
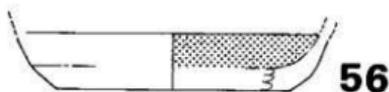
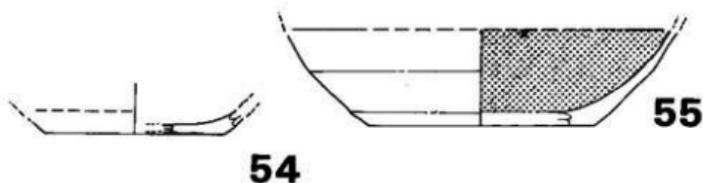
46Pは、東西径0.98m、北南径1.15m、深さ0.70mあり、隅丸長方形形状を呈している。柱穴の南側は、旧校舎時代の基礎により、柱穴上部が一部破壊されている。柱穴底は、ほぼ皿状をなしており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱根は上層から柱穴の北東部において確認された。

47Pは、東西径1.42m、北南径0.98m、深さ0.69mあり、楕円形をなしている。柱穴底は平担であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱根は、上層から柱穴の中央部で確認された。また、この部分には深さ0.05m程度の凹がある。

第11表 第4号掘立建物址出土遺物一覧表

器形	残 状	器 測 (ミリ)	形態上の特徴	手法上的特徴	器 状 (色調胎土焼成)
4H 54 土 師	坏 底部4分の1片	底 径 62 残 高 8	平底部より外反するラインを示すものと思われる。	底部でヘラ切り後、周縁でヘラナデ、その他でロクロ整形を施す。	褐色緻密堅固
55 土 師	坏 底部5分の1片	底 径 78 残 高 34	平底部より外照して外反するラインを示すものと思われる。	底部、周縁、表面下半でヘラナデ、その他ロクロ整形、内面で黒彩を施す。	褐色で内黒緻密堅固
56 土 師	坏 底部10分の1片	底 径 81 残 高 20	平底部より外照ぎみに外反するラインを示すものと思われる。	底部・周縁でヘラナデその他ロクロ整形、内面で黒彩を施す。	褐色で内黒緻密堅固
57 土 師	蓋 擬宝珠部片	撫み部径 32 残 高 19	上面は平で凸状の撫み部が出ている。	上面でヘラナデ、その他で横ナデを施す。	褐色緻密堅固
58 須 恵	蓋 裾部20分の1片	裾 径 234 残 高 21	裾部は上下に凸する斜めの面で見られ、それより段をもって蓋部に移行する。	裾部で横ナデ、その他でロクロ整形を施す。	灰褐色緻密堅固
59 須 恵	壺 口縁部20分の1片	口 径 238 残 高 41	口縁部が外反し、口唇で下突するラインを示す。	口縁で横ナデ、その他でロクロ整形を施す。	灰褐色緻密堅固

48Pは、東西径1.18m、北南径1.02m、深さ0.60mあり、不整隅丸形状をなしている。柱穴底は、皿状をなしており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱根は土層から柱穴の北西部で確認された。



第18図 第4号掘立建物址出土遺物実測図

49Pは東西径1.10m、北南径0.98m、深さ0.45mあり、不整隅丸方形をなしている。柱穴底はほぼ平担であり、北壁、西壁、南壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、東壁は斜めに立ち上がっている。

出土遺物としては、第18図に示したような環型土器、甕型土器が検出されている。

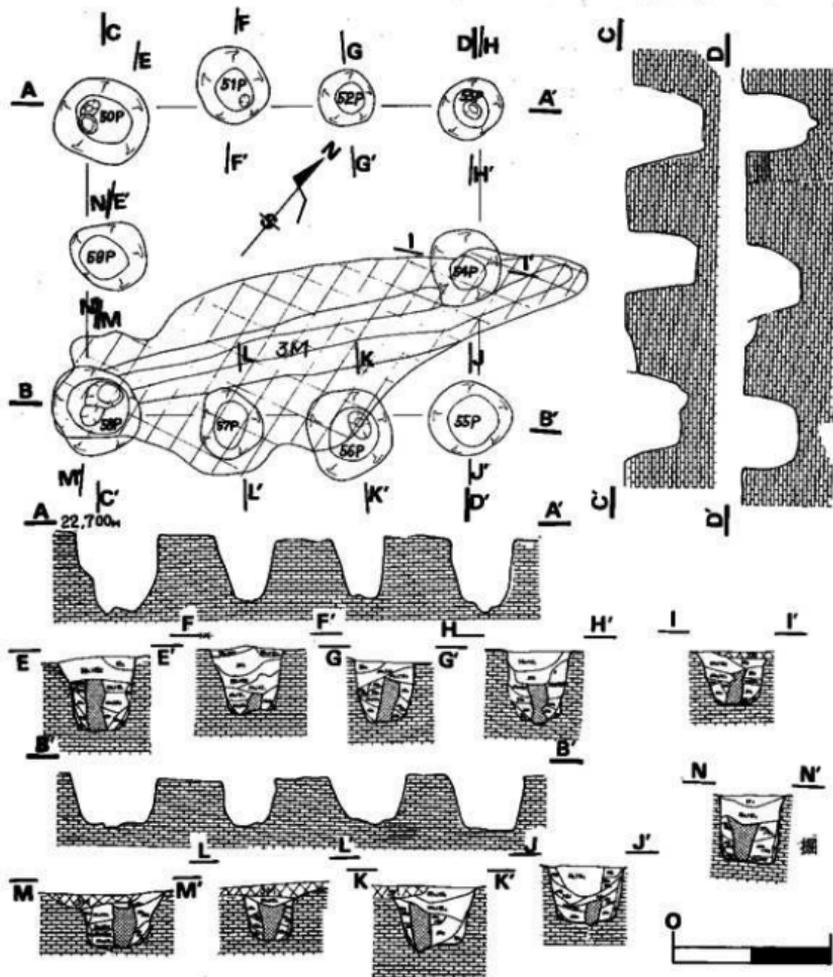
7 第5号掘立建物址

この遺構は、第4号掘立建物址と第2号掘立建物址のほぼ中央付近において確認され、N-37°-Wに主軸を有し、 $4 \times 2 + 2 = 10$ 本の柱穴よりなる第5号掘立建物址である。北面径4.50m (50Pと51P間が1.47m、51Pと52P間が1.46m、52Pと53P間が1.98m)である。南面径4.52m (55Pと56P間が1.41m、56Pと57P間が1.60m、57Pと58P間が1.51m)であり、西面径4.03m (58Pと59P間が2.20m、59Pと50P間が1.83m)、各々有している。こうして見ると、多少の誤差はあるものの各面ともほぼ対比していると考えて良いのであろう。こうして見ると、50Pと51P間の1.47mに対して、58Pと57P間は1.51mであり、0.04mだけ南面が広くなっている。51Pと52P間の1.46mに対し、57Pと56P間は1.60mであり、0.14mだけ南面が広くなっている。52Pと53P間の1.57mに対し56Pと55P間は1.41mであり、0.16mだけ北面が広くなっている。また、53Pと54P間の2.05mに対し、50Pと59P間は1.83mであり、0.22mだけ東面が広くなっている。54Pと55P間の1.98mに対し、59Pと58P間は2.20mであり、0.22mだけ西面が広くなっている。このように、各柱間で見ると多少の誤差は、認められるが、各面ともほぼ対比していると考えられる。次に各柱穴を述べる。

50Pは、東西径1.15m、北南径1.05m、深さ0.96mあり、隅丸長方形をなしている。柱穴底は平担であり、壁は柱穴底より0.60m上方までほぼ垂直に立ち上がっているが、ここから柱穴掘り口部までは斜めに立ち上がっている。また、柱穴底の北西部には、柱を立てるために掘ったと考えられる小pitがあるが、この小pitの部分に柱は建てられなかったようである。小pitは、東西径0.24m、北南径0.21m、深さは柱穴底より0.10mで柱穴掘り口部からは1.05mあり、楕円形をなしている。小pitの底は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっている。柱根は、土層から柱穴の中央部から北東部にかけて、立てられたようである。51Pは、東西径0.85m、北南径1.00m、深さ0.83mあり、楕円形をなしている。柱穴底は皿状をなしており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱根は、土層から柱穴のほぼ中央部から中央南東側に向け確認された。

52Pは、東西径0.69m、北南径0.74m、深さ0.80mあり、ほぼ円形状を呈している。柱穴底はほぼ平担であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱根は、土層から柱穴の中央部から中央南東部に向け確認された。

53Pは、東西径0.74m、北南径0.85m、深さ0.86mあり、楕円形をなしている。柱穴底は皿状をなしており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。また、柱穴底の中央部には柱根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.25m、北南径0.20m、深さは柱穴底より0.06m柱穴掘り口部からは0.95mあり、楕円形をなしている。小 pit の底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がり



第19図 第5号掘立建物址実測図

っている。柱根は、この小 pit の部分から柱穴の中央南東部にかけて確認された。

54Pは、東西径0.97m、北南径0.89m、深さ0.68mあり、不整楕円形をなしている。柱穴底は、多小凹凸を有しているがほぼ平坦であり、東壁は緩やかに立ち上がっているが、北壁、南壁、西壁は斜めに立ち上がっている。柱根は、その土層から柱穴の中央や北東側で確認された。

55Pは、東西径0.93m、北南径1.00m、深さ0.74mあり、不整形形状を呈している。柱穴底は皿状をなしており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱根は、その土層から柱穴の南西部で確認され、柱が柱穴底に接している部分が0.05m程度凹んでいる。

56Pは、東西径1.12m、北南径1.03m、深さ0.60mあり、隅丸形状を呈している。柱穴底は平坦であり、柱穴底から壁に至る部分は緩やかに立ち上がっており、そして北壁、南壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、東壁、西壁は斜めに立ち上がっている。柱穴底には、柱根部と考えられる小 pit が、柱穴の北西部にある。この小 pit は、東西径0.38m、北南径0.25m、深さは柱穴底より0.07mで柱穴掘り口部からは0.85mある。小 pit の底は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。この小 pit の部分で、土層から柱が小 pit の中央部から柱穴北西部にかけて確認された。

57Pは、東西径0.89m、北南径0.80m、深さ0.55mあり、隅丸三角形形状を呈している。柱穴底は、北東部が少々高くなっている以外はほぼ平坦であり、東壁は緩やかに立ち上がっているが、北壁、南壁、西壁ではほぼ垂直に立ち上がっている。柱根は、土層から北東から南西にかけて確

第12表 第5号掘立建物柱穴一覧表

No.	柱 穴 部 (m)				p i t 部 (m)				
	東西径	北南径	深 さ	形 状	東西径	北南径	深さ1	深さ2	形 状
50P	1.15	1.05	0.96	隅丸長方形	0.24	0.21	0.10	1.06	楕円形
51P	0.85	1.00	0.83	楕円形					
52P	0.69	0.74	0.80	円形					
53P	0.74	0.85	0.86	楕円形	0.25	0.20	0.06	0.72	楕円形
54P	0.97	0.89	0.68	不整楕円					
55P	0.93	1.00	0.74	不整形					
56P	1.12	1.03	0.60	隅丸方形	0.38	0.25	0.07	0.67	楕円形
57P	0.89	0.80	0.55	隅丸三角形					
58P	1.18	1.03	0.65	不整形	0.38	0.42	0.12	0.77	楕円形
59P	0.88	0.90	0.86	不整形					

認められた。

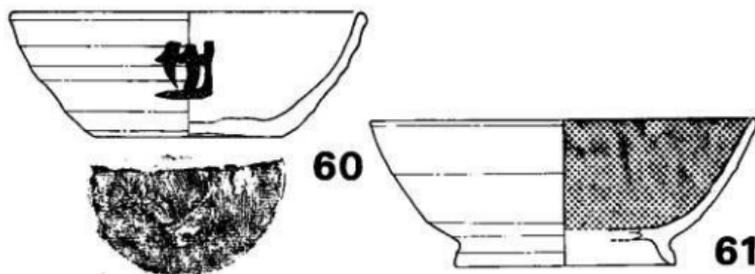
58Pは、東西径1.18m、北南径1.03m、深さ0.65mあり、不整形形状を呈している。柱穴底は、平垣であり壁は緩やかに立ち上がっている。柱穴底の北側には、柱根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.38m、北南径0.42m、深さ0.77mあり、楕円形をなしている。小 pit の底は平垣であり、壁は斜めに立ち上がっている。また、小 pit の南西には、柱穴底より0.05mの深さを有する凹がある。凹の底は平垣で、壁は斜めに立ち上がっている。柱根は、土層からこの凹から柱穴の東側にかけて確認された。

59Pは東西径0.88m、北南径0.90m、深さ0.86mあり不整形形状を呈している。柱穴底は、平垣であり、壁は柱穴底より0.60mの所まで柱穴底の付近でやや湾曲しながらほぼ垂直に立ち上がり、ここから柱穴掘り口部にかけては斜めに立ち上がっている。柱根は、土層から柱穴の北西部で確認された。

出土遺物としては、58Pの柱穴底より「世」の墨書名を有する坏型土器 (No60) や、高台付坏 (No61) が検出されている。

第13表 第5号掘立建物出土遺物一覧表

器形	残状	器測(ミリ)	形態上の特徴	手法上の特徴	器状 (色調 胎土 焼成)
5H 60 土師	2分の1 完形	口径 124 底径 66 器高 44	平底部より外周ぎみに 外反するラインを程す る。	底部で回転ヘラ切り後 周縁でヘラナデ、その他 ロゴロ整形し墨書を施す。	褐色で墨書 緻密 堅固
61 土師	10分の1 片	口径 136 瀬径 78 器高 52	外反する高台部より、 外周ぎみに外反するラ インを程する。	高台部は強付し、横ナ デを施す。その後内面 で黒彩処理をする。	褐色 緻密 堅固



第20図 第5号掘立建物址出土遺物実測図

8 第6号掘立建物址

この遺構は、第2号掘立建物址の北西隣において確認され、N-38°-Wに主軸を有し2間4面
で、柱数が $3 \times 2 + 2 = 8$ 本より成る第6号掘立建物址である。

北面径5.22m (60Pと61P間が2.84m、61Pと62P間は2.40m)、東面径4.46m (62Pと63P間
が2.18m、63Pと64P間は2.28m)、南面径5.25m (64Pと65P間が2.05m、65Pと66P間は3.20
m)、西面径4.47m (66Pと67P間が2.50m、67Pと60P間は1.97m)、各々有している。こうする
と、東面の4.46mに対して、西面は4.47mであり差は0.01mだけ西面が広がっている。これを
各柱間で見ると、62Pと63P間が2.18mであるのに対し、60Pと67P間は1.97mで差は0.21m東
側が、63Pと64P間が2.18mであるのに対し67Pと66P間は2.50mで差は0.32mだけ西側が広く
なっている。以上のことから、東面と西面には一定の規格性を認めることが出来る。これに対し
て、北面と南面はどうであろうか。北面径は5.22mであり、南面径が5.25mであり、差は0.03m
であり南面が広がっている。この数値から判断すると一定の規格性を認めることが出来るが、
各柱間で見るとそうとは言えない。それは、60Pと61P間が2.84mであるのに対し66Pと65P間
は3.20mであり、差は0.36mで南面が広がっている。また、61Pと62P間が2.40mであるの
に対し65Pと64P間は2.05mであり、差は0.35mで前者とは逆に北面が広がっている。このよう
に、北面と南面では東面と西面における一定の規格性は認められない。以下に各柱穴について述
べる。

60Pは、東西径0.83m、北面径0.79m、深さ0.49mあり、隅丸形状をなしている。柱穴底は
平坦であり、北壁、東壁、西壁、はほぼ垂直に立ち上がっているが、南壁は斜めに立ち上がって
いる。柱根は、柱穴の南西部で確認された。

61Pは、東西径0.88m、北面径0.55m、深さ0.58mあり、楕円形をなしている。柱穴底は平坦
であり、壁は斜めに立ち上がっている。また、北西壁に接して柱根部と考えられる小 pit がある。
この小 pit は、東西径0.27m、北面径0.33m、深さは柱穴底から0.10mであり柱穴掘り口部から
は0.68mで、楕円形をなしている。小 pit の底は、皿状をなしておら、壁は緩やかに立ち上がっ
ている。

62Pは、東西径0.73m、北面径1.00m、深さは中央で0.58mあり、隅丸長方形形状をなしている。
柱穴底は、中央に稜を有し東側と西側に平坦面を有している。東側の平坦面は、東西径0.40m、
北面径0.55m、深さは稜頂より0.05mで柱穴掘り口部より0.63mあり、底は平坦で壁はほぼ垂直
に立ち上がっている。西側は、その土層から柱根部と考えられる。この部分は、東西径0.25m、
北面径0.50m、深さは稜頂より0.08mあり柱穴掘り口部より0.66mあり、不整形円形をなしてい
る。底は皿状をなし、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

63Pは、東西径0.80m、北南径0.80m、深さ0.56mあり、不整形をなしている。柱穴底は、北東部が高く北西部が低くなっている。前者が平坦となっており、後者は皿状をなしている。また、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。なお、柱根はその土層から柱穴の中央や北西部において確認された。

64Pは、東西径0.83m、北南径0.81m、深さ0.64mあり、不整形をなしている。柱穴底は東側が平坦であるが、北西、南、西、では皿状をし、北西壁に接している柱根部の小 pit に向い緩やかに下降している。壁は、北壁から南壁にかけては緩やかに立ち上がっているが、東壁から南壁にかけてはほぼ垂直に立ち上がっている。柱根部の小 pit は、東西径0.22m、北南径0.30m、深さは柱穴底より0.08mで柱穴掘り口部より0.72mである。小 pit の底は平坦であり、北東壁のみほぼ垂直に立ち上がっているが、他の壁は斜めに立ち上がっている。なお、小 pit の形状は楕円形をなしている。

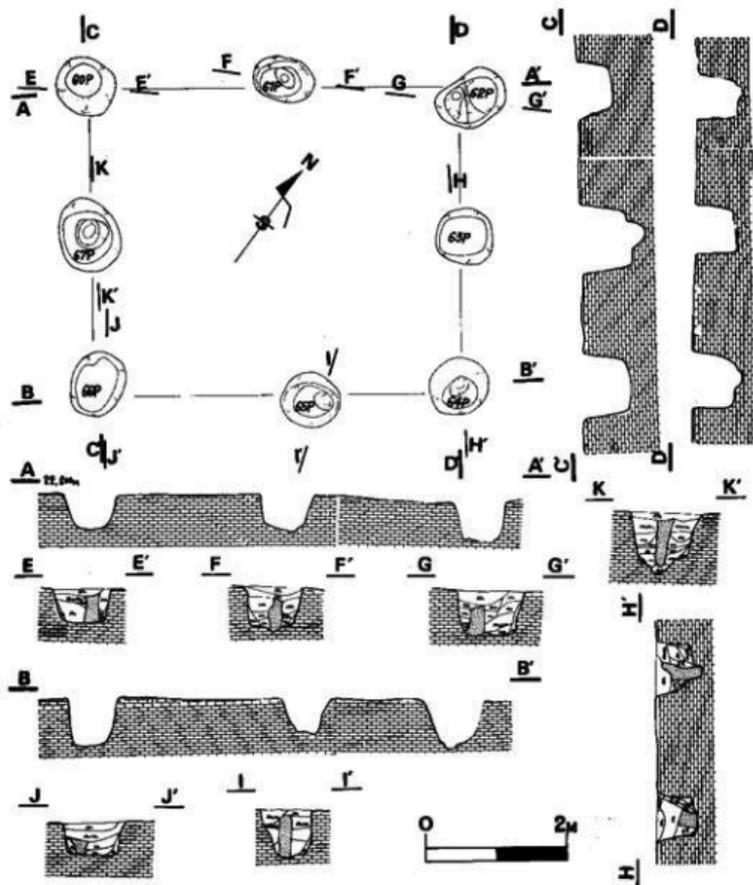
65Pは、東西径0.84m、北南径0.77m、深さ0.49mあり、楕円形状をなしている。柱穴底は皿状をなし、東壁、西壁、南壁は、緩やかに立ち上がっているが、北壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱穴底の東壁部には、柱根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.29m、北南径0.23m、深さは柱穴底より0.07mで柱穴掘り口部から0.56mあり、楕円形をなしている。小 pit の底は皿状をなしており、壁は緩やかに立ち上がっている。

66Pは、東西径0.75m、北南径0.93m、深さ0.69mあり、楕円形をなしている。柱穴底は皿状をなしており、北壁、西壁、南壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、東壁では緩やかに立ち上がっている。柱根は、その土層より柱穴の北側で確認された。

第14表 第6号掘立建物址柱穴一覧表

系	柱 穴 部 (m)				p i t 部 (m)				
	東西径	北南径	深 さ	形 状	東西径	北南径	深さ1	深さ2	形 状
60P	0.83	0.79	0.49	隅丸方形					
61P	0.88	0.55	0.58	楕円形	0.27	0.33	0.10	0.68	楕円形
62P	0.73	1.00	0.58	隅丸長方形	0.25	0.50	0.08	0.66	不整楕円
63P	0.80	0.80	0.56	不整形					
64P	0.83	0.81	0.64	不整形	0.22	0.30	0.08	0.72	楕円形
65P	0.84	0.77	0.49	楕円形	0.29	0.23	0.07	0.56	楕円形
66P	0.75	0.93	0.69	楕円形					
67P	1.08	0.84	0.76	楕円形	0.46	0.42	0.15	0.91	不整楕円形

67Pは、東西径1.08m、北南径0.84m、深さ0.76mあり、楕円形をなしている。柱穴底は皿状をなしており、壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、北壁では底より0.35mの所から柱穴掘り口部にかけて緩やかに立ち上がっている。柱穴底の中央部には、柱根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.46m、北南径0.42m、深さは柱穴底より0.15mで柱穴掘り口部からは0.91mあり、不整楕円形状をなしている。小 pit の底は皿状をなし、壁はほぼ垂直に立ち上がっ



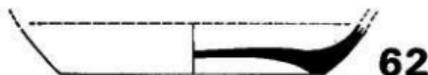
第21図 第6号掘立建物址実測図

ている。また、この小 pit 掘り口部より約0.10mの所に稜を有し、小 pit の底へと下降している。

出土遺物としては、土師器の坏型土器や同破片が検出された。坏型土器としては、No86の遺物が唯一の遺物である。他の遺物は、全て小破片である。時期は、国分期に比定される。

第15表 第6号掘立建物址出土遺物一覧表

	器形	残状	器測(ミリ)	形態上の特徴	手法上の特徴	器状 (色調 胎土 焼成)
6H 62	甕 陶器	底部片	底径 92 残高 18	上底ぎみの底部より、ゆるやかに外反するラインを示すと思われる。	ロクロ整形を施す。	褐色で白繪 緻密 堅固



第22図 第6号掘立建物址出土遺物実測図

9 第7号掘立建物址

この遺構は、調査区の南西端で第5号掘立建物址の南西方向で確認され、N-45°-Wに主軸を有し北面と南面が各2間で東面と西面各3間の4×2+2=10本、からなる第7号掘立建物址である。

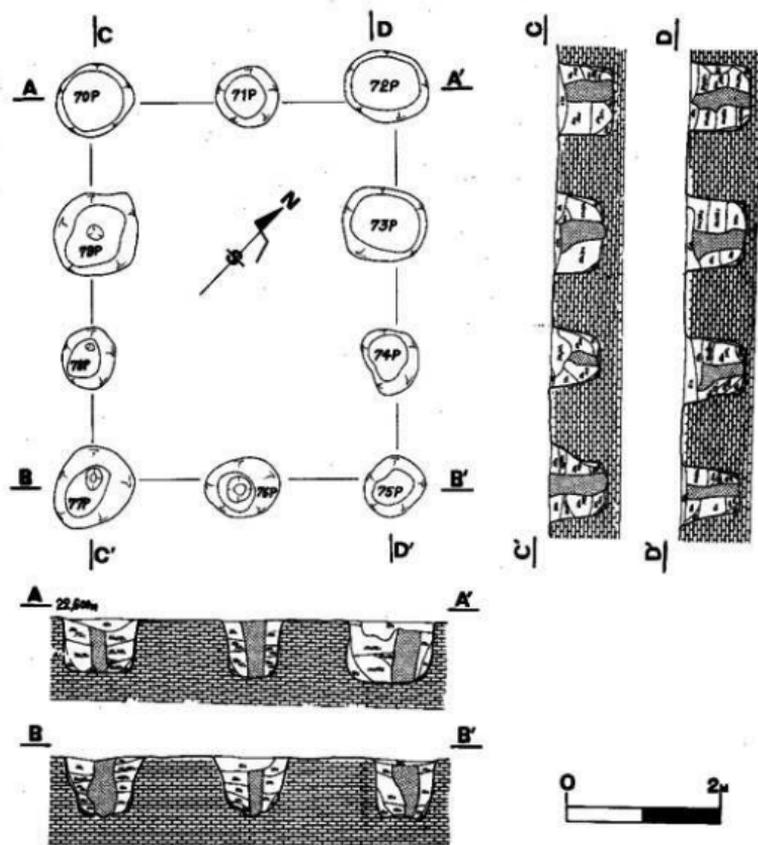
北面径3.84m (70Pと71P間は2.10m、71Pと72P間は1.74m)、東面径5.28m (72Pと73P間は1.83m、73Pと74P間は1.70m、74Pと75P間は1.74m)、南面径3.85m (75Pと76P間は1.80m、76Pと77P間は2.05m)、西面径5.27m (77Pと78P間は1.72m、78Pと79P間は1.70m、79Pと70P間は1.85m)、各々有している。こうすると、東面の5.28mに対し西面は5.27mあり、差は0.01mではば対比している。

これを各柱間で見ると、72Pと73P間の1.83mに対し70Pと79P間は1.85mであり、差は0.03mある。73Pと74P間の1.70mに対し79Pと78P間は1.70mであり、対比している。74Pと75P間の1.74mに対し78Pと77P間は1.72mであり、その差は0.02mである。このように、東面と西面の各柱間は差こそ認められるが差は非常に小さく、一定の規格性を認ることが出来る。

北面と南面では、70Pと71P間の2.10mに対し77Pと76P間は2.05mであり、その差は0.05m

である。71Pと72P間の1.74mに対し76Pと75P間は1.80mであり、その差は0.06mである。このように、北面の西側と南面の西側は、その柱間の差が小さくほぼ同間隔と判断され、北面東側と南面東側においても差は小さく北面と、ほぼ対比しているものと考えられる。次に各柱穴について述べる。

70Pは、北南径0.99m、東西径0.90m、深さ0.74mあり、隅丸形状をなしている。柱穴底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱根は、柱穴のほぼ中央部で確認された。71Pは、



第23図 第7号掘立建物址実測図

東西径0.81m、北南径0.79m、深さ0.76mあり、不整楕円形状をなしている。柱穴底は皿状をなしており、壁は底より0.50m上方まではほぼ垂直に立ち上がっているが、ここから柱穴掘り口部までは斜めに立ち上がっている。また、柱根は柱穴の中央やや北側で確認された。

72Pは、東西径1.10m、北南径0.94m、深さ0.80mあり、楕円形をなしている。柱穴底は平坦であり、楕円形をなしている。東壁、北壁、南壁では底から0.30m上方の所まで緩かに湾曲しながら立ち上がっているが、ここから柱穴掘り口部まではほぼ垂直に立ち上がっている。また、西壁においては柱穴底の付近で0.06m程度壁内に入り込んでいる。なお柱根は、柱穴の中央やや南西部で確認された。

73Pは、東西径1.11m、北南径0.98m、深さ0.64mあり、隅丸形状をなしている。柱穴底は皿状をなし、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。また、柱根は柱穴の中央やや南西部で確認された。74Pは、東西径0.89m、北南径0.69m、深さ0.78mあり、不整方形形状をなしている。柱穴底は平坦であり、北東壁、北壁、西壁では緩かに立ち上がっているが、東壁、南壁では柱穴底より0.23mの所まで緩かに立ち上がっているが、ここから柱穴掘り口部までは斜めに立ち上がっている。また、柱根は柱穴の中央やや南西部で確認された。

75Pは、東西径0.70m、北南径0.80m、深さ0.75mあり、隅丸方形をなしている。柱穴底は皿状をなし、南壁は斜めに立ち上がっているが北壁、東壁、西壁ではほぼ垂直に立ち上がっている。柱根は、柱穴の中央やや北西部において確認された。76Pは、東西径0.97m、北南径0.80m、深

第16表 第7号掘立建物址柱穴一覧表

No	柱 穴 部 (a)				p i t 部 (a)				
	東西径	北南径	深 さ	形 状	東西径	北南径	深さ1	深さ2	形 状
70P	0.90	0.99	0.74	隅丸方形					
71P	0.81	0.79	0.76	不整楕円					
72P	1.10	0.94	0.80	楕 円 形					
73P	1.11	0.98	0.64	隅丸方形					
74P	0.89	0.69	0.78	不整方形					
75P	0.70	0.80	0.75	隅丸方形					
76P	0.97	0.80	0.75	楕 円 形	0.30	0.33	0.07	0.82	方 形
77P	0.95	1.15	0.73	楕 円 形	0.20	0.28	0.04	0.77	楕 円 形
78P	0.68	0.81	0.62	楕 円 形	0.12	0.10	0.04	0.66	楕 円 形
79P	1.10	1.08	0.64	不整方形	0.21	0.17	0.05	0.69	楕 円 形

き0.75mあり、楕円形をなしている。柱穴底は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっている。柱穴底の中央部には、柱根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.30m、北南径0.33m、深さは柱穴底より0.07mで柱穴掘り口部からは0.82mあり、方形状をなしている。小 pit の底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。

77Pは、東西径0.95m、北南径1.15m、深さ0.73mあり、楕円形をなしている。柱穴底はほぼ平坦であり、北壁と東壁では底から0.37mの所までは緩やかに立ち上がっており、ここから柱穴掘り口部まで斜めに立ち上がっている。南壁では、柱穴底から柱穴掘り口部までほぼ垂直に立ち上がっており、西壁では底から0.37mの所までほぼ垂直に立ち上がっているが、ここから柱穴掘り口部までは緩やかに立ち上がっている。また、柱穴底の北西部には柱根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.20m、北南径0.28m、深さは柱穴底より0.04m柱穴掘り口部からは0.77mあり、楕円形をなしている。小 pit の底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。

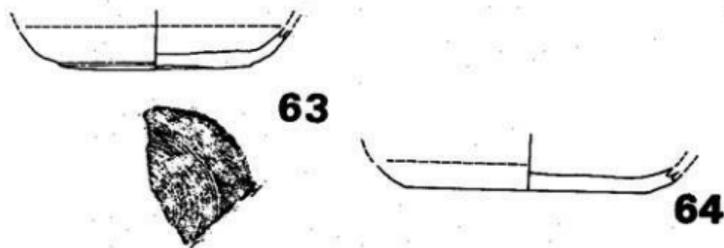
78Pは、東西径0.68m、北南径0.81m、深さ0.62mあり、楕円形状をなしている。柱穴底は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっている。柱穴底の北東部には、柱根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.12m、北南径0.10m、深さは柱穴底より、0.04mで柱穴掘り口部より0.66mあり、楕円形をなしている。小 pit の底は平状をなし壁は斜めに立ち上がっている。

79Pは、東西径1.10m、北南径1.08m、深さ0.64mあり、不整形形状をなしている。柱穴底は皿状をなし、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱穴底の中央部には、柱根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.21m、北南径0.17m、深さは柱穴底より0.05mで柱穴掘り口部より0.69mあり、楕円形をなしている。小 pit の底は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっている。

出土物としては、土器器環型土器の小破片が検出されただけで、時期決定及決定可能な遺物は検出されなかった。

第17表 第7号掘立建物址出土遺物一覧表

	器形	残状	器測(ミリ)	形態上の特徴	手法上の特徴	器状 (色調 胎土 焼成)
7H 63	環 土師	底部3分の 1片	底径 66 残高 15	平底部より外屈ぎみに 移行するラインを示す ものと思われる。	底部でヘラ切り後、周 縁でヘラナデ、その他 でロクロ整形を施す。	淡褐色 緻密 堅固
64	不明 土師	底部2分の 1片	底径 84 残高 9	平底部より外屈ぎみに 移行するラインを示す ものと思われる。	底部でヘラナデ、その 他でロクロ整形を施す。	褐色 緻密 硬質



第24図 第7号掘立建物址出土遺物実測図

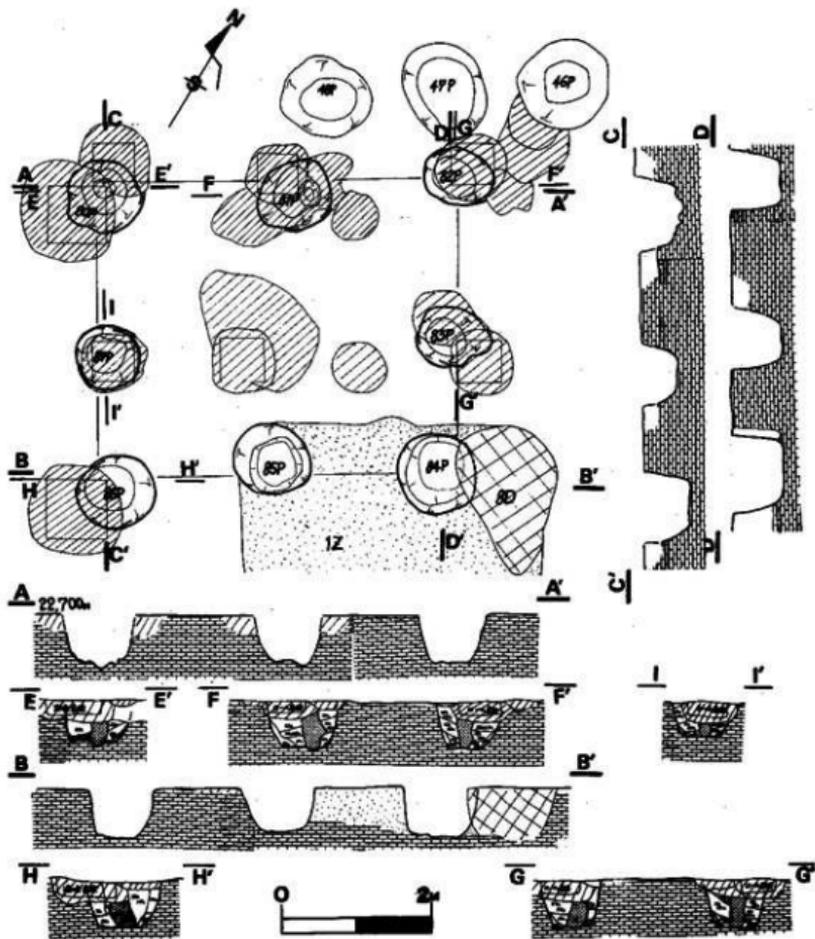
10 第8号掘立建物址

この遺構は、第1号住居址と重複しており、かつ第4号掘立建物址との中間で確認され、N-35°-Wに主軸を有し $3 \times 2 + 2 = 8$ 本の柱穴よりなる第8号掘立建物址である。また、この遺構は、旧校舎時代における基礎の為80P、81P、82P、83P、87Pの各柱穴上部が破壊され、84Pと85Pは第1号住居址と重複している。

北面径4.50m (80Pと81P間は2.62m、81Pと82P間が1.88mである)で、東面径は3.90m (82Pと83P間は2.13mで、83Pと84P間は1.77mである)である。南面径は4.59m (84Pと85P間は2.35mで85Pと86P間が2.34mである)で、西面径は3.90m (86Pと87P間が1.58mで87Pと80P間が2.32mである)だけ、各々有している。こうして見ると、北面と南面に多少の差はあるものの各面とも対比していると考えられ、一定の規格性を認めることが出来る。これを各柱間で見ると、80Pと81P間の2.62mに対し86Pと85P間は2.34mであり、0.28mだけ北面が広くなっている。81Pと82P間の1.88mに対し85Pと84P間は2.35mであり、0.47mだけ南面が広くなっている。このように、北面中央の柱穴(81P)と南面中央の柱穴(85P)とでは、その柱間は逆の柱間を示している。これに対し東面と西面では、82Pと83P間の2.13mに対し80Pと87P間は2.32mであり、0.17mだけ西面が広くなっている。83Pと84P間の1.77mに対し87Pと86P間は1.58mであり0.19mだけ、東面が広くなっている。このように、東面・西面においても前者と同様逆の結果が得られたが、北面と南面の誤差より小さい誤差であるため、ほぼ対比していることと考えられる。絶対的に見ると、各面は共に対比していると考えて良いであろう。次に各柱穴について述べる。

80Pは、東西径0.97m、北南径0.90m、深さ0.65mあり、隅丸方形をなしている。柱穴底は、少々凸凹を有するものの比較的平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。柱穴底の西側には、

柱根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.25m、北南径0.29m、深さは柱穴底より0.11mで柱穴掘り口部からは0.76mあり、隅丸長方形をなしている。小 pit の底は小さく皿状をなしており、壁は緩やかに立ち上がっている。柱は土層から、この小 pit の部分で確認された。81Pは、東西径0.90m、北南径1.02m、深さ0.60mあり、北南にやや長い隅丸方形を呈している。柱穴底は皿状を呈しており、壁は緩やかに立ち上がっている。柱穴底の北東部には柱



第25図 第8号掘立建物址実測図

根部と考えられる小 pit がある。この小 pit は、東西径0.34m、北南径0.25m、深さは柱穴底より0.07mで柱穴掘り口部からは0.67mであり、長方形をなしている。小 pit の底は、平坦であり壁は緩やかに立ち上がっている。柱は、この小 pit の部分から柱穴北西部にかけて確認された。

82Pは、東西径0.93m、北南径0.75m、深さ0.62mあり、楕円形をなしている。柱穴底は、ほぼ平坦であり壁は緩やかに立ち上がっている。柱は、土層から柱穴のほぼ中央で確認された。

83Pは、東西径0.84m、北南径0.84m、深さ0.65mあり、楕円形を呈している。また、北東部は0.15m程度突出している。柱穴底は平坦であり、壁は掘り口に向って斜めに立ち上がっている。

84Pは、東西径1.05m、北南径1.02m、深さは推定で0.68mであり、隅丸方形をなしている。柱穴底は、二段となっているが共に平坦であり壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱は、柱穴に北東部にあったことと推定される。85Pは、東西径0.98m、北南径0.95m、深さは推定で0.60mあり、不整形形状を呈している。柱穴底は皿状をなしており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱は、柱穴の南東部にあったことと考えられる。

86Pは、東西径0.98m、北南径1.02m、深さ0.65mあり、隅丸方形形状を呈している。柱穴底はやや皿状をなしており、東壁・南壁では緩やかに立ち上がっているが、北壁と西壁ではほぼ垂直に立ち上がっている。柱は、その土層から柱穴の北西部で確認された。

87Pは、東西径0.85m、北南径0.82m、深さ0.48mあり、隅丸方形をなしている。柱穴底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。柱は、その土層から柱穴の北東部で確認された。

出土遺物としては、土師器坏型土器小破片、須恵器小破片などが検出されたが、時期決定可能な遺物は検出されなかった。

第19表 第8号掘立建物址柱穴一覧表

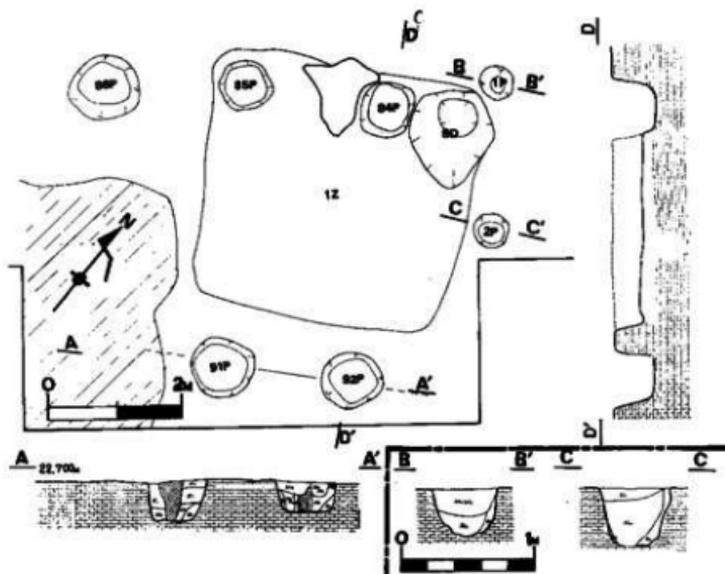
No	柱 穴 部 (m)				p i t 部 (m)				
	東西径	北南径	深 さ	形 状	東西径	北南径	深さ1	深さ2	形 状
80P	0.97	0.90	0.65	隅丸方形	0.25	0.29	0.11	0.76	隅丸長方形
81P	0.90	1.02	0.60	隅丸方形	0.34	0.25	0.07	0.67	長 方 形
82P	0.93	0.75	0.62	楕 円 形					
83P	0.84	0.84	0.65	楕 円 形					
84P	1.05	1.02	(0.68)	隅丸方形					
85P	0.98	0.95	(0.60)	不整形					
86P	0.98	1.02	0.65	隅丸方形					
87P	0.85	0.82	0.48	隅丸方形					

11 第9号掘立建物址

この遺構は、第1号住居址の南方において確認された。2本の柱穴以外、調査区域外や攪乱ため不明であるが、本来は $3 \times 2 + 2 = 8$ 本の柱穴からなる掘立建物址と考えられる。91Pと92P間は2.00mであり、北面の柱と柱間であり、その柱間の数値は第2号掘立建物址北面の柱間と同数値である。したがって、この第9号掘立建物址は前述のように $3 \times 2 + 2 = 8$ 本の柱穴よりなる掘立建物址と考えられる。

91Pは、東西径0.93m、北南径0.90m、深さ0.61mあり、不整形形状を呈している。底はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。柱根は、柱穴の中央やや西側でその土層から確認された。

92Pは、東西径0.84m、北南径0.88m、深さ0.49mあり、隅丸方形形状を呈している。底は平坦であり、北東壁から南壁にかけてはほぼ垂直に立ち上がっているが、北西壁から南壁にかけては緩かに立ち上がっている。柱根は、柱穴の中央よりやや南側でその土層から確認された。主軸は、N-32°-Wにあるようである。



第26図 第9号掘立建物址・第1号・第2号柱穴実測図

遺物は、土師器の小破片が検出されたが、時期決定は不可能である。

第19表 第9号掘立建物址柱穴一覧表

No.	柱 穴 部				pit部				
	東西径	北南径	深 さ	形 状	東西径	北南径	深さ1	深さ2	形 状
91P	0.93	0.90	0.61	不整形					
92P	0.84	0.88	0.49	隅丸方形					

小 結 —掘立建物址について—

今回の調査で確認された9基の掘立建物址を分類すると、2間×2間で方形をなす掘立建物址は5基（1号掘立建物址・2号掘立建物址・3号掘立建物址・6号掘立建物址・8号掘立建物址）であり、2間×3間で長方形をなす掘立建物址は3基（4号掘立建物址・5号掘立建物址・7号掘立建物址）である。前者をⅠ式・後者をⅡ式として述べる。

○ Ⅰ式掘立建物址

この系列に分類される掘立建物址は前記の如く5棟あるがこれを主軸から見ると、1号がN-27°-W、2号がN-41°-W、3号がN-30°-W、6号がN-35°-W、8号がN-35°-W、といった方向に主軸を有しており北西方向を向いている。角度から見ると、6号と8号が同一方向で3号がこれより5°東側に向いている。最も西側に位置するのが2号であり、最も東側に位置するのが1号である。このように、Ⅰ式ではその角度から6号と8号が同一時期に建てられたようであり、この次に来るのが3号であろうし、1号と2号が前記の三掘立建物址の前後に来るのではあるまいか。

次に柱配置から見ると、各掘立建物址の各4面径は各々異なった数値を示しているが、これの柱配置を見ると三類に分類出来るようである。つまり、東面と西面が対比しているのに対し北面と南面とは逆の柱配置をなしている掘立建物址（2号、3号、8号）と、4面の柱配置がほぼ対比している掘立建物址（6号）があり、前者をⅠ類とし後者をⅡ類とすることが出来るであろう。

Ⅰ類に入る3掘立建物址のうち、東面と西面は対比しているが北面と南面は逆の柱配置をなしている。つまり、北面西側の柱間は広がっているが東側の柱間は狭くなっているのに対し、南面西側の柱間が狭く東側の柱間が広がっている、といった柱配置の掘立建物址であり、この柱配置を持つのは3号・8号の2掘立建物址である。なお、2号掘立建物址は北面と南面の柱配置は逆であるが、前記の2掘立建物址とは逆の柱配置を示している。つまり、2号掘立建物址の北面は西側柱間が狭く東側の柱間が広がっているのに対し、南面西側が広く東側が狭くなっている。

Ⅱ類に入る掘立建物址は、第6号掘立建物址である。この掘立建物址は、東面と西面はⅠ類と同様であるが、北面と南面はⅠ類とは異なっている。つまり、北面西側の柱間が東側より多少程度広くなっている。南面も北面と同様である。

以上が、Ⅰ式に入る掘立建物址の概要である。これを、以上の結果から時期別に配列するならば、6号と8号がⅠ類とⅡ類との差はあるが同一方向であるため、同一時期に建てられたと考えられ、2号と3号が前者2掘立建物址と相前後して建てられたものと考えられる。なお、第1号掘立建物址はⅠ式に含まれるようであるが、Ⅰ類かⅡ類か不明でありその建立時期は2号・3号と同一時期と考えられる。

○ Ⅱ式掘立建物址

このⅡ式掘立建物址は、前にも述べたが2間×3間からなる掘立建物址で4号、5号、7号、の3掘立建物址である。これらの柱配置は、各掘立建物址共同様の配置でありⅠ式ほどの差は認められなかった。共通した点といえば、3間に当る面での中央柱間が各掘立建物址共ほぼ共通している点である。

これを、掘立建物址の向きから見ると、北面と南面に3間があるもの～つまり、東西方向に長径があるもの～と、南北方向に長径があるもの、とがある。前者には4号と5号の2掘立建物址があり、後者には7号が相当している。

次に、これら3掘立建物址の方向を見ると4号掘立建物址は $N-31^{\circ}-W$ であり、5号掘立建物址は $N-37^{\circ}-W$ で、7号掘立建物址が $N-42^{\circ}-W$ である。こうして見ると、4号と5号との差は 6° でありほぼ同一時期と考えられ、この前後に4号が建てられたようである。また、出入口及窓的施設は、2間の部分に設けられたのではなからうか。

○ Ⅰ式・Ⅱ式における時期について

以上まで、各形式について述べて来たが、掘立建物址群であるため時期的な問題が最も重要であろうし、今まで述べて来た掘立建物址の前後関係で良いのであろうか。これを解決するのは、各掘立建物址の主軸にあるようである。しかし、各掘立建物址共第1表に示した如く同一方位は6号と8号だけであり、他は全て異なっているが、以下に-応まとめて見るならば、 $N-30^{\circ}-W$ から $N-35^{\circ}-W$ 以内に主軸を有するものは3号、4号、9号の3掘立建物址である。これを、仮に時期Aとする。次に来るのが、 $N-35^{\circ}-W$ から $N-37^{\circ}-W$ 以内に主軸を有する5号、6号、8号の3掘立建物址であり、仮りに時期Bとする。 $N-40^{\circ}-W$ から $N-41^{\circ}-W$ に主軸を有する2号と7号が、仮りに時期Cとすると、A、B、C、といったような三期に分類することが出来るのではあるまいか。また、B期の5号掘立建物址で55Pと58Pから、国分期に比定される土師器が検出されているため、このB期に含まれる掘立建物址は国分期と判断して良いのではなからうか。とすれば、A期とC期の時はこれら2期に含まれる各掘立建物址の各柱穴から検出された土師器

片、などから判断してB期と同様国分期と推定される。また、第1号掘立建物址はN-27°-Wに主軸を有しているが、ほぼ国分期と判断されるし、第9号掘立建物址は第1号住居址を切っているため、第1号住居址（国分期）より新しいことは誤りないが、国分期より新しいか不明であるが、その主軸からA期に含めた次第である。なお、今回の調査で確認されたことであるが、柱は柱穴の中央部にかならずしも建てられなかったようであり、柱穴内に柱を建てた後地上面でも多少柱の位置を変更しながら建てたようである。また、瓦及瓦片は一点も検出されなかったため、切妻造りで屋根を構成し、屋根は板・木の皮などで屋根を覆っていたのではなかろうか。用途としては、高床式の倉庫か住居と考えられる。

以上が、今回の調査で確認された掘立建物址についての考察であるが、より広範囲での調査結果が得られるならば、前記の諸問題が解明することと考えられる。

(藤原 均)

参考文献

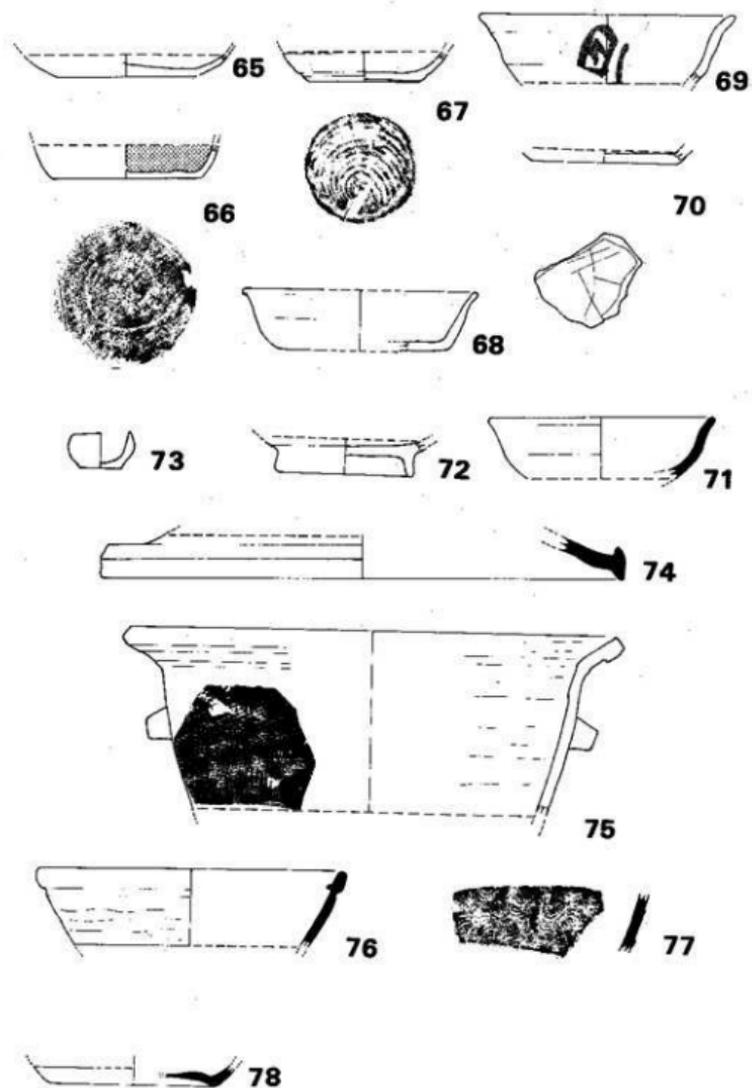
- 「桑納前畑遺跡」（八千代市教育委員会）
「稲倉考」（八幡一郎 著 考古民俗叢書16 1978）
「平城京左京三条二坊六坪・庭園遺構の保存について」（日本史研究 190号 所収）
「考古学からみた古代・中世の集落」（原口正三 日本史研究 176 所収）
「古代都衛遺跡の再検討」（山中敏史 日本史研究 161 所収）
「八千代市村上遺跡群」

12 第1号溝状遺構

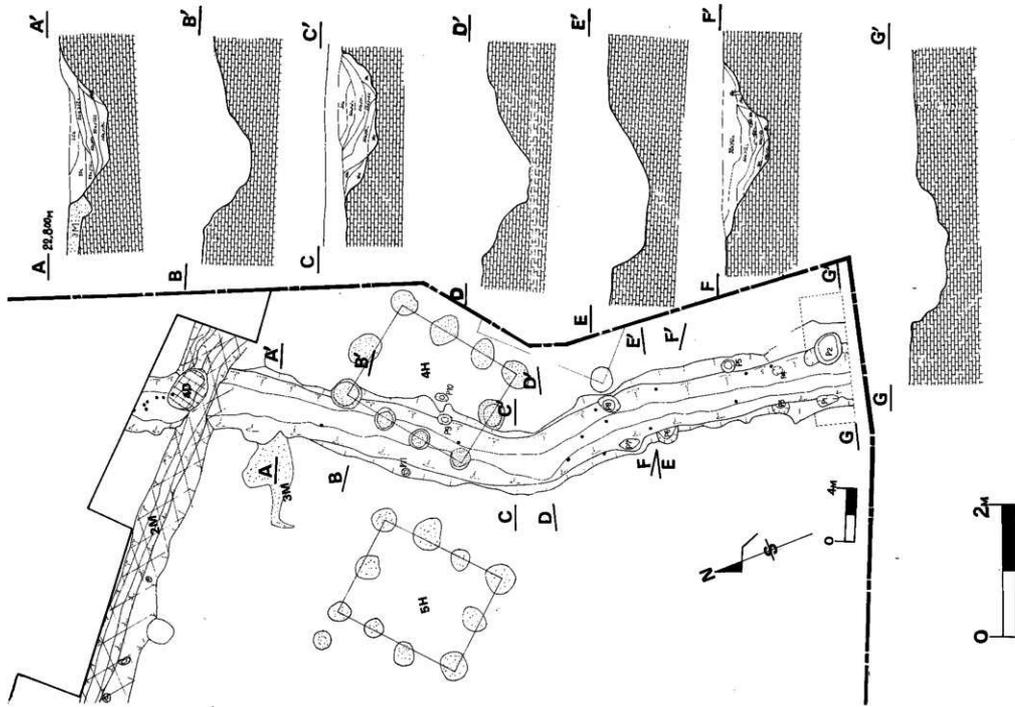
本址は、遺跡内南を横断する溝状遺構であり、第4号掘立柱建物址、第3号溝状遺構をカットし、第2号溝状遺構・第4号土壇にカットされる関係にある。

遺構は、4Kより6Jに磁北に向かい、N-34°-Eに曲がり9Iに貫通しており、幅1.40m～2.00m、深さ60cm程のU字状中央部と、その両側に、幅15cm～50cm、深さ20cm程の段部を有している。落ち込み面は、緩くやや硬質の壁状を呈し、底面も同様な状態を呈しているが、凹凸も著るしく11のピット状部分を認めたが、ピット間に意図性はないようである。溝内は、6層以上の流入土層に覆われるが、その流入は一定しておらず、煩雑な埋没状況が知られる。

遺物は、底着のものはなく、本遺構に伴うと思われるものはなかったが、報告の覆土中の出土遺物は、本跡ないしはその周辺の歴史時代を反映するものとして示めた。（江尻）



第27图 第1号溝出土遺物実測図



第28圖 第1号測量圖

第20表 第1号溝状遺構出土遺物一覧表

	器形	残状	器測(ミリ)	形態上の特徴	手法上の特徴	器状(色調胎土焼成)
1M 65	坏 土師	底部	底径 60 残高 18	上底状の底部より、ゆるやかに立ち上がるラインを示すと思われる。	底部で回転ヘラ切り、その他でロクロ整形を施す。	赤褐色 緻密 堅固
66	坏 土師	底部	底径 80 残高 18	平底部より急激に立ち上がるラインを示すものと思われる。	底部でヘラナデ、その他でロクロ整形を施した後、黒彩処理を行う。	暗褐色で内黒 緻密 堅固
67	坏 土師	底部	底径 74 残高 12	中央で厚い底部より、ゆるやかに移行するラインを示す。	底部・周縁でヘラナデ、その他でロクロ整形を施す。	赤褐色で二次加熱 密 堅固
68	坏 土師	4分の1片	口径 126 底径 90 器高 33	平底部より急激に直上し立ち上がり口唇でやや外反するラインを示す。	底部でヘラナデ、その他でロクロ整形を施す。	褐色 緻密 堅固
69	坏 土師	口縁20分の1片	口径 136 残高 37	ゆるやかに立ち上がり中位より内屈ぎみに外反するラインを示す。	ロクロ整形後、朱書を施す。	暗褐色で朱書 緻密 堅固
70	坏 土師	底部3分の1片	底径 76 残高 ?	平底の底部以外不明。	底部でヘラナデの後、刻み文字を施す。	赤褐色 緻密 堅固
71	坏	上部3分の2片	口径 120 残高 33	ゆるやかに中位まで移行し、内屈ぎみに外反するラインを示す。	ロクロ整形を施す。	灰褐色 緻密 堅固
72	坏 (付高台) 土師	底部片	裾径 74 残高 19	やや外反ぎみの高台部より、ゆるやかに移行するラインを示す。	底部でヘラナデ後、着り付けの高台を設け、	褐色 緻密 堅固
73	(土人) 手捏土器	完形	口径 33 底径 22 器高 20	平底部より、外反ぎみに直上するラインを示す。	手捏で未切りを施す。	赤褐色 緻密 硬質
74	甕 須恵	口縁部20分の1片	裾径 279 残高 23	裾上下に突き出しをもつ斜めの端部より、ゆるやかに移行する。	ロクロ整形を施す。	灰褐色 緻密 堅固
75	甕 土師	口縁部	口径 267 残高 97	ゆるやかに直上し、頸部下に個数不明の把つ手を設ける。	内面・把つ手でヘラナデ、口唇で横ナデ、表面で叩き目を施す。	暗褐色でスス着 密 硬質
76	碗 陶器	口縁部	口径 164 残高 41	ふくらみをもつ口唇下で凹帯、内面で凸帯をもち下降する。	ロクロ整形後、緑釉を施す。	緑彩 緻密 堅固
77	(坏) 陶器	底部	底径 84 残高 12	周縁より上底状の底部をもち、ゆるやかに移行するラインを示す。	ロクロ整形後、一部に白彩を施す。	淡褐色で一部白彩 緻密 堅固
78	(坏) 陶器	胴部片	不明	不明	流線文を施した後、茶褐色の彩を施す。	灰褐色 緻密 堅固

13 第2号溝状遺構

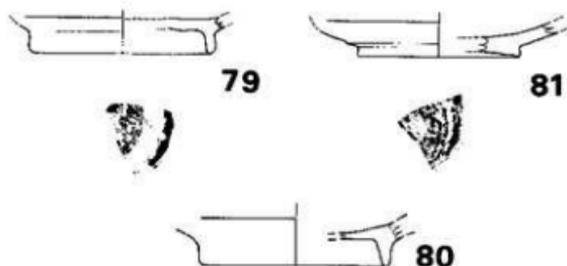
本址は、遺跡北東境を貫通する溝状遺構であり、第1・3号掘立柱建物址、第1号溝状遺構、第5～7号土壇をカットし、第4号土壇にカットされる関係にある。

遺構は、9 Kより9 GまでN-44°-Wに向かい、N-54°-Wに曲がり9 Dに通る、幅40cm～60cm、深さ60cm～70cm程のV字に近い中央部と、西岸のみに、幅30cm～90cm、深さ30cm程の段を有している。落ち込み面は、急でやや硬質の壁状を有し、段部の緩い面に9ヶ所の列状のピットを伴うが、その意図は不明である。底面は、堅固な20cm程の凹面が平坦な状態で全通している。

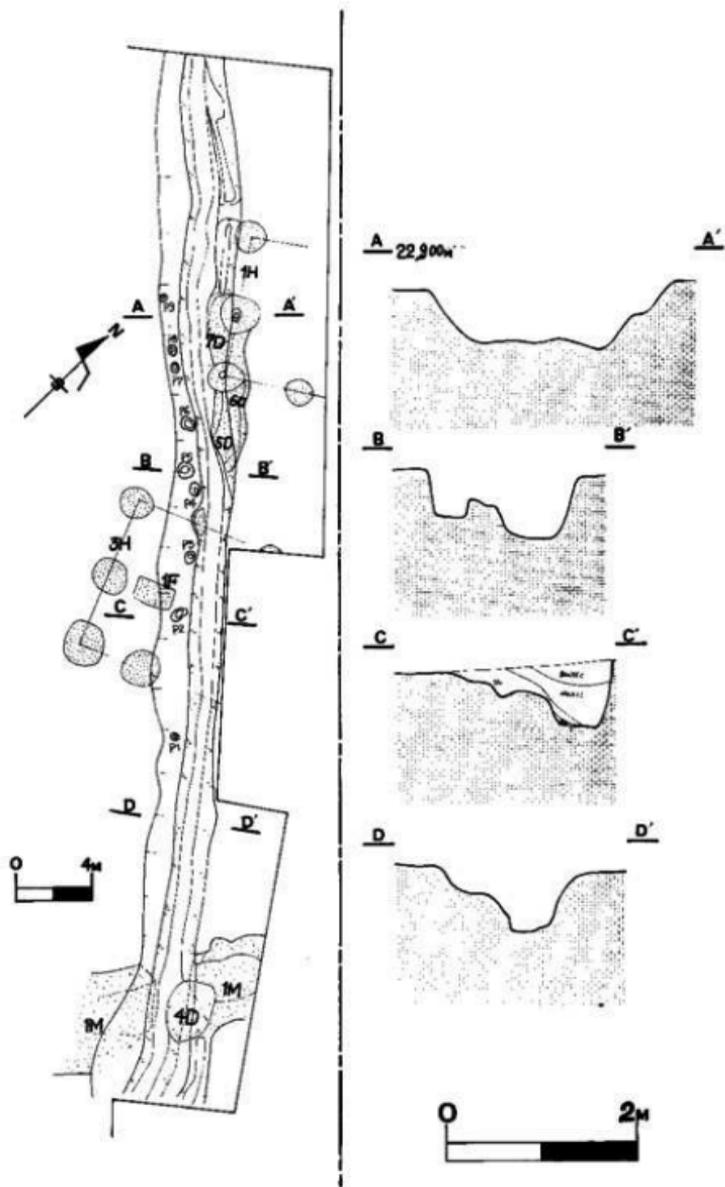
遺物は、底着のものではなく、全体に縄文土器片を中心とした少量の出土があったが、報告のもの、その内より歴史時代のもののみ示した。(江尻)

第21表 第2号溝状遺構出土遺物一覧表

器形	残状	器測(ミリ)	形態上の特徴	手法上的特徴	器状 (色調胎土焼成)
2 M 79 環 (付高台) 土師	底部片	裾径 86 残高 18	垂直の高台部より、外反するラインを示すものと思われる。	底部でヘラ切り後、高台を設け、内面でヘラミガキを施す。	褐色 緻密 堅固
80 環 (付高台) 土師	底部片	裾径 88 残高 21	垂直な付高台より、外反するラインを示すものと思われる。	底部で米切り後、端部で高台を設け、内面でヘラミガキを施す。	暗褐色 緻密 硬質
81 埴 (付高台) 土師	底部片	裾径 74 残高 16	上底ぎみで低い環をもつ底部より、ゆるやかに移行すると思われる。	底部でヘラ切り後、端で壇を設け、表面ロクロ整形を施す。	暗褐色 緻密 堅固



第29図 第2号溝出土遺物実測図



第30图 第2号清淤测图

14 第3号溝状遺構

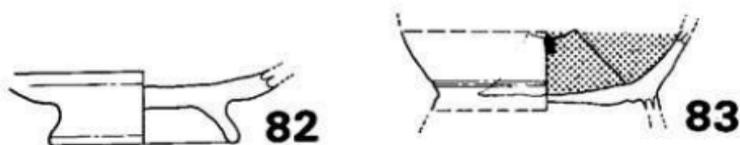
本址は、遺跡中央やや南に鉤状に見られる溝状遺構であり、第5号掘立柱建物址をカットし、第1号溝状遺構にカットされる関係にある。

遺構は、6 I より8 G にN-44°-Wをとり、8 I に直角に曲がる皿状の状態を示めすが、幅80 cm～20cmと続く中央部が、現在では深さ20cm～5 cmと浅い状態であるが、本来の遺構部分と思われる。その東では旧校舎廃棄時の攪乱が底面下に及んでおり、壁状などは不明であるが、第1号溝状遺構にカットされた部分を含めて、コの字ないしは口の遺構プランを有したようである。

遺物は、底着のものではなく、わずかに歴史時代の片が得られたが、第5号建物址との関係もあり、本址に伴うものかは疑問である。

第22表 第3号溝状遺構出土遺物一覧表

3 M 82	器形 環 (付高台) 土師	残状 底部片	器測(ミリ)		形態上の特徴	手法上の特徴	器状 (色調 胎土 焼成)
			裾径	残高			
			62	24	外反ぎみの付高台より、ゆるやかに移行するラインを示すとと思われる。	底部・周縁でヘラナデ後、付高台を設け、内面でヘラミガキを施す。	褐色で二次加熱 緻密 堅固
83	環 (付高台) 土師	底部4分	裾径 不明	残高 25	外反すると思われる高台部より、急激に直上するラインを示す。	底部でヘラ切り後、高台を設け、内面に黒彩表面に墨書を施す。	褐色で内黒・墨書 緻密 堅固



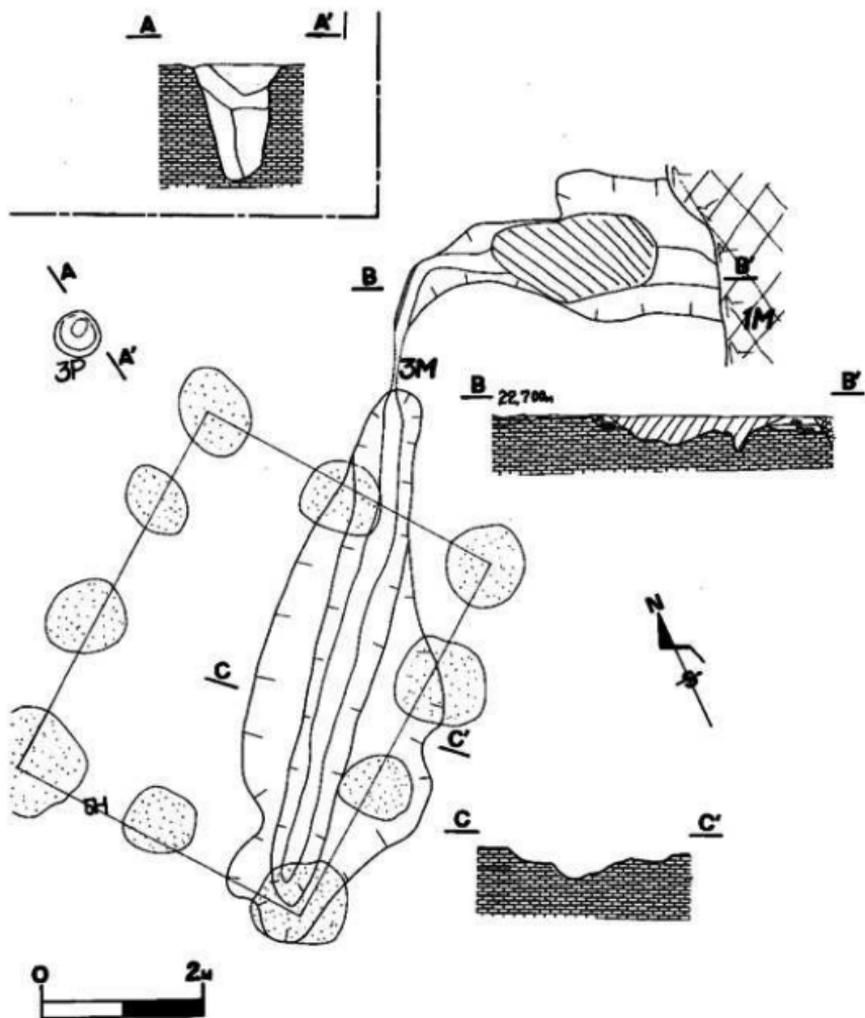
第31図 第3号溝出土遺物実測図

小 結

今回調査では、3溝状遺構が検出されたが、いずれも、時代を決定すべき底着の遺物出土は見られず、その性格は不明である。

しかし、前回の「桑納前畑遺跡」に見られた多くの溝状遺構と共通した使用がなされたと思われる、根拠はないが第3号溝状遺構以外は中近世の所産のものようである。

(江尻 和正)



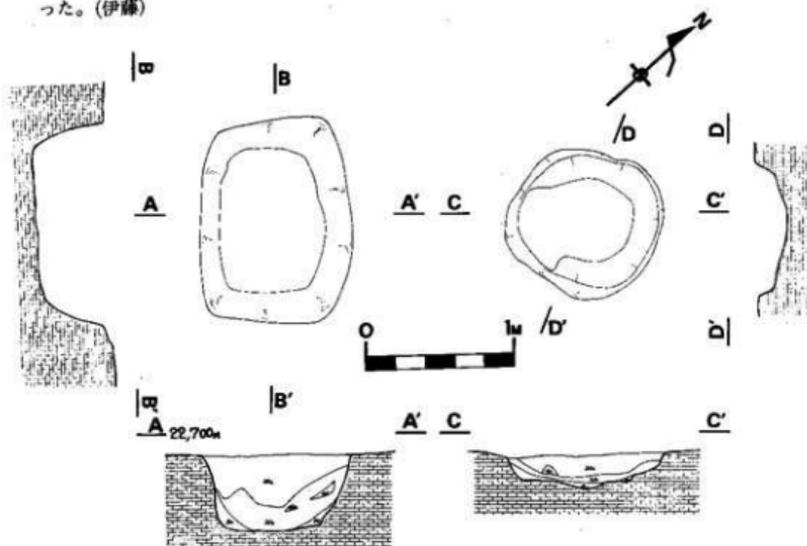
第32图 第3号满实测图

15 第1号土坑

この遺構は、第8号掘立建物址の北東方向で確認され、東西径1.87m、北南径2.00m、深さ0.45mあり、N-65°-Eに主軸を有し隅丸方形をなす第1号土坑である。底は凹凸があり一定ではなく、皿状を呈している。北壁と東壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、南壁と西壁は緩かに立ち上がっている。土層は、3層が基本でレンズ状をなしている。遺物は1点も検出されなかった。(伊藤)

16 第2号土坑

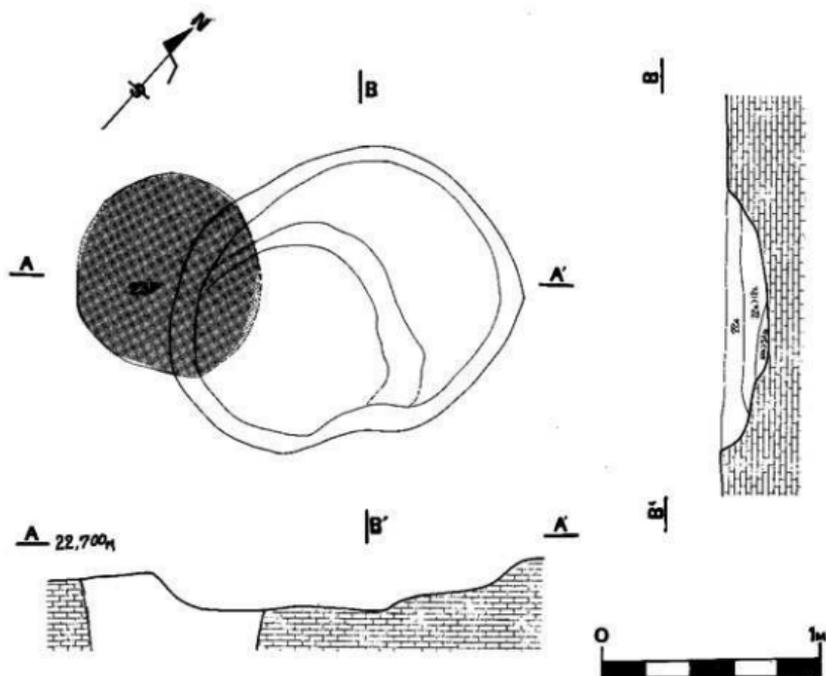
この遺構は、第1号土坑の北東において確認され、東西径2.75m、北南径2.00m、深さ1.04mあり、N-35°-Wに主軸を有し隅丸長方形をなす第2号土坑である。底は皿状をなしており、北壁、東壁、西壁では緩かに立ち上がっているが、ここから土坑掘り口部までは斜めに立ち上がっている。土層は、3層が基本でありレンズ状をなしている。また、遺物は1点も検出されなかった。(伊藤)



第33図 第1号・第2号土坑実測図

17 第3号土坑

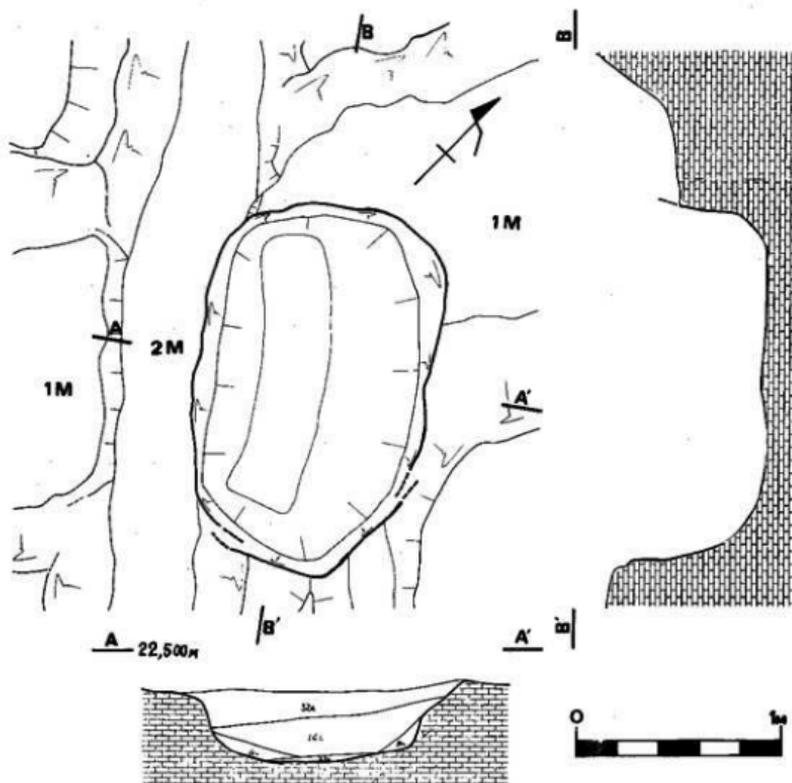
この遺構は、第2号掘立建物址の22Pと重複して確認され、22Pを切って造られている。大きさは、東西径2.60m、北南径3.12m、深さは土坑中央で0.40mあり、N-14°-Eに主軸を有し楕円形をなす第3号土坑である。底は2段よりなり、南側の底は皿状をなしており、北側の底は斜めになっているが、ほぼ平坦である。深さは、南側が0.40m、北側が0.25mである。壁は、緩やかに立ち上がっている。土層は3層よりなり、レンズ状をなしている。また、遺物は1点も検出されなかった。(伊藤)



第34図 第3号土坑実測図

18 第4号土坑

この遺構は、第1号溝と第2号溝の重複部で確認され、東西径2.34m、北南径3.55m、深さ0.68mあり、N-42°-Wに主軸を有し隅丸長方形をなす第4号土坑である。底は皿状をなし、北壁と南壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、東壁では底から0.15mの所まではほぼ垂直に立ち上がって、ここから土坑掘り口部までは斜めに立ち上がっている。西壁では、底から0.30mの所まではほぼ垂直に立ち上がっているが、ここから土坑掘り口部までは斜めに立ち上がっている。土層は、4層よりなりレンズ状をなしている。また、遺物は1点も検出されなかった。(伊藤)



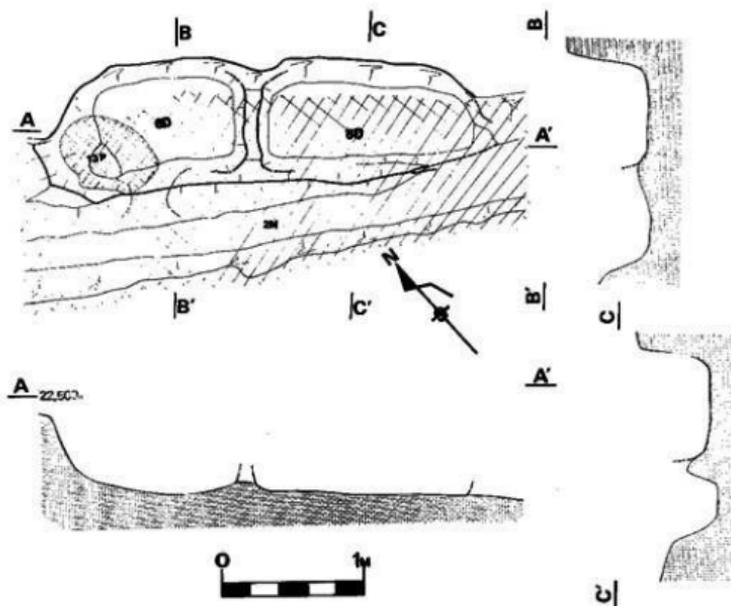
第35図 第4号土坑実測図

19 第5号土壇

この遺構は、第3号掘立建物址の北西方向で、第2号溝と重複し第2号溝に切られて確認された。大きさは、東西径3.45m、北南径0.88m、深さ1.05mあり、隅丸形状をなす第5号土壇である。底は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。また、遺物は1点も検出されなかった。(伊藤)

20 第6号土壇

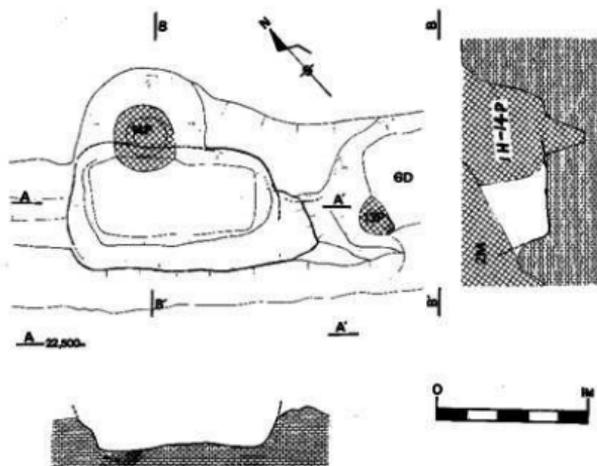
この遺構は、第5号土壇の北西方向で確認され、第5号土壇と同様第2号溝に切られて確認された。東西径3.55m、北南径1.82m、深さ1.15mあり、N-52°-Wに主軸を有し隅丸方形をなす第6号土壇である。底は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。また、遺物は1点も検出されなかった。(伊藤)



第36図 第5号・第6号土壇実測図

21 第7号土壇

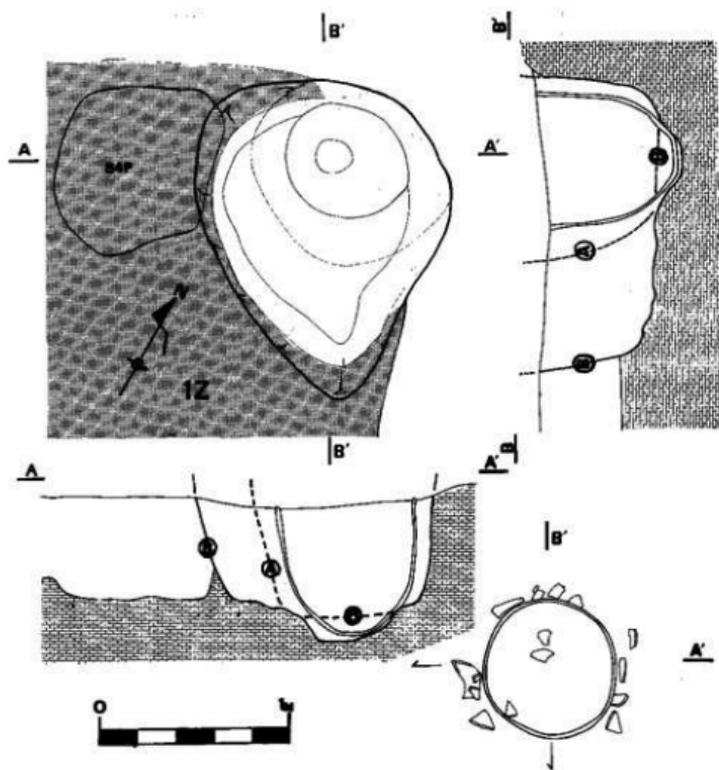
この遺構は、第6号土壇の北西で第5号土壇・第6号土壇と同様、第2号溝に切られており、さらに第1号掘立建物址の14Pとも重複している。大きさは、東西径1.60m、北南径3.25m、深さ1.15mあり、 $N-51^{\circ}-W$ に主軸を有し隅丸長方形形状をなす第7号土壇である。底は皿状をなしており、西壁では底から0.28mの所までほぼ垂直に立ち上がっているが、そこから上方では斜めに立ち上がっている。また、北壁、東壁では、底から0.25mの所に段を有しているが、斜めに立めに立ち上がっている。なお、遺物は一点も検出されなかった。(伊藤)



第37図 第7号土壇実測図

22 第8号土坑

この遺構は、第1号住居址の北東コーナーを切って掘られた状況で確認された。大きさは、東西径1.32m、北南径1.66m、深さは確認された部分だけで0.82mである。一方⑧とした面は、第1号住居址覆土最上面から土坑底まで0.72mある。つまり、この土坑は表土層かその下の黒色土層（現表土で旧校舎の為、攪乱を受けている）より掘り込まれたようであり、2遺構からなるが細部は不明であった。



第38図 第8号土坑実測図

土城の8Aには、近世の農業用肥料を貯蔵したものと考えられる大甕が、埋設されている。8Bの底は皿状をなしているが、大甕の底は土城の底から約0.05m程度浮いた状態で確認された。この大甕は、胴部中央以上を欠損しているが、胴部径0.74m×0.70m、厚0.018m、現存高0.70m、底部径0.18mである。また、大甕の中からボロボロになって平クワが検出された。(江尻)

小 結

今回調査では、8土城が検出されたが、いずれも、時代決定をできる遺物を欠いており、その性格もまた不明とせざるを得ない。

しかし、8土城の構築時期は少なくとも二期に分け得るようで、第1号掘立柱建物址にカットされる、第5～7号土城が歴史時代以前であるのに対し、その他の土城、特に、第4・8号土城は、第1・3号溝状遺構をカットする近世以降の所産であることは明らかなようで、第8号土城⑧の大型甕内の遺物は、近現代のものともできるようである。(江尻)

23. 第1・2号柱穴

両址は、ともに7Kグリットに検出した柱穴であり、当初は1号住居址に伴なうものと考えたが、周辺に関連するものが検出できなかった。それぞれ、52cm×48cm・深さ36cm、51cm×52cm・深さ45cmを計り、N-28°-Wで結べるが、その用途は不明であり、黄褐色土と黒褐色土からなる覆土中からは、遺物の出土はなかった。

24. 第3号柱穴

本址は、5号建物址北東に検出した深い柱穴であり、当初は同址に伴なわれるものと考えたが、周辺に関連するものが検出できなかったため柱穴とした。遺構は、56cm×55cm・深さ73cmを計り、3層の覆土下層には黒褐色の柱影らしき層を伴っているが、遺物の出土はなかった。

25. 第4・5号柱穴

両址は、6Eグリットに検出した柱穴であり、当初は、仮21・22番との関係に留意したが、両址のみが柱穴と判断された。4号柱穴は、下層に柱影層と思われる層を有しており、調査までに削平され消滅した遺構の残存部とも考えたが、今回他の柱穴を報告したのには、この点があったことを証しておく。遺構は、それぞれ、78cm×72cm・深さ34cm、62cm×60cm・深さ33cmを計り、N-35°-Wで結べるが、その関係は不明であり、柱穴内より、遺物の出土は見なかった。

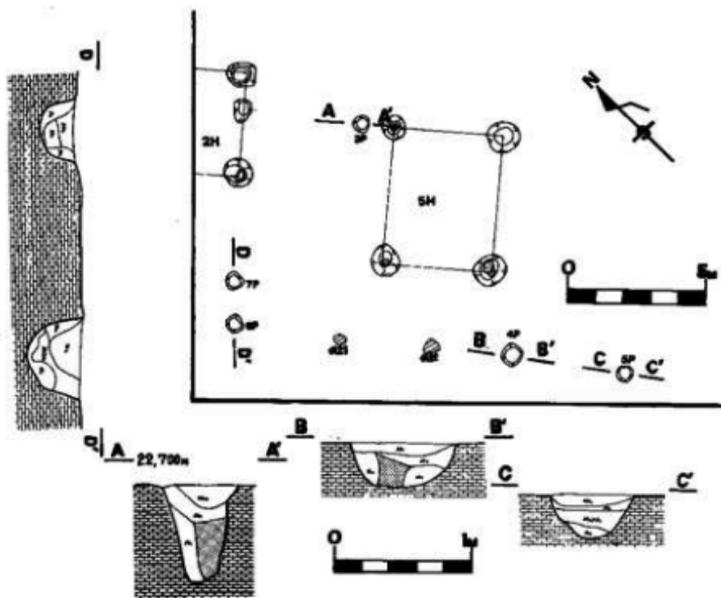
26. 第6・7号柱穴

両址と、ともに6Gグリットに検出した柱穴であり、周辺の確認を経ても関連するものを得られなかったため、柱穴として報告する。遺構は、それぞれ、60cm×60cm・深さ40cm、47cm×58cm・深さ25cmを計り、N-44°-Eで結べるが、その関係は不明であり、柱穴内より少量の縄文片を得たが、両址に伴う底着のものではなかった。

小 結

今回の調査では、7柱穴とし用途不明遺構を示めしたが、いずれも、その性格・時代ともに不明のものである。

(江尻)



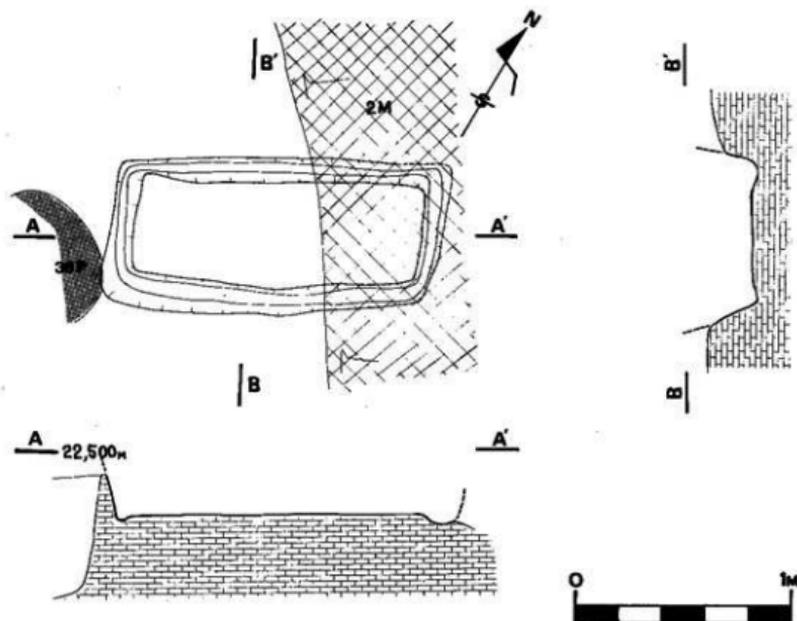
第39図 第3号・第4号・第5号・第6号・第7号柱穴実測図

27 不明遺構

この遺構は、第3号掘立建物址内と第2号溝とに接して確認された。第2号溝を調査中に確認され、第2号溝の上部（西側）を破壊して造られていた。土層は、ローム粒子を含む褐色土（非常に白っぽい）であり、黒色土上層より掘り込まれたようである。

遺構は、 $N-59^{\circ}-E$ に主軸を有しており、東西径3.05m、北南径1.47m、深さは中央で0.40mあり、東西に長い長方形をなしている。遺構底は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。また、壁に沿って幅0.18m、深さは遺構底より0.05mでローム上面からは0.40mあり、全周している壁濬がある。この溝は、溝底が丸味を有し濬壁が外返しているU字溝である。

何かの基礎かと考えられるが、正確な所は不明であるため不明遺構とした。なお、遺物は一点も検出されなかった。



第40図 不明遺構実測図

28 その他の遺物

本遺跡では縄文式土器の破片が多数検出されたが、そのほとんどが遺構とは直接的に関連せず、単独で出土する土器片が多く占めた。ここではそれら土器片のうち、文様の鮮明なものを提示して説明する。

1、第1群土器（1～4）

口縁部を半截竹管の施文具を用いて、縦位に上方より刺突して条線文を施し、胴部は貝殻を使った波状文と、ヘラ状施文具で連続して刺突した三角文とを、数段にわたって交互に施文した土器である。1～4は同一個体の土器で、その器形は深鉢形と思われる。焼成は良好で、色調は淡赤褐色を示し、胎土には砂を含む。本群は東関東に分布する、縄文時代前期末葉の浮島Ⅲ式に比定される。

2、第2群土器（5～6）

隆帯に沿って、半截竹管の施文具で連続刺突した爪形文を施した土器を特徴とする。5は口縁部の土器片で、断面台形の造り出し隆帯が口縁に沿って付し、その隆帯に沿って爪形文を施し、また口唇部にも同様の文様を施している。土器の内面には断面台形の造り出し隆帯が、口縁に沿ってあるのみである。6の胴部土器片は、隆帯に沿う沈線隔着爪形文を、上下両側に施している。焼成は良く堅緻で、色調は赤褐色を示す。縄文時代中期前半に当る阿玉台Ⅰ式に比定される。

3、第3群土器（7～23）

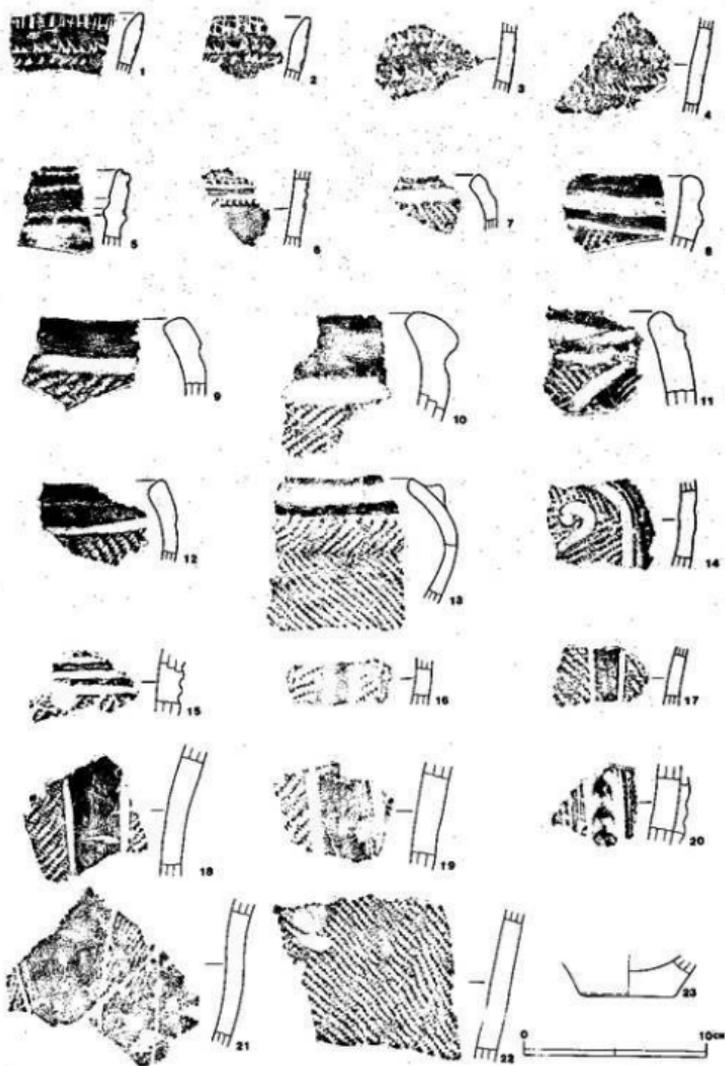
縄文を地文とした土器を主体とする一群で、縄文時代中期後半に相当する。以下これをさらに細分して説明加える。

a、第1類土器（7～10、12、14～19）

太い沈線で文様区画した土器を特徴とし、断面が台形を呈する隆帯をも加わる土器（8、15）もこの範疇とした。地文の縄文はRL原体で施文したものが多く、施文の方法はまちまちで、原体を横位回転と縦位回転とを併用して施文した土器も見られる。口縁部では口縁に沿って沈線区画して無文帯を有し、胴部では縦位に沈線区画して幅の狭い無文帯を有する、いわゆる懸垂文構成と思われる。焼成は全体的に良く堅緻で、色調は赤褐色が主体的に示し、胎土には砂、あるいは細砂が含まれ、器面調整は表裏とも良く施されている。

b、第2類土器（11、13、22）

断面が三角形を呈する隆帯によって、文様区画された土器を特徴とする。口縁部は第1類と同様に無文帯を有し、11は口縁から垂下する隆帯が胴部の文様区画する構成を示し、13は隆帯が口縁に沿って廻るのみで、胴部は異なる原体を横位回転した羽状縄文を施している。隆帯は11が造



第41圖 繩文式土器拓影圖

り出しで、13は貼り付けによる。22はLR原体を縦位回転して縄文を施している。焼成は良く、色調は灰褐色と黒褐色を示し、胎土には砂を多く含んでいる。

c, 第3類土器 (21)

細い沈線によって文様区画された土器で、文様帯の縄文はRL原体を横位回転して施文し、無文帯は第1類よりも幅広く、文様帯が限られている。器面調整は裏面は良く成されているが、面は荒れているため文様も不鮮明になっている。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈し、胎土には砂を多く含まれている。

d, 第4類土器 (20)

半截竹管の施文具で縦位に引いた条線文を地文に、さらに粘土紐を縦位に貼り付け、指でつまむように押圧した隆帯の文様を構成する。内面の器面調整は良く成され、焼成は良好で堅く、色調は赤褐色を呈す。この類の土器は中部地方八ヶ岳山麓を中心とする曾利系の土器で、関東地方の千葉県下では第3群土器に希に共存する。

e, 土器底部 (23)

底径5.3cmを計る底部土器片が1点検出された。深鉢形土器の小きくつぼんだ、いくらか不安定な土器と思われる。内部底面は丸底になっている。文様は見当らず、器面調整は良く施され、焼成は良く堅緻で、色調は赤褐色を呈す。

第3群土器は文様が縄文を主体として、器厚が1.0cm前後で比較的厚く、縄文時代中期後半の土器の特徴を示す。その中でも口縁部の文様帯が単純になり、断面三角形の隆帯のあるものも含めて、加曾利E-Ⅲ式土器に比定されると思われる。

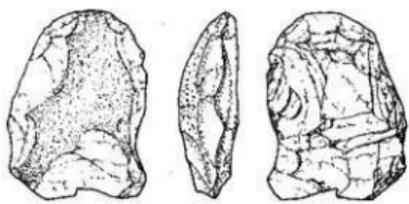
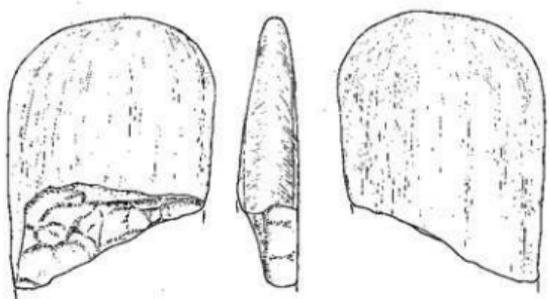
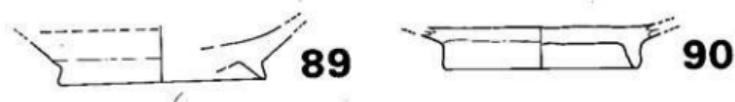
4, まとめ

以上本遺跡で検出された縄文式土器は、前期末から中期後半にわたり、断続的に在るものであった。しかし、遺構から直接的に結びついて出土したものもほとんどなく、また、まとまった資料も皆無であって、本遺跡における縄文式土器の性格については、ここで言明することをさける。最後に検出された縄文式土器の破片の総数を、群別に付記する。第1群、9点、第2群、2点、第3群、112点であった。

(道沢 明)

参考文献

- | | |
|------------------------------------|------|
| 西村正衛 「茨城県稲敷郡浮島貝ヶ窪貝塚」 早大教育学部 学術研究15 | 1966 |
| 西村正衛 「阿玉台式土器編年的研究の概要」 | 1972 |
| 寺門義範 「茨城県所作業塚発掘調査報告」 霞ヶ浦文化研究会 | 1975 |
| 陸小学校北方遺跡調査会 「桑納前畑遺跡」 陸小学校北方遺跡調査会 | 1978 |



第42回 G内出土遺物実測図

Ⅳ 先土器時代の遺物確認調査

一 陸小学校遺跡における立川ローム層について一

陸小学校遺跡では住居址・掘立柱建物址の精査後、先土器時代遺物の確認を目的として発掘区内に5基のトレンチを設定し、先土器時代遺物を包含すると考えられる立川ローム層の発掘調査を行なった。先土器時代遺物の発見は無かったが、以下は本遺跡における立川ローム層の概要である。

下総台地の地形は高位から下総上位面、同下位面、千葉段丘面に区分され(杉原1970)、本遺跡の所在する台地は下総下位面にあたり、台地中央部での標高は26m前後、遺跡ではやや低く22~23mを測る。本遺跡は学校施設等による攪乱が著しく、場所によっては建物基礎がかなり深く打ち込まれており、また最表層付近は削平されていると思われる。従って本遺跡における土層はブライマルな状態とはいえないが、周辺にある露頭と比較した限りでは大差はなかった。

さて本遺跡における立川ローム層は5層に区分され、その上位には暗褐色土層がのる。ここでは暗褐色土層を1層として以下6層までの特徴を述べておく。

1層……暗褐色土。粗しょうで部分的にはかなり攪乱をうけている。表土と2層との中間的な土層である。

2層……いわゆるソフトローム。橙褐色を呈し、粘性に富む。部分的に硬質なロームのブロックを混じえる、層厚約30cm。

3層……いわゆるハードローム。2層より褐色が強く、粘性に富む。ロームブロックの集塊状を呈し、縦横にクラックが発達する。ソフト化の進んだ土層である。層厚25cm前後。

4層……硬質なローム。2層より黄色を帯びた明橙~黄褐色を呈し、粘性に富み極めて硬い。全体に火山ガラスの多い土層でキラキラする。層中には微細なラビリ、スコリアを少量含み、また本層上限より約10cm下位には粒径1mm程度の灰白色浮石粒が断続的に認められる。層厚約30cm。

5層……暗褐色土。粘性が強く、やや柔らかい。乾燥すると縦方向にクラックが発達する。層厚30~40cm。識別の容易な土層である。

6層……やや褐色の強い明橙褐色土。4層とほぼ同色、硬質なロームで、層中上位には微細なラビリやスコリアを少量含む。層厚約20cm。

本遺跡における立川ローム層の概要は以上の通りであるが、これを下総台地の一般的な層準と対比してみよう。下総台地における立川ローム層の各層準は鈴木道之助氏によって統一が試みられている(鈴木 1976)。それによれば2層=Ⅲ層、3層=Ⅳ・Ⅴ層、4層=Ⅵ層、5層=Ⅶ層、

6層＝Ⅵ層となる。このうち5層（Ⅴ層）は立川ローム層第2黒色帯（BB2）に対比され、6層（Ⅵ層）は立川ローム層最下部である。また4層中の浮石粒は始良Tnバミスに由来すると考えられる。

本遺跡周辺の先土器時代遺跡は八千代市村上込の内、印西町武西北の台、同町船尾白幡などが知られている。本遺跡からは当該の遺物は確認できなかったが、今後の調査によっては充分予想し得る所であり、4層中の灰白色浮石は第2黒色帯と共に先土器時代編年の重要な鍵層となろう。

(城前)

参 考 文 献

関東第四紀研究会 1974 「横浜市西部発見の丹沢バミスとその直下の泥炭層C₁₄年代」

『地球科学』 第28巻1号

杉原重夫 1970 「下総台地西部における地形の発達」 『地理学評論』 第43巻12号

杉原重夫・細野 衛・桃木徳博 1976 「国分寺周辺の自然地理」

『南向原一古墳・方形周溝墓・住居址の調査一』

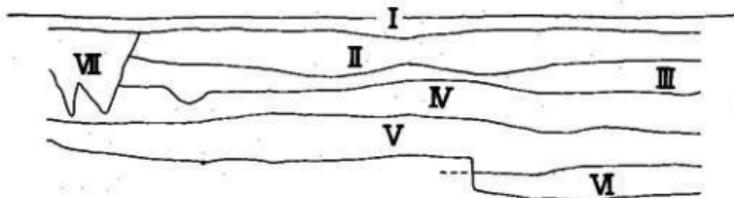
上総国分寺台遺跡調査報告 Ⅱ

鈴木道之助 1976 「地理的環境と立川ローム層の層位一房総における先土器文化の概要と変遷一」

『研究紀要』 1

陸小学校北方遺跡調査会 1978 「桑納前畑遺跡—八千代市立陸小学校校舎改築工事に伴う発掘

調査報告書一」



I 暗褐色土

(ソフトロームと黄土の中間的又は、ロームの黄土化した土層)

II ソフトローム

(褐色・中粒で粘性があり、部分的にハード・ローム状のブロックを含む)

III ハード・ロームのブロック状土層

(Ⅴ層より褐色強く、粘性をもつ)

IV ハード・ローム

(Ⅴ層より臭味を帯び、繊維々ラビリ、浮石粒、及び火山ガラス状の断片が混入しキラキラする。褐色で粘性があり極めて固い)

V 暗褐色土

(Ⅴ層より赤い、ブラウンブラックバンド)

VI 暗褐色土

(Ⅴ層とはほぼ同色であるが、Ⅴ層よりやや褐色を帯び、層中上位にラビリを含む)

Ⅶ 雑 乱

第43図 陸小学校遺跡ローム層断面図

おわりに

今回の調査では、総数29の遺構が検出された。遺構年代はすべてが歴史時代に属し、内容は竪穴住居址1基、掘立建物址9棟、溝状遺構3、土塚8、ピット状遺構7、不明遺構1である。

住居址は、保存状態のよいカマドと4本の柱穴をもち、大きさは378cm×373cmで隅丸方形であった。遺物は土師器と須恵器（長頸甕片、緑釉片）などが検出され、国分期の特徴をもつものであった。

掘立建物址9棟は、柱間2間×2間の形をⅠ式とし、2間×3間の形をⅡ式と分類した。Ⅰ式は5棟、Ⅱ式は4棟あり、いずれもひさしや付属施設らしきものは認められていない。

なお掘立建物址の遺構について、掘立柱建物址という表現もあるが、本報告では、「掘立建物址」と便宜上の呼称をした。

溝状遺構は、3号遺構（北東～南西方向）だけが掘立建物址に続く時期にあり、その他は中近世に属するものである。

以上の3種の遺構を年代順に並べれば、住居址が古く、次に掘立建物址が続き、その後には溝状遺構の3号がつくられたという構成である。

本遺跡の特徴としては墨書土器が出土したことが第1にあげられ、次には、竪穴住居から掘立建物に移行していった過程が推定されるのではないかとということである。そしてこの地に集落を展開した人々は文字を享受できる人々であり、住居は一般住居か、房戸か、あるいはかつての里長クラスの家かとも想定することができる。

本報告書では国分期の遺構の一例として事実報告を中心としたが、第3次調査の整理がついたところで、第1次・2次・3次のすべてを整理統合して考察を試みる予定である。

（付記）

本調査では、陸小学校生徒諸君に調査作業に参加してもらった。その体験記のうちの数編を掲載することができたのは同校教諭の渡辺明氏のご指導によった。記して謝意を表したい。また、調査を通じて学習活動に若干ながら寄与することができたことは、その意義は大きなものであり、調査団にとっても、大変喜ばしいことであった。

（村田一男）

発掘

5 年 萩原 順一

今年の郷土史クラブは、発掘作業をした。土器を洗う作業と、土器を発掘する作業分たんがあった。ぼくは、土器洗いのほうに、なった。土器を洗っていると、土器のまわりに、なわのあとがある土器や、つきや、いろいろな、もようのある、土器があった。その中の一つにぼくが、はじめてみた、ぼくしょ土器があった。そのうちに、ぼくたちは、土器を発掘するほうにまわった。土器は、なんこかでたけれど、どれもかも、ちいさくて、もようのないものばかりだった。そんなふうにして発掘作業を、やっていったけれど、とうとう時間がきて、発掘も終わってしまった。あまりいい土器をほりだせなくて残念だった。でも、ぼくしょ土器やつきやもようのついた土器が見られてよかった。

土器

5年1組 染谷 和美

月曜日に朝会で、新校舎を立てる所に、土器がみつかったことを聞き、昼休みに、5年生全員で土器を見に行くことになりました。

そして、土器のことをよく知っていらっしゃる人に、話を聞くことになりました。話の中で、「昔の家のあとがあった」と言うことで、全員でその昔の家のあとの所に行き、かまのあった所の説明を聞いたり、まわりにいっぱい散らばっているおさらやお茶わんのような形をした土器の話も聞きました。聞いているうちに、昔の人がいろいろ工夫したものが、たくさんあったことを知りました。

それから、いま私は、まわりにたくさんあった、あなのことを思い出しました。ずいぶん前のことだったので、忘れてしまいましたが、まわりにたくさんあながありました。

でも、私は昔の家のあとやあななどが、どうしてわかるのかわかりませんでした。話を聞いているうちに、土の色がちがうので、昔の土といまの土が見分けられると言うことを知りました。そして、「地そうのような感じになっているのかな。」と思いました。

それから、話の中で、「土器に字の書いた物があった」ときいた時、どのような字で、どんなことが書いてあるのだろうかと思いました。そして、一番最後に土器に字を書いた物を見せていただきました。形はお茶わんのような物で、字はその外側に書いてあり、ないようはどう言う事なのかわかりませんでした。私は「陸の土地には、まだまだたくさん昔の様子などがわかるような物が、あるのではないかな」と思いました。

発掘

5 年 高橋 謙司

きょう年、学校のクラブではくつをした。きっかけはそこに、新校舎をつくるからである。もちろんちょうきの手つだいをするのである。クラブの人ずうは23人位。

ちょうきはふたてに、分かれて作業をした。一つは発掘、もう一つは土器洗い。ぼくは洗うしごとの方へ行った。ぼく、じしんは、発掘の方をやりたかったんだけど、先生に言われたので、しかたがなく土器を洗う方へいった。やっているうちに楽しくなってきた。いろいろな土器がある。なわのあとがあるもの、つまみのあるもの、尖という文字のついたもの、まだいろいろある。

水で洗うからつめた。だから、ぼくは、バケツに水を入れて日なたにおいた。洗らっているうちに「もうあったまつかか」といった「まだつめたい」こんどは1時間位のざらしにしておいた。いってみた。「少しぬるくなった」きつきまでつかっておいた水をすてて新しいのにかえた。「いいきもち」「オーイ」と先生がよんだ。きいてみると「ごうたいだ」と先生がいわれた。「かんげき」こんどはシャベルをもって、発掘している近くに行った。おぼさんが「こっち、こっち」とよんだ。ぼくはすぐ喜んでいった。少しづつ少しづつほっていくそれを30回くりかえしていると土器がでてきた。ちいさいのが見つかった。とてもうれしかった。それからほっていくとまたあった。

さいごに発掘してくれた先生と、きんしんしゃんをとった。このことは一生わすれないでしょう。

土 器

5 年 吉 橋 かおる

わたしたちの学校で、土器がみつかりました。

わたしたちは、土器を見て、むかしの人々はどのようにくらししていたか少しわかったようです。昔の人々は、字が書けなかったようですが、土器のひとつに字が書いてありました。わたしたちは、なんと書いてあるのか、ぜんぜんわかりませんが、とてもめずらしい物だといっていました。それから大きな水がめが見つかりました。わたしはびっくりしました。水がめや字のかいてある土器がみつかるなんて思っていませんでした。昔の人々は土器を使って、生活していたんですね。

6年生に、わたしたちは、学校でみつかった土器を思い出して、歴史の勉強をしましょう。そして、もっと、もっと昔の人々のことを知りたいと、思うでしょう。

昔の生活

5 年 桜 井 久 代

今まで、本や事典などで昔の様子を、勉強してきましたが、二学期の時、じっさいに、昔の土器を、手にさわられる機会が、やってきました。それは、陸小に新校舎を建てるのに土の下から土器が出てきたのです。

わたしは、はじめ昔の土器は、大きいのかと思いましたが、じっさいに見てみると、そんなに大きくありませんでした。わたしの手で、ひとにぎりぐらいです。表面は、ざらざらで、土をさわっているみたいです。かたきは、かたくて、おとしたらわれそうです。ほんとうに、じょうぶそうです。このような土器を、どのように、何日ぐらいで作ったのでしょうか。

家の大きさは、どのように変化したのでしょうか。じょう文時代の最初と、あの時代では、どのぐらいのきがあるだろう。あとの方が、大きいだろうか。それとも、小さいだろうか。どちらなのでしょう。

大きさがあれば、形もあります。まず、やねの高さはどうだったのでしょうか。わたしは高くなっているかと思っています。それは、やねが高いと出入口も高いけれど、低いと出入口が低くなって出入する時に頭をぶつけてしまうと思うからです。

ねる時はどんな形でねたのでしょうか。足をかかえてねたのでしょうか。それとも足をのぼしてすわってぬたのでしょうか。それとも、今のようにしてねたのでしょうか。どれなのかな、それとも、ほかのねかたなののでしょうか。

食べ物には苦労していなかったのでしょうか。陸には木や実があったと思う。鳥やうさぎなどもいるだろう。けれど、貝や魚はいったのでしょうか。近くの川でとって食べていたのでしょうか。もしそうだとしたら、食べかすはどこにすてたのでしょうか。どこかにまとめてすてたのでしょうか。

私にはわからないことばかりです。6年生になると歴史の学習があります。その時にいろいろな事を調べてみたいと思います。

今でも、陸から土器が出てきたなんて信じられない。今では、土器が出てきた場所に、校舎がどんなできあがっていく。今、残っている昔の物も行事も、今までよりずっと大切に、わたしが大人になっても残っていればいいと思います。

遺跡を見て

5 年 池 田 めぐみ

ある日の午後、学校の古い水造校舎をこわしてはくつしているのを見学することになったので、みんなで見にいきました。いろいろなことを説明してもらい、とても勉強になりました。昔の茶わんや、家の柱などのあとがはくつされました。説明のおじさんが、みんなに茶わんを回してくれました。めずらしいと思ったものは、茶わんに字が書かれているものでした。はっきりなんと書かれているかはわかりませんでした。おばさんたちがスコップでほっているのを見ていたら、茶わんのかけらなどが出てきました。昔の人は、どんな生活をしていただろう。私はとても興味を覚えました。

4年生のころ加賀利貝塚へみんなで遠足へ行きました。縄文時代のすまいがありました。家のまんなにはいろいろがつくれ、屋根にはけむりを出すあながあり、ゆか[の]すみに大きなあながほられていました。そのあなには、物をたくわえたりしたのだろうか。昔の人は、貝を今と同じようにいろいろに火をたいて、にたりやいたりして食べたのだろうか。

友達の家近くに、土器をひろいに行ったら、ビニールにたくさん集まりました。中にもたてじま、横じまがたくさん土器にうってあるものが、見つかりました。なぜしまをうったのだろうか

う。みんなで話しあったら何かと重なってうつつたのかもしれないという結論になった。私もそう思う。びっくりしたのは、その土器に人の顔のようなものがうつっているのです。スフィンクスの顔を小さくしたような顔です。

昔のことは、自分の想像の世界に入っていけるし、夢があるから私は好きだ。

学校から出た遺跡

6年1組 石井 信代

私達の学校は歴史の上に立っている。それは、何千年も前に、この土地には小さな村があったのだ。私達には信じられないが、たくさん土器が見つかっている。

せと物など、いろんな土器が見つかっている。家のあとは3・4所帯あって、ねん土でかこんで作ったかまどがあったり、4つの柱でささえをしてあったり、それだけでもなんとなく想像できる。

昔の人々はたいへんだっただろうな、テレビもないし、マンガもない。おかしだつてないし、ジュースものめない。不自由なくらしをしてたと思う。1日中狩りをして、子供などは木の実やきのこをとってきて、そんな物を食べていたんだろう。

もし、病気がかかってしまっても、薬もないし、お医者さんにもみてもらうこともなかっただろう。字だって書けないから手紙も書けない。けれど、よい点もある。勉強をすることも宿題もないし、自然の中でのびのびとくらせる。

私はタイムマシンによって、このころの時代に行ってみたい。山々にかこまれたいい所だろう。川もきれいだろうな、この村をのこしておけばよかったのに。いつごろ村はなくなってしまったのだろう。もっとふかくほったら、きょうりゅうの骨が出てくるかもしれない。

また、何千年もしたら、この跡小学校の上にもまたなにかが建ってしまうかもしれない。そうしたら、ほって跡小のことをその時代の人に知ってもらいたい。

発くつ作業

6年2組 細野 将司

新校舎のできる所をほると、大昔の土器が発見されました。

ぼくたちは、その発くつ作業を見にいきました。見ると、四角くほってある所に高い土の柱がありました。その上に土器のかけらがありました。

どうして、このようにしているのかなあとと思って、質問してみると、「高さを変えないで土器の年代を調べるためです」と言いました。ぼくは、なるほどと思いました。「この土器があった時代は、八世紀ごろです。」と、作業をする人が話してくれました。そんな古い時代だから、ふつうの土器の形が残っているはずがないとぼくは思いました。作業の人は、ぼくも土器も発見されたと言いました。ぼくは、ぼくも土器を、なんとしても見たかったけど、大事な所に保管してあるので、ぼくはとても残念でした。何日かたって、ぼくたちは郷土史クラブは、発くつ作業を手伝いにいきました。

ぼくは土器を洗う係でした。たて目のもようや横目のもよう、あつきのあつい土器、うすい土器などいろいろな土器がありました。

字のほってある土器がありました。これにはぼくも、おどろきました。「天」という字でした。漢字は四世紀ごろに日本に伝わった事は社会で教わったけど、こんな古い時代の字を見るのは、はじめてだからおどろきました。

一緒に洗っていた人も、先生もおどろきました。ぼくは、この印象ある発くつ作業を忘れる事のできない思い出にしたいと思います。

図

版



PL. 2. 遺跡近景



発掘調査前の状況



発掘調査風景

PL. 3. 遺構全景



遺構東側



遺構西側

PL. 4. 第 1 号 竖 穴 住 居 址(1)



遺 構 全 景



遺 構 内 土 層

PL. 5. 第 1 号 竖 穴 住 居 址 (2)

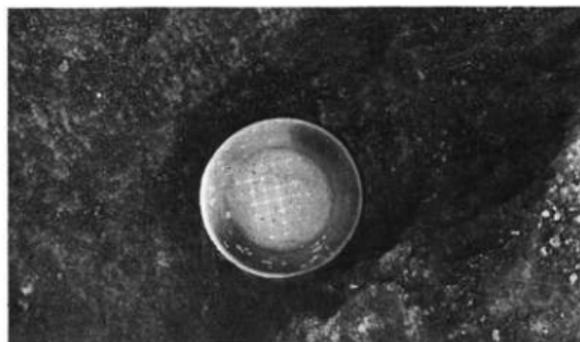


カ マ ド



遺 物 出 土 状 況

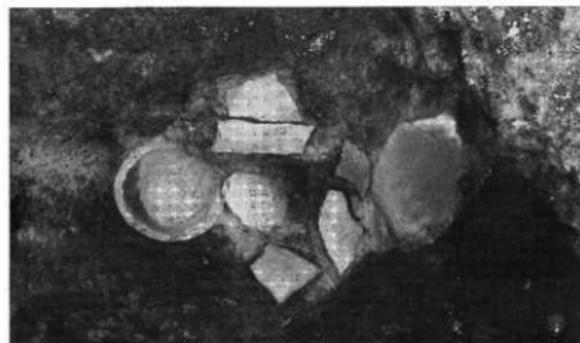
PL. 6. 第 1 号 住 居 址 (3) 出 土 遺 物



坏 型 土 器
出 土 状 况

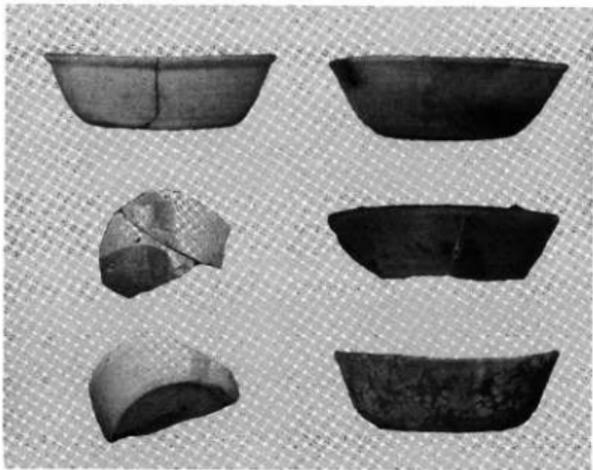


甗 型 土 器
出 土 状 况

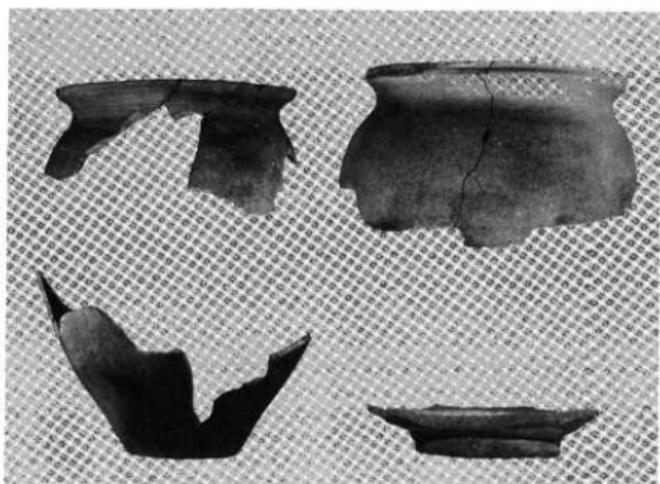


カ マ ド 内 土
器 出 土 状 况

PL. 7. 第 1 号 竖 穴 住 居 址(4) 出 土 遗 物

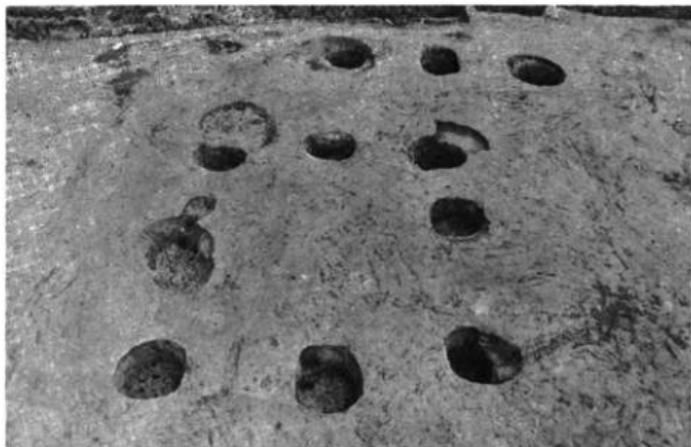


10	11
12	13
14	15

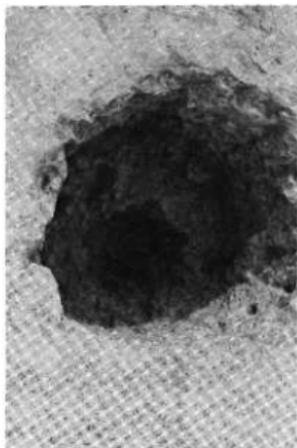


16	18
17	19

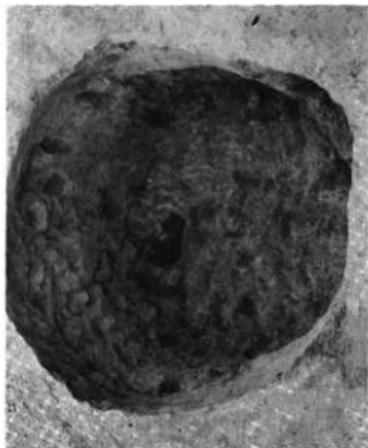
PL. 8. 第 2 号 掘 立 建 物 址



遺 構 全 景

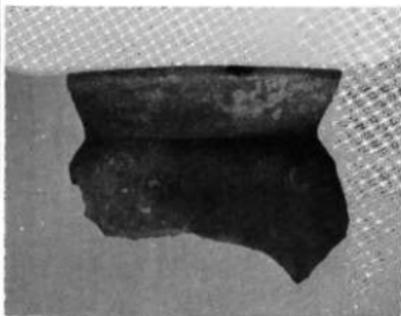


26P 状 況



27P 状 況

PL. 9. 第 2 号 掘立 建物 址 出土 遺物

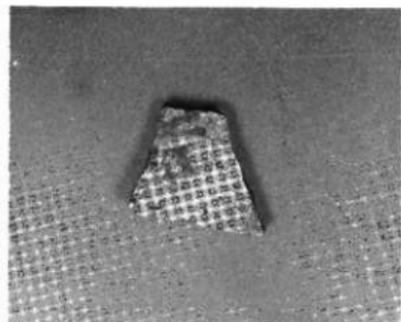


24

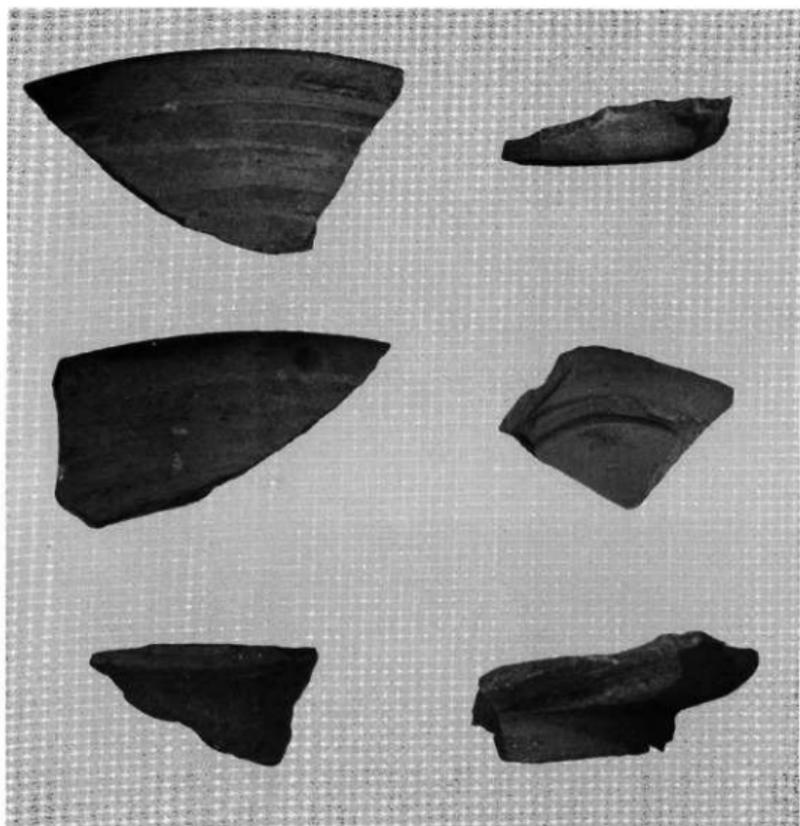
26

25

27

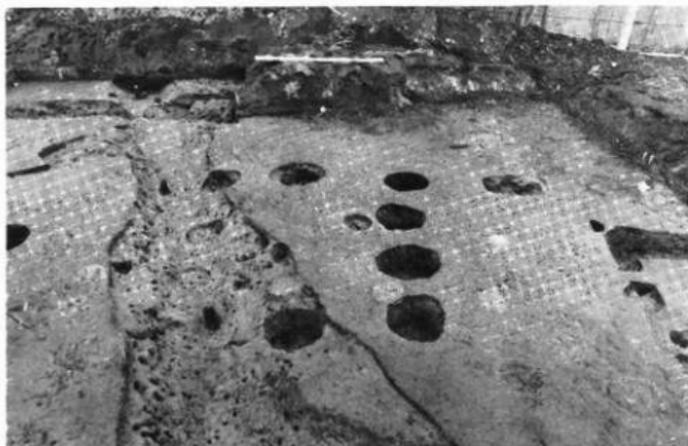


PL. 10. 第 3 号 掘立 建物 址 出 土 遺 物

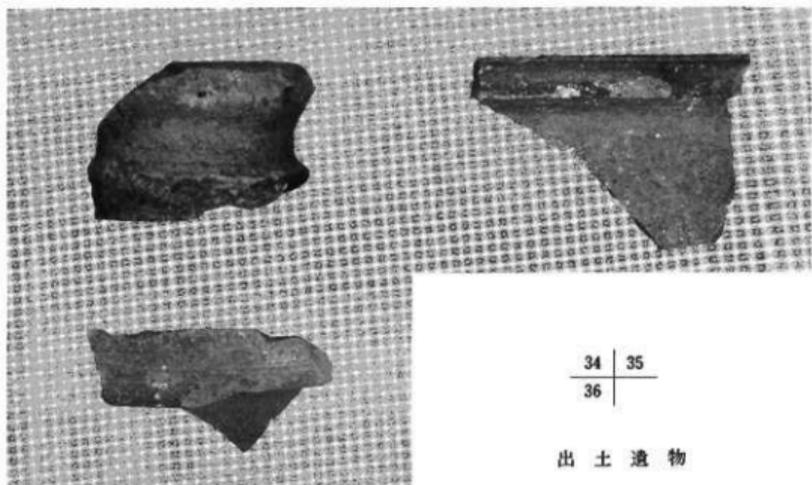


28	29
28	30
31	32

PL. 11. 第 4 号 掘立 建物 址

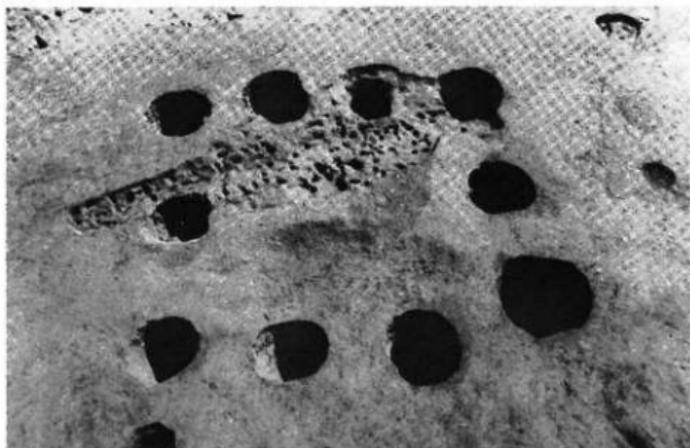


遺 構 全 景



出 土 遺 物

PL. 12. 第 5 号 掘 立 建 物 址

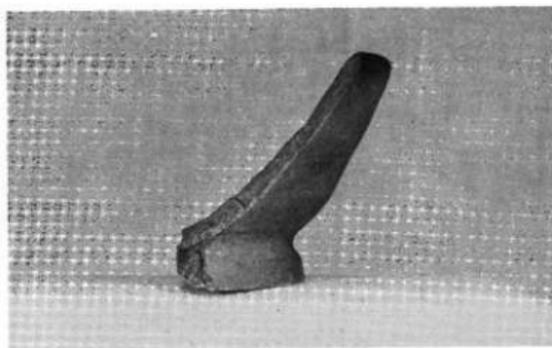


遺 構 全 景



黒 書 土 器 出 土 状 況

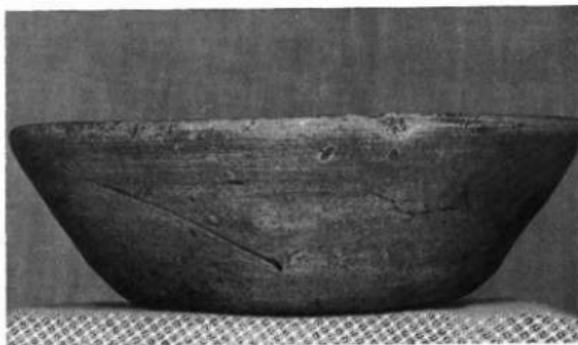
PL. 13. 第 5 号 掘立 建物 址 出土 遺物



No. 39

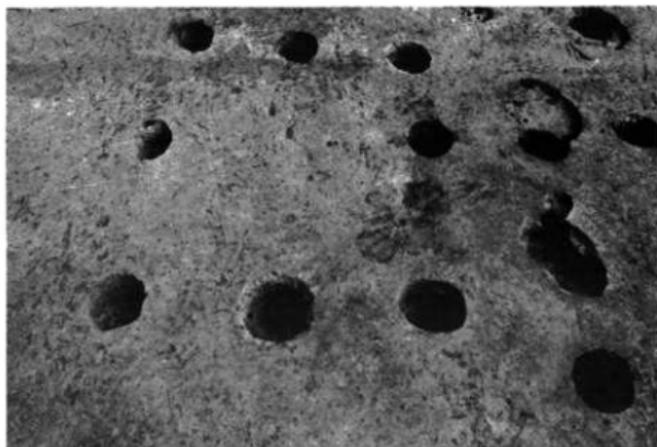
變型土器

No. 40
墨書土器

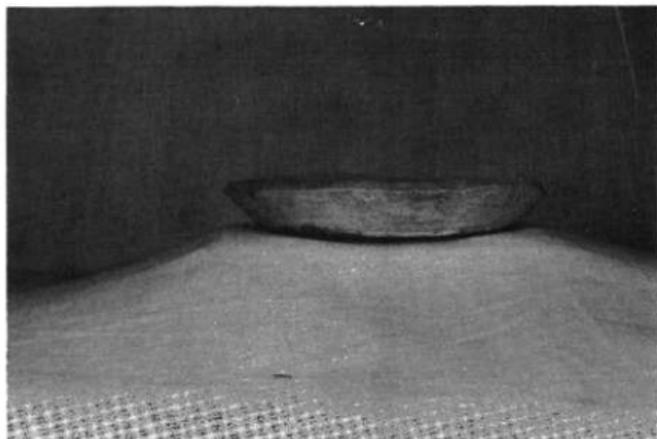


No. 41
墨書土器
墨書名

PL. 14. 第 6 号 掘 立 建 物 址

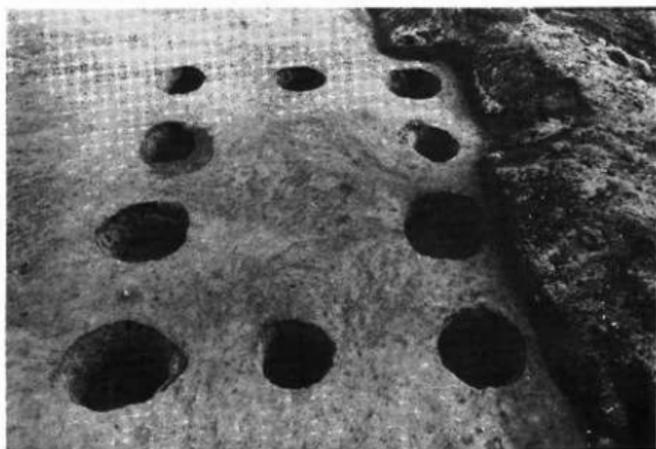


遺 構 全 景



第 6 号 掘 立 建 物 址 出 土 遺 物

PL. 15. 第 7 号 掘 立 建 物 址

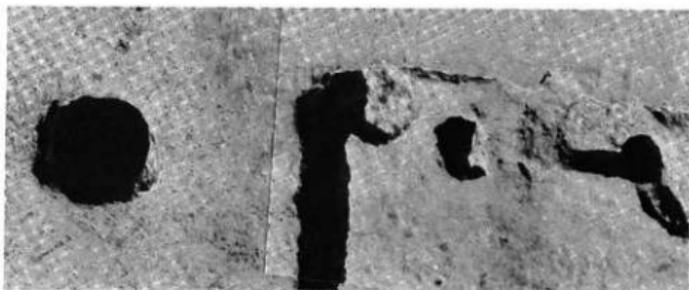


遺 構 全 景



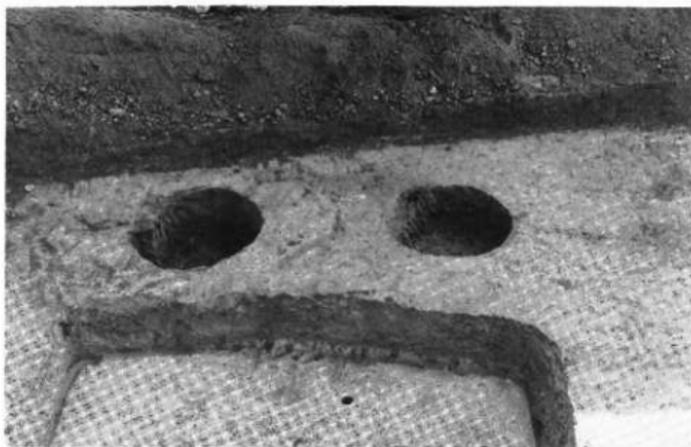
柱 穴 土 層 断 面 (78P)

PL. 16. 第 8 号掘立建物址



遺構全景

PL. 17. 第 9 号掘立建物址



遺構全景

PL. 18. 第 1 号 溝

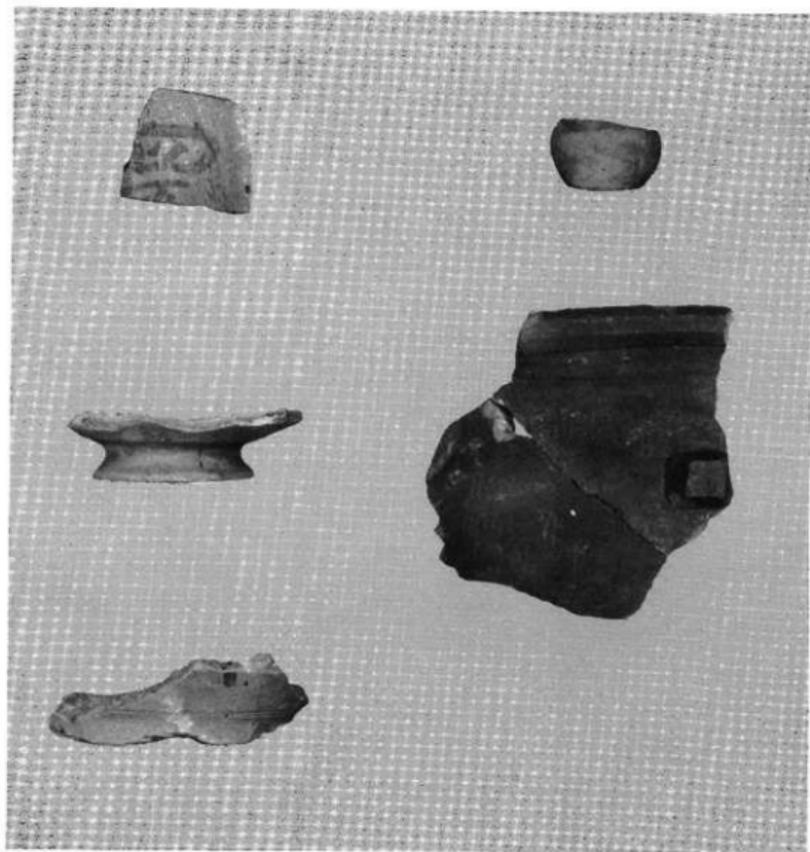


遺 構 全 景

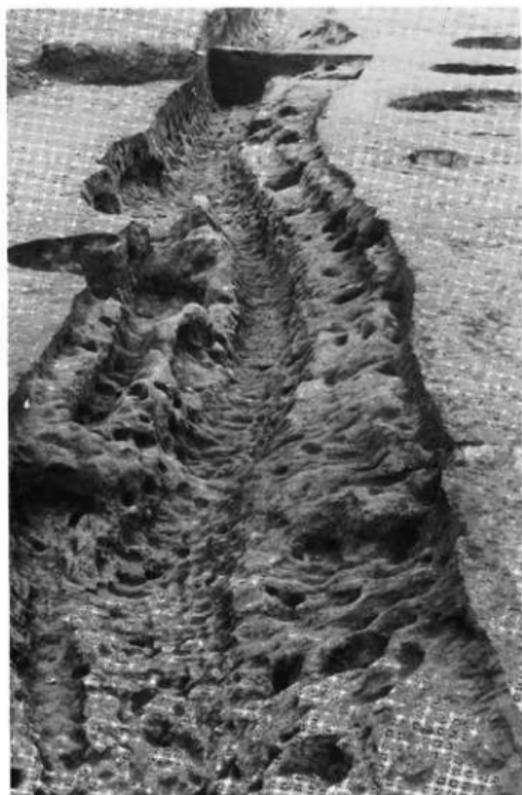


第 1 号 溝 土 層

PL. 19. 第 1 · 3 号 沟 出 土 遗 物



50	51
52	54
53	



北方より中央土層ベルトまで

56

57

58



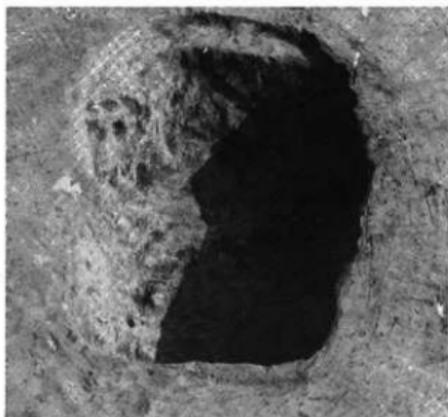
PL. 21. 第 1 号 土 坑

遺 構 全 景



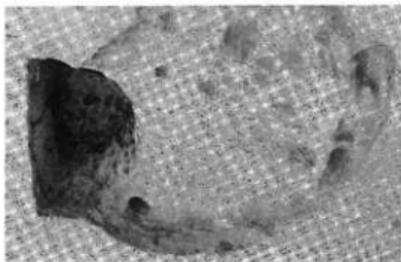
PL. 22 第 2 号 土 坑

遺 物 全 景



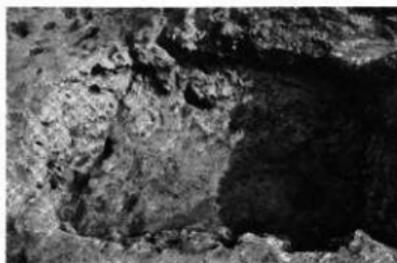
PL. 23. 第 3 号 土 坑

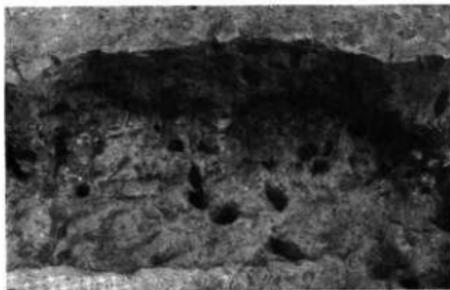
遺 構 全 景



PL. 24. 第 4 号 土 坑

遺 構 全 景



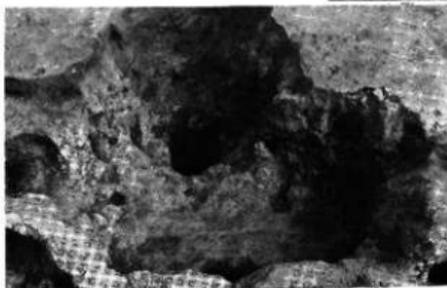
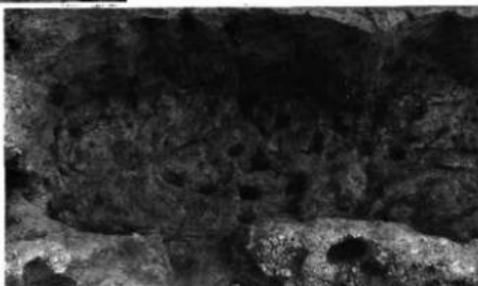


PL. 25. 第 5 号

土 埴 遺 構 全 景

PL. 26. 第 6 号

土 埴 遺 構 全 景



PL. 27. 第 7 号

土 埴 遺 構 全 景

PL. 28. 第 8 号 (1)

土 埴 出 土 甕
(出土甕南方上方より)

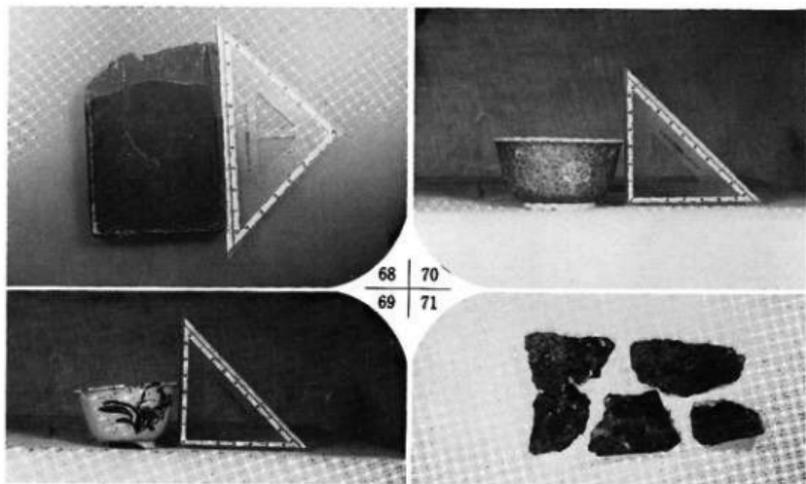


PL. 29. 第 8 号 土 坑 (2)

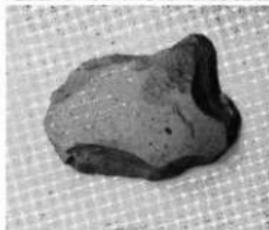
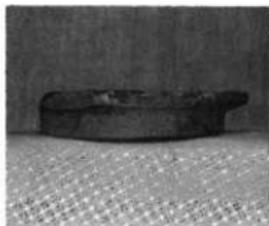


第8号土坑出土壺(南方正面より)

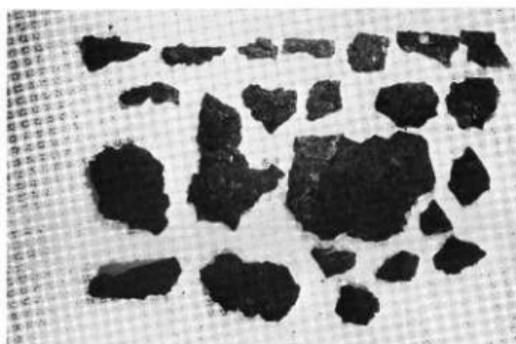
PL. 30. 第 8 号 土 坑 出 土 遺 物



PL. 31. その他の出土遺物



鉄製品



睦小学校遺跡

発行日 昭和56年3月30日

編集者 村田一男・藤原 均

発行者 八千代市遺跡調査会

印刷所 山下印刷

